30 周年記念事業

これからの都市景観のあり方を探る@GINZA

連続講演会＋景観シンポジウム

aaca
日本建築美術工芸協会
2018 - 別冊 2

今回は 30 周年記念事業として、日本随一の商業都市「銀座」の都市景観を分析し、街を活き活きとさせるための建築の可能性を探ることを目的に、３回の連続講演会とそれらを総括する景観シンポジウムを実施しました。

サンゲツの品川ショールームで開催した講演会では、メインストリートの景観に大きな影響を与えた３施設を題材に、それぞれの設計者により銀座の街並みに佇む大規模商業建築のあり方についての考えや銀座の特殊性の読み解きについて、設計のプロセスを交えて解説していただきました。

日本大学ＣＳＴホールで開催した景観シンポジウムでは、東京大学の中島直人先生に基調講演をしていただきました。その後には法政大学の陣内秀信先生にファシリテーターを務めていただき、マーケティングアナリストの三浦展さんや銀座街づくり会議の竹沢えり子さんも加わって、連続講演会で発表された３作品の検証を交えて現在の銀座の街並みや景観についてパネルディスカッションを行いました。変貌する消費社会や経済、文明の変化に都市景観はどう応答するか、銀座におけるこれからの都市景観のあり方などについて活発な議論がなされました。同シンポジウムの参加者は約２２０名にのぼり、銀座の景観のあり方についての注目度の高さを改めて感じることとなりました。

参加いただいた皆様と会の主催に協力いただいた方々に感謝いたします。

文化事業委員会 協力理事　芝山哲也

連続講演会　いずれもサンゲツ品川ショールームにて開催

2018 年 10 月 24 日 開催
§1. GINZA SIX　銀座の多様性 / 回遊性 / 持続性
鹿島建設株式会社　建築設計本部
専任マネージャー　**坂本弘之**

2018 年 11 月 20 日 開催
§2. 東急プラザ銀座　「光の器」 -vessel of light-
株式会社日建設計　設計部門
設計主管　**畑野了**

2018 年 12 月 7 日 開催
§3. GINZA PLACE　新しい銀座のアイコン -FRETWORK-
大成建設株式会社　設計本部
室長　**山本実**

景観シンポジウム　2019 年 2 月 20 日　日本大学駿河台校舎 1 号館 CST ホールにて開催

■ 基調講演　「銀座の都市景観を議論するために」　中島直人（都市計画家 東京大学准教授）

■ パネルディスカッション

ファシリテーター

陣内秀信（建築史家 法政大学特任教授）
1947 年 福岡県生まれ
1983 年 東京大学工学博士
1982 年から法政大学工学部建築学科専任講師、助教授、教授
2007 年 法政大学デザイン工学部教授
2018 年 法政大学江戸東京研究センター特認教授
ローマ大学名誉学士、アマルフィ名誉市民。イタリアを中心に、イスラム圏を含む地中海世界、東京の都市研究・調査を行う。

パネラー

中島直人（都市計画家 東京大学准教授）
1976 年 東京都生まれ
2006 年 東京大学工学博士
2002 年から東京大学大学院助手、助教
2010 年から慶應義塾大学専任講師、准教授
2015 年から東京大学、慶應義塾大学准教授
都市計画・都市デザインの研究を行う。

三浦展（マーケティングアナリスト）
1958 年 新潟県生まれ
1982 年 一橋大学社会学部卒業　（株）パルコ入社。マーケティング情報誌『アクロス』編集室勤務。
1986 年 同誌編集長
1990 年 三菱総合研究所入社
1999 年「カルチャースタディーズ研究所」設立
消費社会、家族、若者、階層、都市などの研究を踏まえ、新しい時代を予測し、社会デザインを提案している。

竹沢えり子（銀座街づくり会議 事務局長）
東京都生まれ
慶應義塾大学文学部卒業
全銀座会、（一社）銀座通連合会、銀座街づくり会議・銀座デザイン協議会事務局長。
出版社勤務、企画会社経営を経て、1992 年頃より銀座まちづくりに関わる。
2011 年 東京工業大学工学博士　博士論文にて日本都市計画学会論文奨励賞を受賞。

坂本弘之（GINZA SIX 設計者）
1953 年 東京都生まれ
1979 年 鹿島建設株式会社建築設計本部入社
2013 年 同社専任マネジャー

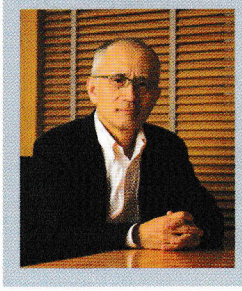
畑野了（東急プラザ銀座 設計者）
1979 年 大阪府生まれ
2002 年 神戸大学工学部建設学科卒業
2006 年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了
2006 年 株式会社日建設計入社
2016 年 同上設計主管

山本実（GINZA PLACE 設計者）
1966 年 島根県生まれ
1990 年 大成建設株式会社設計本部入社
2010 年 同社設計本部室長

連続講演会 §1. GINZA SIX　銀座の多様性 / 回遊性 / 持続性

開催日：2018年10月24日（水）
会　場：サンゲツ 品川ショールーム

日本有数の商業地・銀座の魅力とは何だろうか。
さまざまな人が訪れる街、碁盤目状に広がる通りと複雑入り組んだ路地による街歩きの楽しさ、老舗と最先端の店舗が共存し、建て替えが盛んに行われ、常に賑わいのある街並みが形成されている街・銀座。
銀座の街の「多様性」、「回遊性」、「持続性」から GINZA SIX を考える。



登壇者：坂本弘之氏　GINZA SIX 設計者　鹿島建設

■略歴
1953年 東京都生まれ
1979年 鹿島建設株式会社建築設計本部入社
2013年 同社専任マネジャー

■主な作品
2003年 サエグサビル本館ビル（アップルストア銀座）改修工事
（グッドデザイン賞、BELCA賞）
2010年 三越銀座店新館新築工事及び本館改修工事
（グッドデザイン賞、BELCA賞）

今回の GINZA SIX の建築設計は、谷口建築設計研究所と KAJIMA DESIGN とで設計共同体を組成して対応しました。但し、商業部分の共用ゾーンのデザインは、キュリオシティがやっています。また、中央通りに面していろいろなブランドがいろいろな外装を展開していますが、その外装のデザインは、各テナントがデザイナーをよんで選定しているという役割分担です。

次に、このプロジェクトの大きな流れとしては、２００３年に、超高層計画案が発表されました。２００５年から谷口吉生氏が参画され、その３年後の２００８年、現在の６６mの計画案に決定した経緯があります。我々がこのプロジェクトに参画することになったのは、それからまた数年経て、鹿島が特定業務代行者に選定された２０１２年からとなります。この時から私どもは谷口建築設計研究所とコラボレーションして、設計を進めたということです。

プロジェクト経緯

	GINZA SIX 再開発協議	銀座街づくり会議	aaca 景観シンポジウム
1998		地区計画「銀座ルール」条例化	
2003	銀座六丁目地区 街づくり協議会組織	銀座6丁目計画発表（超高層案）	
2004		第1回街づくり会議	
2005	谷口建築設計研究所 参画		
2006	谷口建築設計研究所より 計画提案（低層案・高層案）	大規模計画説明会（三越、歌舞伎座、銀座六丁目） 改正「銀座ルール」及び銀座デザイン協議会設立	
2007			
2008	谷口建築設計研究所より 街づくり会議に新計画案提示	銀座六丁目 新計画案提示（66m案）	
2009			
2010	準備組合設立		
2011	都市計画決定		・「東京の都市景観を考える」
2012	特定業務代行 鹿島選定 組合設立・事業認可		
2013	権利変換計画認可 既存建物解体工事着手	全銀座会・銀座街づくり会議への 銀座6丁目計画の建築説明会開催（全11回）	・「21世紀の歌舞伎座と銀座」
2014	本体工事着手		・明治神宮と原宿 ・新しい都市景観へ　-東京のこれから-
2015			・アートが創る都市空間 -新宿ｱｲﾗﾝﾄﾞﾀｳﾝから虎の門ﾋﾙｽﾞへ- ・東京オリンピック・パラリンピックと都市景観
2016			・近郊ターミナルの景観づくり「二子玉川ライズ」 ・「とらまｴﾘｱｶﾌｪ・豊島区新区庁舎の計画とﾃﾞｻﾞｲﾝ」
2017	竣工・グランドオープン	銀座街づくり会議 地域シンポジウム 「街並みに建築家が果たす役割とは？」	・「個と群」アーティストと建築家のコラボレーション ・都市に緑を・地下に光を
2018			・ローカリティを魅せるしつらえ

7

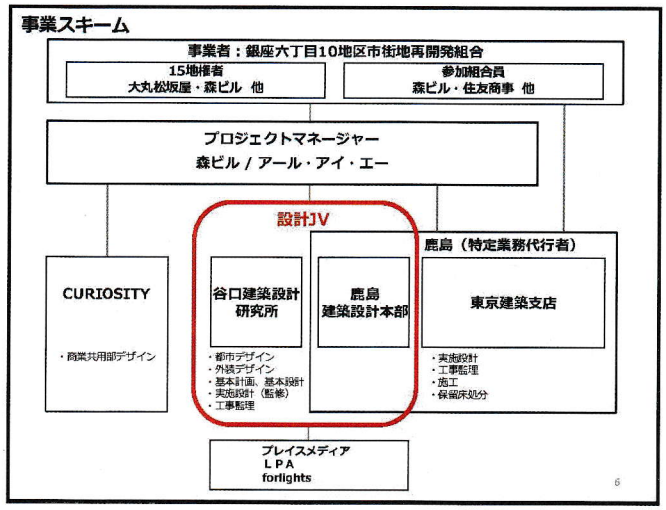
「銀座」で、継承すべき歴史というのは何だろうという事を考えました。江戸時代の銀座があり、その後、明治の赤レンガ時代の銀座がある。そして関東大震災を経て復興した銀座があり、太平洋戦争の空襲を経て、今の銀座があります。街並みは結構そのまま残っています。一貫して存在する賑わいだけは、何とかつくらなければいけない、銀座にとって必要不可欠であるということを感じ取りました。従って、少なくとも我々のつくる建築は、賑わいを発信したり誘発するものでなければならないというところを合意しながら、設計を進めていきました。

そして時間を経過してもその時代の空気を感じ取り、にぎわいを誘発したり、発信したりすることが非常に重要であり、建築としての一貫性といったものも同時に持たなければならないと感じました。

そういう中で、「多様性」「回遊性」「持続性」というキーワードを掲げました。

計画地は１１０mを超す中央通のファサードと奥行きが７０mで、広さでは銀座随一だということがわかると思います。

少し付け加えさせていただくと、再開発事業として開発組合を組成しているということと、我々と組合の間に、森ビルさんとアール・アイ・エーさんが間に入って調整をしていただいたということがあります。もう一つ、我々の協力者として、ランドスケープでは宮城俊作さんのプレイスメディア、照明デザインでは、面出さんの LPA とか、フォーライツといったところと協働して設計を進めました。

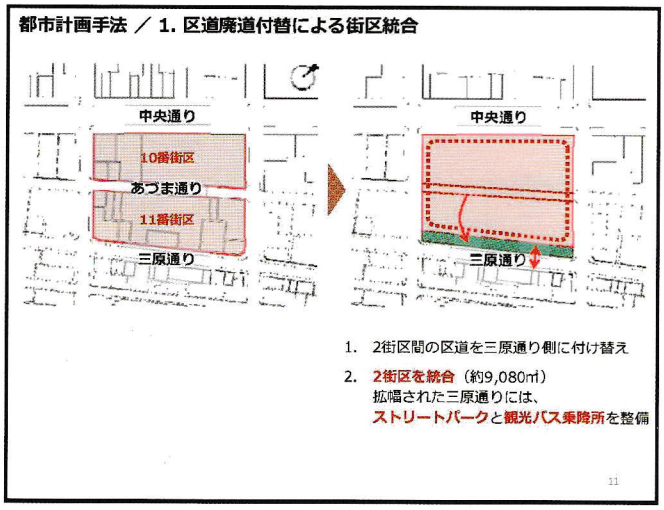


用途・構成・規模

商業施設、事務所、能楽堂が入る多目的ホール、地域冷暖房施設(DHC)、大規模駐車場というものが主な用途です。尚、地域冷暖房は GINZA SIX の裏にあるウォールビルにあるメインステーションに対する、サブステーションとしての位置づけとなっています。

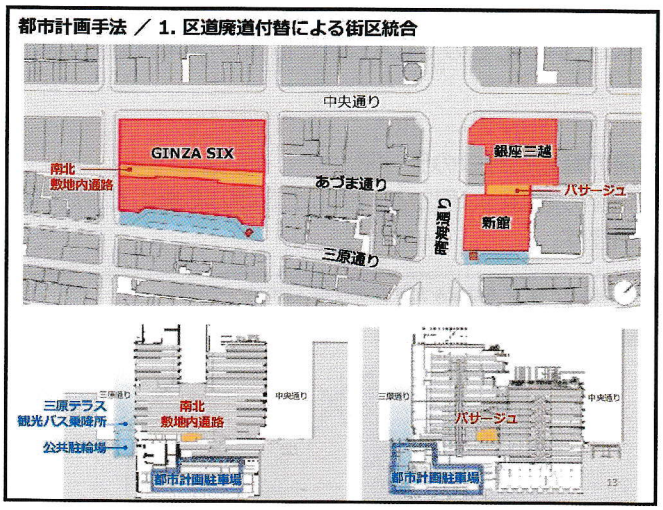
規模は、地上１３階、地下６階。ペントハウス２階で、５６ｍプラス１０ｍという銀座ルールに基づいています。容積割り増しをもらい、約１４万８０００㎡の規模になっています。

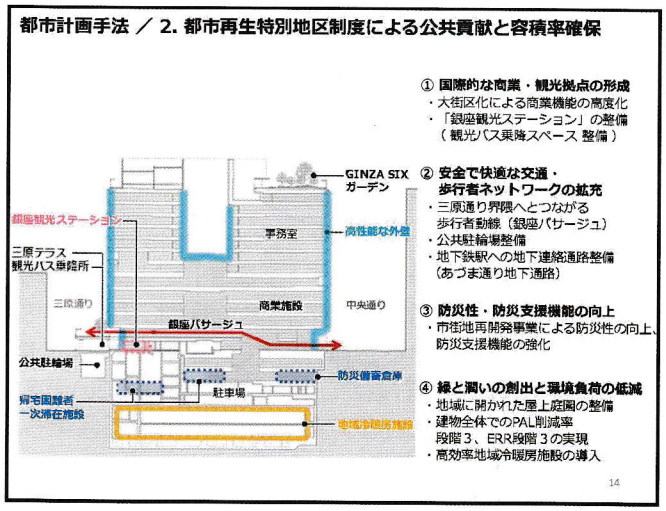
断面構成としては地下２階から６階までが商業施設になっていて、その上に１３階まで事務所が乗っています。地下については、地下３階の能楽堂の他、５００台規模の駐車場、及び DHC の構成となっています。



まず、二つの都市計画手法についてご説明します。一つは区道廃道付け替えによる街区統合、もう一つは都市再生特別地区制度による公共貢献等容積確保です。

２街区に挟まれた区道・あづま通りを三原通り側に付け替え、街区を統一しています。拡幅された三原通りにはストリートパークと観光バス乗降所を整備し、旧区道部分は通行機能を残し、歩車分離された敷地内通路として整備しています。





道路の付け替えについては銀座三越でも同じような手法を用いました。三越では三原通り側に駐車場の入口ができてしまいました。歩道は連続させて独立して駐車場の入り口を設けるという工夫はしたのですが、GINZA SIX では四方が道路に面しており、裏をつくれないということで、駐車場の入口を廃道後の敷地内通路に設けたところが特徴です。三越よりも一つ進化したと思っています。

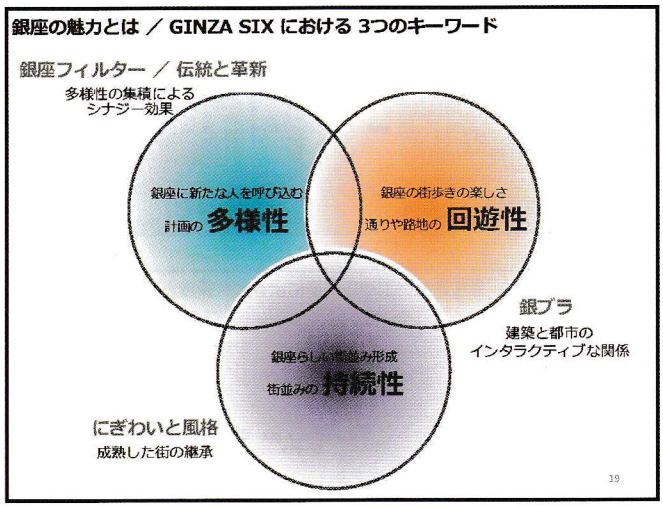
もう一つ、都市再生特別地区です。容積割増しを受けていますが、そのための公共貢献について簡単に説明します。

これは地元や中央区の要望を吸い取りながら、まずは国際的な商業観光拠点の形成。次には安全で快適な歩行者ネットワークの拡充、それから防災性、防災支援機能。　最後には、緑と潤いの創出ということで、公共貢献を行っています。銀座通りで常態化していた観光バスの路上駐車対策ということもあり、観光バスの乗降所を拡幅した三原通り側に設けています。それに伴う形で、観光案内所も併設しました。そして、安全で快適な歩行者ネットワークの形成を目的に、三原通りにテラスを設けたり、公共の駐輪場を設けたり、GINZA SIX と地下鉄の駅を地下道でつなぐ

ということを行いました。防災対策としては、３０００人規模の帰宅困難者の一時受け入れ先と、それに伴う備蓄倉庫の整備。環境負荷対策としては、屋上緑化、高効率のDHCといったものでCASBEEはＳクラスを実現しました。

銀座の魅力と三つのテーマ

銀座の魅力とは何かということについて考えてみたいと思います。



三つのキーワードの一つ目が「**多様性**」です。これはデザインルールの中でも、「多様な用途や活動によるシナジー効果が期待されている」と書かれていますし、銀座に新しく街を訪れる人を呼び込むことにもなると考えています。「伝統と革新」といわれる、よく銀座で使われる言葉も、時間の経過による多様性の一つではないかと考えています。また、少し強引ではありますが、「銀座フィルター」という言葉も、単に多様であればよいというのではなく、多様性の中から銀座の歴史による淘汰があって初めて、この言葉が成立するのかなということで考えました。

次は「**回遊性**」です。これは銀座では「銀ブラ」と言われたりする面的な広がりがあり、通りだけではなく、路地を散策する楽しさがあります。これは割りと皆さんに認知されていることかと思います。建築をつくる側から言うと、建築と都市のインタラクティブな関係をつくるということかと思います。

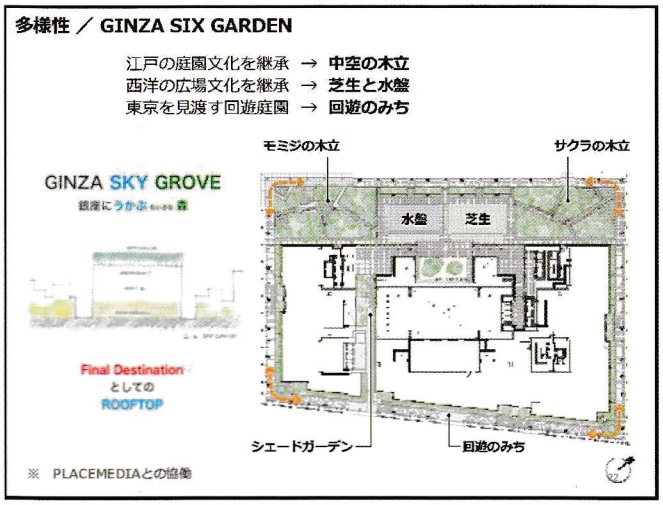
三つ目が「**持続性**」です。これは銀座における持続性として、成熟した銀座のような街をどのように継承していくかということで考えています。広い意味で言うと、まちづくり協議会の活動そのものが、まさにこういう持続性、銀座の魅力の一つになっているのかと思っています。

「多様性」

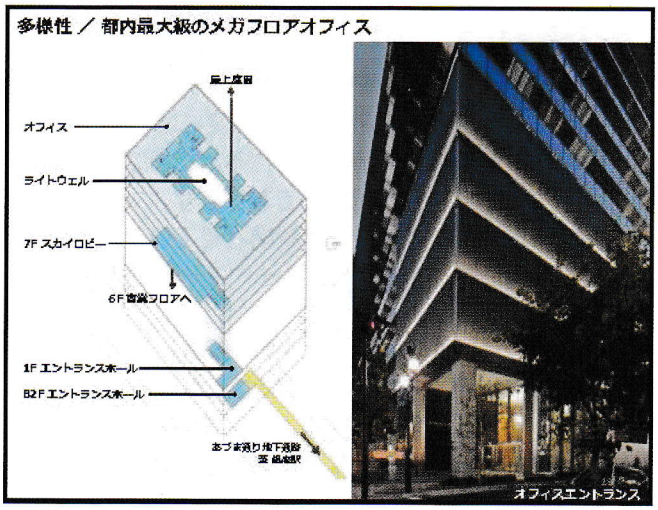
施設の中で、どのような計画の多様性があるかを紹介します。

GINZA SIXガーデンです。そもそも銀座では広場自体が少ないと言われていて、さらに５６ｍレベルにこういう屋上庭園というのも、ちょっと前例がないと思います。４０００㎡の規模に２０００㎡の緑化を行っています。

ここでは、東洋的な回遊式の庭園と西洋的な広場が対比されています。これには、銀座の街が持つ特徴である、近代において最初に西洋と東洋が出合った街という意味合いが含まれています。また、周辺を回遊できるようになっています。建物の外周を回っている「ひさし」とも対応し、１周３８０ｍの外周をめぐることができます。銀座の景色、空中の景色はあまりきれいではないと思いますが、こうやって３６０度、銀座の今を眺めることができ、なかなかおもしろい景色が見られると思います。

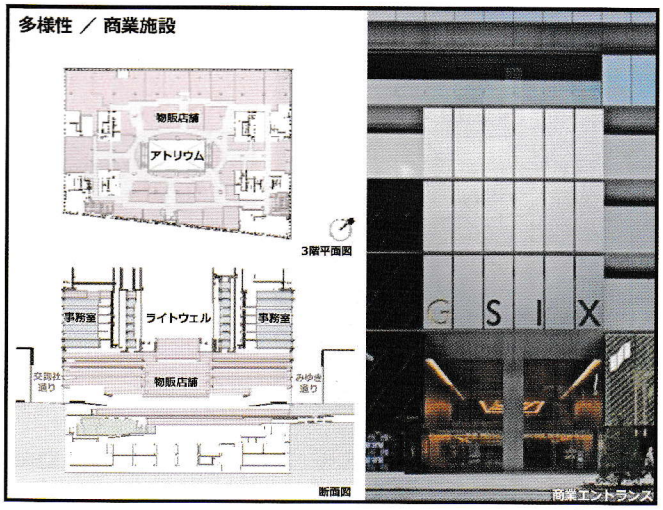


ここでは様々なイベントが催されていて、その表情を変えています。銀座ルールでは５６ｍの屋上には面積が発生するような用途が持てないので、ファッション雑誌の『VOGUE』や宝飾店のPIAGETがカフェを開いたり、チームラボによる光のインスタレーションでなど、テンポラリーな形でイベントを開催しています。施設が固定されない分、企画が重要ですが、様々な利用がされていて、多様性のある空間演出が実現できていると考えています。



オフィスは、都内でも最大級のフロア面積を持ちますが、商業施設の上にあるオフィスで、そのため中央にライトウェルを設け、光を商業施設にまで届けることを考え、またその光をオフィスにも導いています。

１階のエントランスからシャトルエレベーターで７階に上り、そこから２バンクのローカルエレベーターに乗り換えるシステムです。執務空間は長手方向で 113m、短手で２１ｍの無柱空間を実現しています。階高は４ｍほどですが、そこに2.9ｍの天井高さを実現させるため、スラブに梁を埋め込んだり、空調ダクトと排煙ダクトを兼用したりして天井高さを確保する工夫をしています。銀座にあるオフィスという特殊な条件下で、様々な思いでこの銀座にオフィスを構えるテナントの方々がいると思います。その規模もまちまちで、そのため、１フロア丸ごとを借りるテナントもいれば、小割で借りるテナントもいるという具合なので、それに対応できるよう、同心円的にといいますか、中央のライトウェル沿いに共用廊下、その周りに執務スペースを設け、冗長性のあるプランニングを心がけました。テナントの多様性、いろいろな方が働くということも、銀座の魅力の一つかなと思っています。



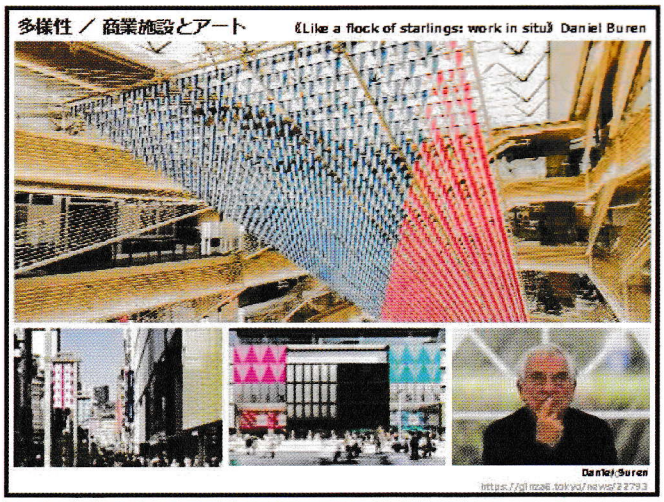
商業です。中央通りに面する商業のメインエントランスです。売り場はだいたい４万７０００㎡ほど、大規模な商業施設です。

中央に吹き抜けがある、ちょっと百貨店的な「館」をイメージしたものになっています。もともとここの地権者であった大丸・松坂屋さんとしては、百貨店をやめて、全く新しい商業施設を目指したのですが、単なる専門店とも少し違う空間になっています。

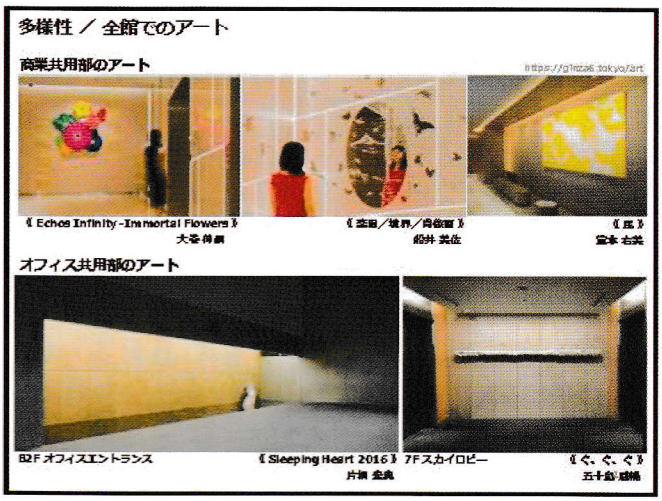
オープン当初は中央のアトリウムには草間彌生さんのアートが展示されていました。

商業部空間の共用部デザインは、日本在住ですが、フランス人のインテリアデザイナー、グエナエル・ニコラさんが率いているキュリオシティが行っています。商業部分の内装は、更新時期の頻度も建築とは異なりますが、今回は建築側で骨格となる空間を与え、それにインテリアが提案するという形で進められました。インテリアデザインの考え方としては、アトリウムを、ダイナミックな、斜めの線を多用した上昇感のあるデザインとし、あえて裏にある通路では非常に銀座的、路地的な空間で、対比して見せたいということが狙いです。

アトリウムのアートは入れ替わり、今はフランス人アーティストのダニエル・ビュレン氏のアートが展示されています。



このアートはちょうど１周年記念とも重なっていたのですが、そのときにはファサードにも彼のデザインのフラッグを貼ったり、通りにまで旗を並べました。建物を超えてアートの展示を行ったことが銀座的かと思っています。



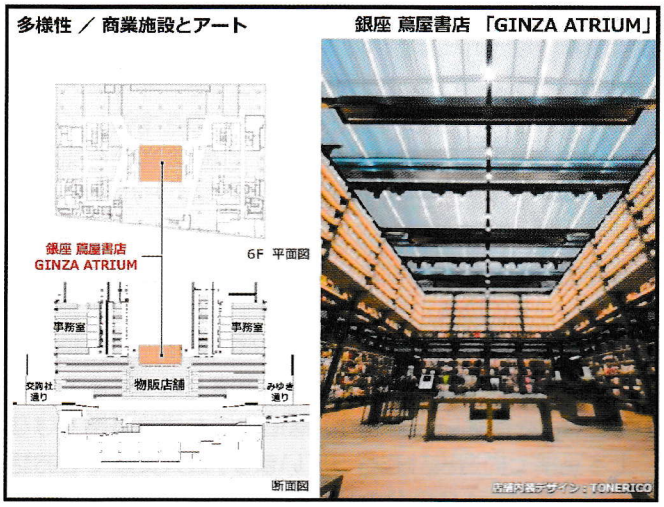
この他にも商業施設の中の３階から５階に小さな吹き抜けがあり、そこには二つのアートがあります。チームラボのデジタルアートとパトリック・ブラン氏の壁面緑化です。

又、商業施設のエレベーターホール脇には、普通の百貨店だとコマーシャルな掲示がなされるところですが、そこにもさりげなくアートが展示してあります。

６階もちょっと特徴的なので説明させていただきます。

食の新しいスタイルとして、フードコート的なサービスを提案しています。

正式にはフードコモン、「食の集いの場」というテーマで、各専門店とシェフたちがここでコラボレーションしているというところがございます。そして特徴的なのは、ここに蔦屋さんが出店していて、カフェもあり、全体が緩やかに融合しています。蔦屋さんでは主にアートの書籍が並べられています。６階では、多様な空間の使われ方がされています。

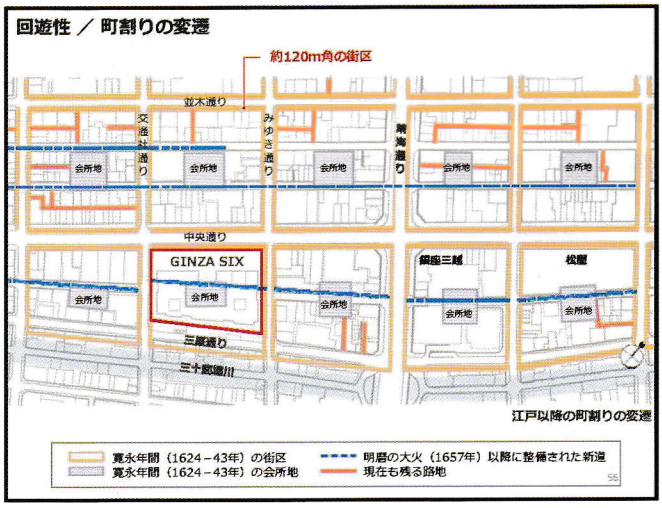


能楽堂です。中央の能舞台は渋谷の松濤にあったものを移設しています。客席は４８０席。店舗の中を通って能楽堂にも行くことができますが、銀座４丁目方面から歩いて来て、三原通り側の回廊を通って、そこにあるコアから下に下りていくというのがメインのアクセスです。複合施設で一番の問題は、音、特に遮音の問題があります。建物内の音の問題と同時に、中央通りには銀座線が、わりと浅いところを通っていることもあり、その騒音も配慮して配置計画も考えました。また、能楽堂自身も、完全な浮床・浮壁・浮天井として遮音を行いました。能の上演には非常に重要な「見附柱」がありますが、この柱は取り外せるように考えていて、多目的ホールとして使う場合の配慮として、こういう空間の多様性を意識しました。

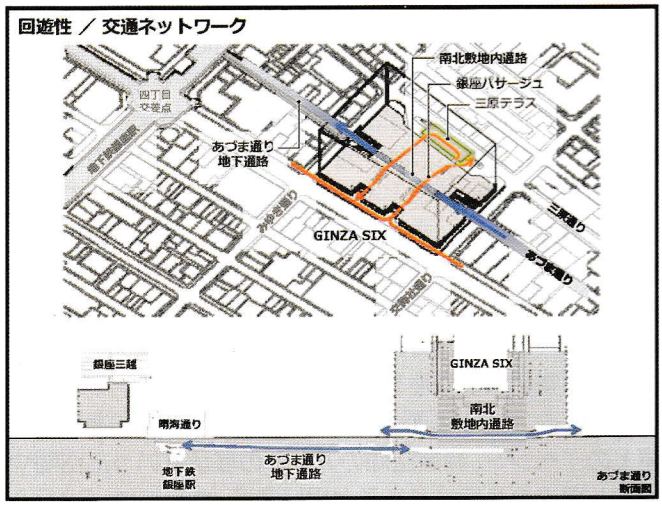
多様性については、計画、プログラムの多様性もあれば、屋上のイベント、商業空間のアートの展示といった空間やソフト面での多様性もあると思います。さらには、GINZA SIXでいろいろな人が働いているという多様性というものも、銀座の魅力としてあるのかなと考えています。

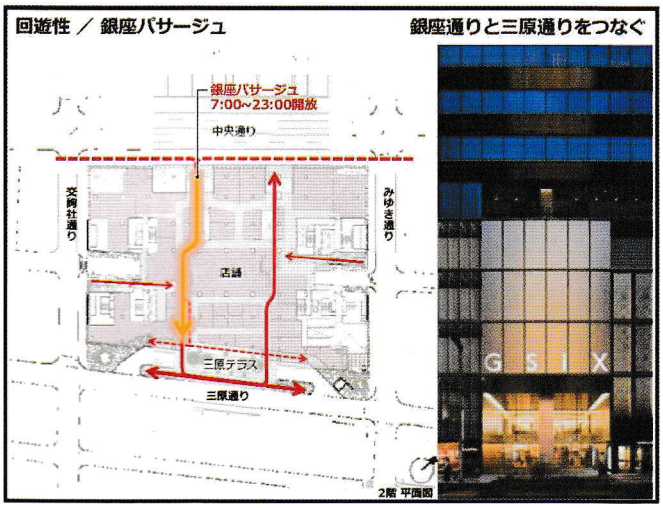
「回遊性」

銀座の街は、江戸時代の街区割からできていて、１２０m角の街割が見てとれます。GINZA SIX の敷地も確かに大きいのですが、一応この街区割を守っているということと、そこにさまざまな路地があったり、明暦の大火後にできた道として、今回、廃道しましたあづま通りというものがあります。また、もともと中央には会所地というそれぞれの街区の共有地みたいなものがあったのですが、これがGINZA SIX でのアトリウム空間と重なっているのかなと思います。



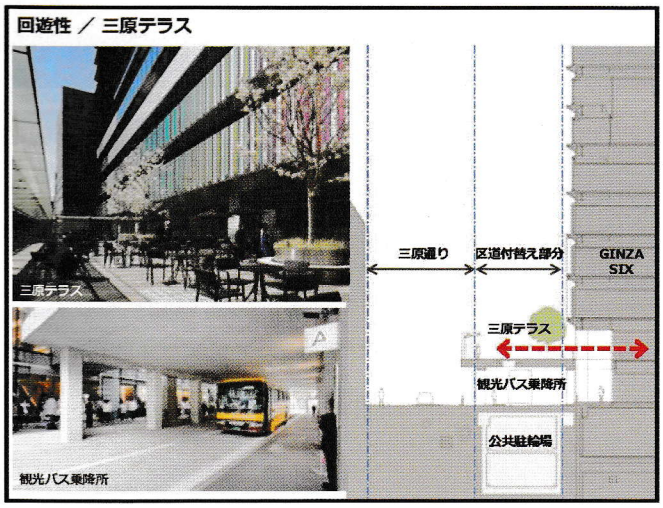
歩行者ネットワークについて、建築と都市、銀座の街をつなぐインタラクティブな仕掛けとして、まずはあづま通りの貫通通路があります。それから、大規模な建物が人の流れを閉ざすことがないよう、銀座通りと三原通りをつなぐ「パサージュ」というものをつくりました。それがまた建物内の回遊にもつながっています。



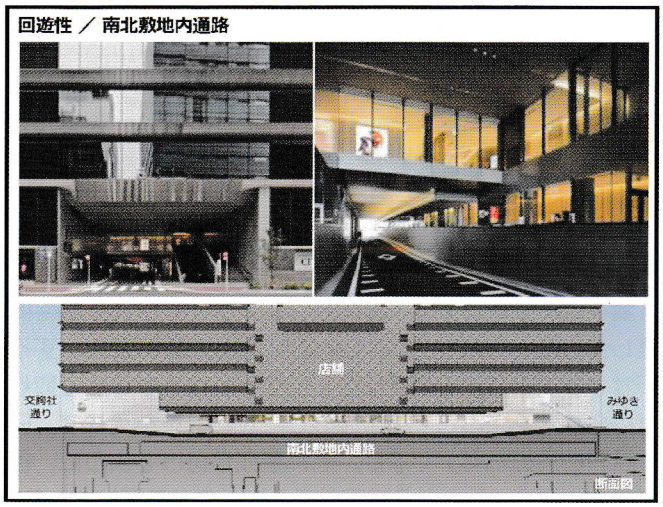


これは平面的にみた、２階をメインフロアとする建物内の回遊動線を示しています。「銀座パサージュ」だけでなく、いろいろなところからアクセスができ、非常に大きな建物をつくりながらも、回遊性というものを増強しているということです。「銀座パサージュ」は朝７時から閉店後の２３時まで銀座の三原通りに通り抜けることができます。

また、GINZA SIX ガーデンのある屋上にも朝７時から２３時まで行けるようになっています。 むしろ、この「銀座パサージュ」の先に設けた「三原テラス」が、回遊性には貢献していると思います。これはバス乗降所の施設として成立していますが、敷地ではない道路上につくっているので、やむを得ないのですが、構造的にも建築基準ではなく土木基準で構造設計を行っています。公共貢献でもお話ししましたが、４００台の公共駐輪場が下にあり、バスの乗降所があります。そして上にあるのが「三原テラス」です。駐車場として４mの天井高さを確保しなければいけないということと、「三原テラス」への２階からのアクセスしやすさのためのレベル合わせでは非常に苦労しました。

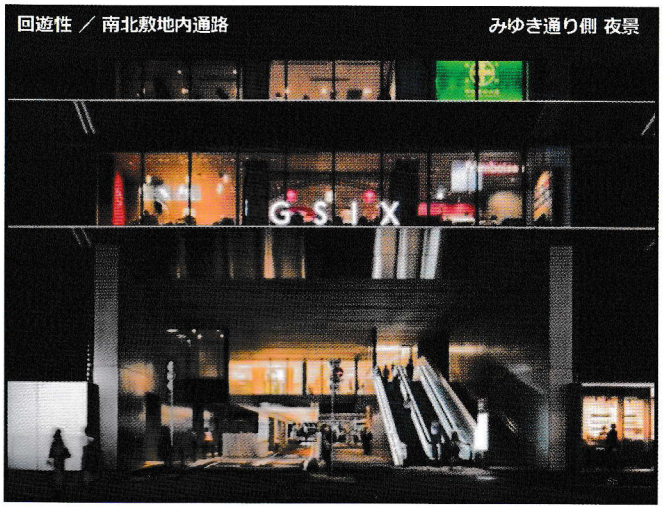


銀座全体のファッションウィークの時のファッションショーでは、GINZA SIX に限らない、建物だけの企画ではなく、街に開かれた使い方がされていました。ここでは銀座三越さん、東急プラザさん、松屋さん、和光さんが参加され、街全体でこういうことをやられたのも銀座の魅力だろうと思いました。

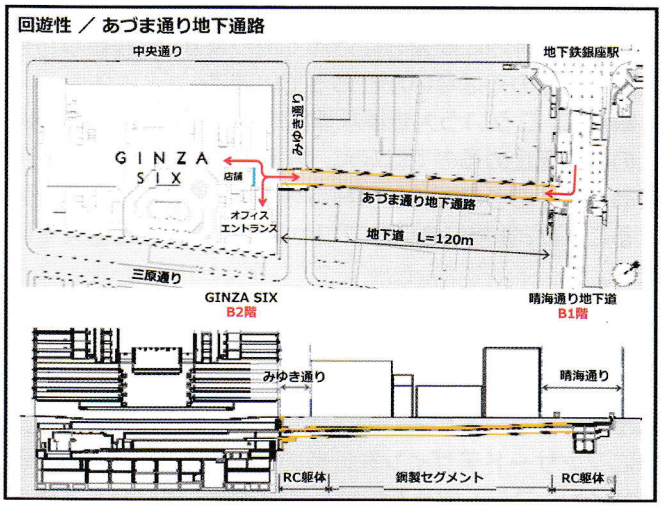


建物を貫通する旧区道の部分です。この建物に裏側がないということで、必然的に駐車場の出入口がここに面してつくられています。ここにも店舗が顔を出していて、商業のにぎわいを演出するように、各テナントには、窓の何パーセント以上をガラスにして中が見えるようにしなさいとか、そういう条件を出しています。

また、２階が商業のメインフロアになっていて、そこの設置性を高めるために、１階の階高が非常に低くなっています。それに対し道路としても車道として４.５mを確保しなければいけないということで、ここは１.５mほど下がり、この南北貫通通路はできています。横にある歩道空間は３mの高さを確保しています。ここではデザイン的には土木的なしつらえ、都市的なスケールを考え、建築的なスケールにならないことを心がけました。コンクリートの打放しも、わりと目地が目立たないようにしたり、高速道路でよく使われているアルミの焼結板、非常に吸音性の高いものを天井に使い、ちょっと建築的なスケールにならないことを心がけました。



夜景の写真です。あづま通りというのは、銀座三越でもそうですが、この区道は百貨店の荷捌き動線になっていたのが実情でした。そういう意味では、こういう歩行者専用道路をつくり、安全を確保しながら、雨天通路としても機能していて、結構人通りもあって、ある程度成功したと言えるのではないかと考えています。



次に、あづま通りの地下通路です。これは GINZA SIX と地下鉄の駅をつなぐ道路ですが、銀座線が比較的浅いところを通っているので、当初は１階とつなぐ予定だったのですが、地中埋設物が出てきて、急遽、地下２階とつなぐことになりました。ここでも土木の構造に建築の内装を行うということで、建築的なスケールにならないように配慮しました。これは構造体ですが、鋼製のセグメントであり、それを見せるようなデザインを行い、通常の地下道にないデザインを試みました。少し照明を絞り、何か新しい世界に出合えるような、ワクワクした感じが出ているかと思います。

これが地下２階とつながるプランとなっていて、二手に

分かれ、オフィスと商業に行くことになったので、正面に光壁を設け、わりと象徴的な通路にできたのではないかと思います。工事の方法として、開削で行うことも考えましたが、あづま通り商店街等の地元の要望があり、シールド工法で掘削しています。セグメントと言われる構造体が１mピッチで、これを１００個以上つないで、この構造ができています。土木的な工事としてはスケールの大きいものではありませんが、こういう都心の工事として、結構な難工事であったということはわかってもらえるかと思います。

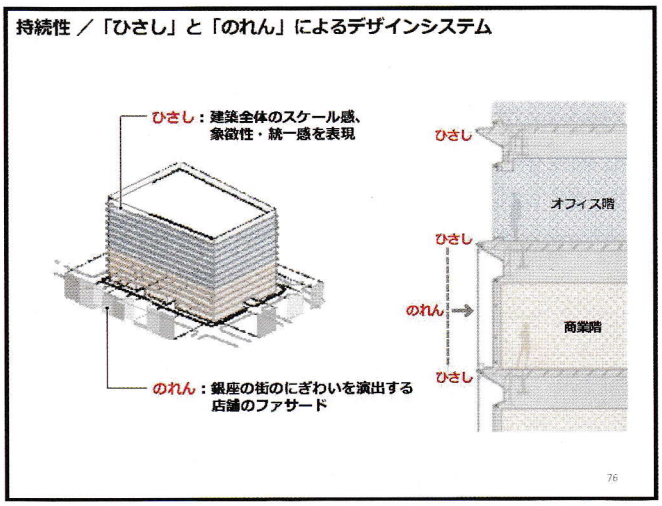
もう一つ、ここは日比谷線にDHCを供給しており、そのために天井内に配管を仕込んであります。割りとうまく処理できたのではないかと思っています。

銀座に、こういう大規模な建築をつくる時には、銀座の人の流れを止めるのではなく、敷地外とか、もともと道路であったところまで設計の関与を広げ、逆に回遊性を増強することが、非常に大切なプロセスではないかと考えています。

「持続性」

最後に、「持続性」についてです。　持続性の意味は、都市のファサードや通りのにぎわいを持続させるために、単にファサードデザインを行うのではなく、持続性のあるデザインシステム自体を提案しているところにあると考えています。１１０mの長さのファサードをつくるのに、１人の設計者がデザインをするのではなく、それぞれが店舗を勝手にデザインするのではなく、設計基準を示して街並みのデザインをつくるという試みを行いました。

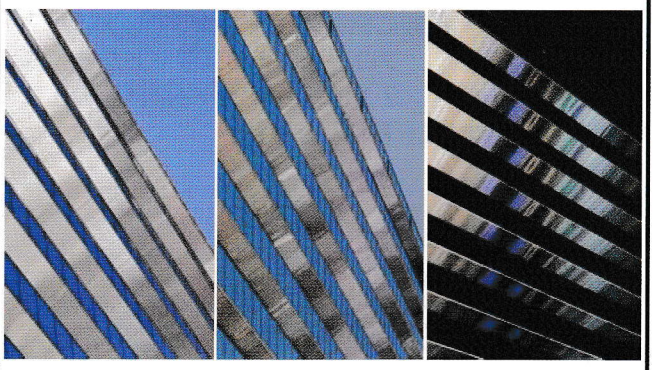
現状の銀座通りのストリートファサードを見ると、５６mの建物が建ってきて、３１mのスカイラインというのは崩れてきていますが、足下を見ると、８mから１０mぐらいの間口の店舗が並んで、にぎわいを出しているのが見て取れます。



我々は「ひさし」と「のれん」のデザインシステムを提案しました。「ひさし」はGINZA SIXの建物を統一するデザインであり、その「ひさし」から吊り下がる形で取り付けられた「のれん」が街並みににぎわいを与えます。日本特有の「のれん」ですが、それを取り付けるように、各ブランドがファサードを提案するということを行いました。当初、ブランド側からは、規制があること自体に反発が示されましたが、粘り強く説明し、説得しました。しかし、各ブランドのデザイナー達は、割りとそういう制約条件を独自に解釈して対応してくれたように思います。

「ひさし」は全体を映し込む意味でステンレスのヘアラインとしました。材料としては、全周にあって、１３層に渡っているものですから、平滑性を出すという意味と重量の観点から、ステンレスの複合板を使っています。

持続性 ／ 変わらない「ひさし」の豊かな表情



時間帯や周囲の状況により、様々な表情をみせる
ステンレス積層複合板 t=6.0 HL #150

これは時間によりヘアラインが、近隣の建物や車のヘッドライトを映し込んで表情を変えている写真です。

商業の「のれん」としてのファサードには1.8mピッチで、モジュールが見て取れると思います。

持続性 ／ 変わる「のれん」　ラグジュアリーブランドの「のれん」

それから、「のれん」のある部分、ここにも、当たり前ですが、「ひさし」があります。この先端が LED のライン照明となっています。これもなぜ、「のれん」のあるところに、照明をつける必要があるのかと言って、商業者の間では議論があったのですが、竣工した時に、街づくり協議会のアドバイザーである小林先生には、この先端照明があるから、全体の統一感を失わずに「のれん」がにぎわいを出しているという評価をしていただきました。小さなこだわりですが、これが銀座の街並みには必要だろうと思います。

また、この「のれん」は実際に取り付けられるまで、隣り合うテナントにも全部秘密になっていました。でも、そのわりには重なりもなく、上手くできたのかなと思っています。

「ひさし」が街並みを映し込んで、「のれん」が街並みににぎわいを与えるという対比的なことを行っています。今後、テナントの入れ替えや時代の流れに対して陳腐化しないように、ファサードも更新される事でしょう。その時、銀座の街並みのスケール感や銀座に相応しいファサードをどの様に継承できるかが、今後の課題だと思います。

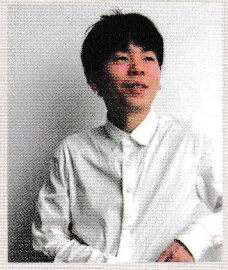
持続性 ／ 変わる「のれん」　中央通り夜景

最後になりますが、我々は「多様性」「回遊性」「持続性」というキーワードで GINZA SIX を見てきました。これらの言葉は、今日、説明してきたように簡単に三つに分けられるものではなく、空間的なものと時間、歴史というものが複雑に重なり合ってできているものと考えています。 この様な空間と時間の積層のようなもので、今後の銀座の新しい個性が生まれて行くように思います。今後も GINZA SIX だけではなく、こういう新たな空間と時間の積層が生まれることで、銀座の新しい都市空間が醸成されることを願い、今日の話を終えたいと思います。

連続講演会 §2. 東急プラザ銀座 「光の器」 -vessel of light-

開催日：2018年11月20日（火）
会　場：サンゲツ 品川ショールーム

インターネットでモノがなんでも買うことが出来る今の時代、我々がわざわざ商業施設に足を運ぶ理由は何でしょうか？我々は東急プラザ銀座のプロジェクトを通じてその問いに答える必要がありました。プロジェクトのスタートから完成まで約9年という長い年月を掛けて銀座という街や敷地の特性を注意深く読み解き、２１世紀の新しい商業施設の在り方を提案するために、なぜコンセプトを「光の器」にしたのか、その理由と合わせてご説明します。

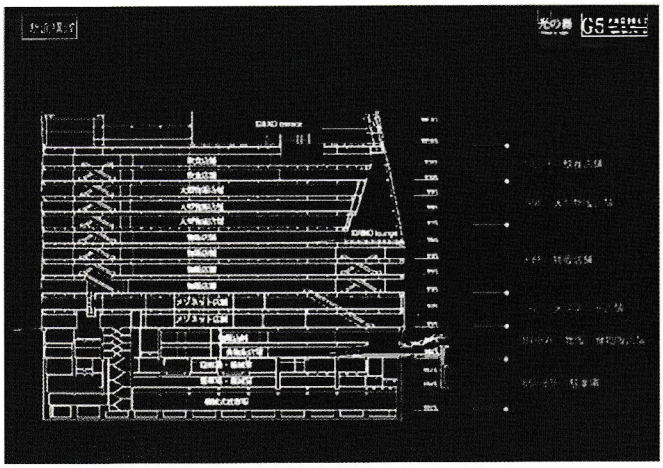


登壇者：畑野 了氏　東急プラザ銀座 設計者　日建設計

■略歴
1979年 大阪府生まれ
2002年 神戸大学工学部建設学科卒業
2006年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了
2006年 株式会社日建設計入社
2016年 同上設計主管

■受賞歴
2016年 JCD DESIGN AWARD
2017年 日本建築家協会優秀建築選、World Architecture Festival、PRIX VERSAILLES Award Citation、IES Illumination Awards Highly Commended、グッドデザイン賞、日本照明賞、照明普及賞
2018年 日本建築学会作品選集

東急プラザ銀座は２００７年に東急不動産様が土地を取得され、２０１６年３月に開業を迎えました。はじめに、東急プラザ銀座の計画概要をご説明したいと思います。敷地は約３７００平米、延床約５万平米の大型商業施設です。基準容積率８００％に加え、銀座地区特有の高度利用地区の緩和により３００％のボーナスを受け、１１００％の容積率の中で計画しています。



建物の高さは銀座に建てられている他の建物と同様に、銀座ルールによる高さ制限の５６m プラス工作物１０mで最高高さ６６mとなっています。四周を道路に囲まれ、晴海通り、外堀通り、みゆき通り、数寄屋通りと、それぞれ特徴のある通りに挟まれた敷地となっています。敷地北西側には数寄屋橋公園があり、晴海通りを挟み銀座の貴重なパブリックスペースとなっています。断面構成はすべて商業施設で構成され、屋上にキリコテラス、６階にキリコラウンジというパブリックスペースがあります。地下２階で東京メトロ丸ノ内線のコンコースと接続し、B3～B5階が駐車場、機械室関連となっています。

インターネットでものが何でも買える時代において、我々がわざわざ商業施設に足を運ぶ理由は何でしょうか。我々はこのプロジェクトを通じて、その問いに答える必要がありました。今回のプロジェクトは、様々な与件がありました。一つ目は敷地への応答。二つ目は銀座という街へどのように調和するか。三つ目は商業施設というタイポロジーに対して。四つ目はクライアントである東急不動産様の要望です。それぞれについて説明したいと思います。

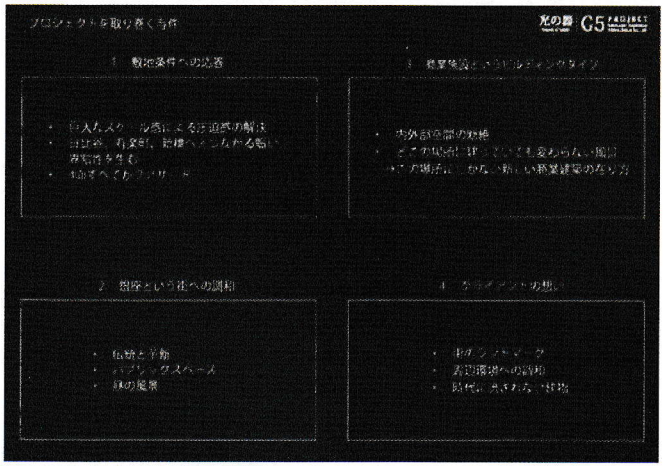
まず敷地の特徴を説明します。敷地は銀座地区のエッジにあり、大丸有や日比谷につながる銀座のゲートとも言える場所にあります。また街区のスケールについてですが、銀座には珍しいワンブロックの開発となっています。長辺１１０m、短辺３２m の巨大なスケール感を持つ敷地です。ワンブロックであることから四周を道路に囲まれた、どこからでも見える敷地となっています。続いて、敷地の歴史を簡単に紹介したいと思います。１９２３年の関東大震災の復興として、現敷地に１９３４年、共同建物ビルが建設されます。設計は東京タワーの設計者としても有名な内藤多仲で、当時としては最先端をいく鉄骨鉄筋コンクリート造として設計されました。その後、戦争をくぐり抜け、１９６６年にこちらも当時としてはたいへん珍しいカーテンウォールを外側から張り付けることで、商業施設としてリニューアルオープンしました。戦争をくぐり抜け、各時代の最先端を取り入れてきたこの敷地に立つ東芝ビルは、銀座を象徴する建物の一つとして人々に親しまれてきた建物でした。この歴史ある敷地に対し、どういった建物を計画するのか、我々は考える必要がありました。

二つ目の銀座の街の特徴について、簡単に説明したいと思います。銀座はご存じのとおり、日本でも最大の商業地であり、古くから流行の発信地として栄えてきました。ありとあらゆる文化や流行が、銀座の街から生まれてきました。その中で、流行が淘汰され伝統になり、また新しい流行が生まれる。そういった新陳代謝を繰り返してきた街です。すなわち、新しいものと古いもの、我々は「伝統と革新」と呼んでいましたが、それが共存する街と言えます。また、きらびやかな大通り、雰囲気のある路地など、さまざまなスケール感を持った街でもあります。また銀座はその地価の高さから、公園やパブリックスペースが地区内にほとんどありません。昨今、都市におけるパブリックスペ

ースの重要性が各方面で謳われていますが、銀座の街をより魅力的なものとしていくには、商業施設のパブリックスペースのあり方が重要になってくると考えていました。銀座は、夜はきらびやかに美しく光る街ですが、昼はガラスの全反射などにより、意外とのっぺりした表情のビルが多く感じられます。前述した地区計画により、容積が割り増しされている高容積の街であるため、昼は意外と圧迫感を感じる街となっています。昼にも今までと違う、商業施設の表情をつくる必要があるのではないかと考えていました。

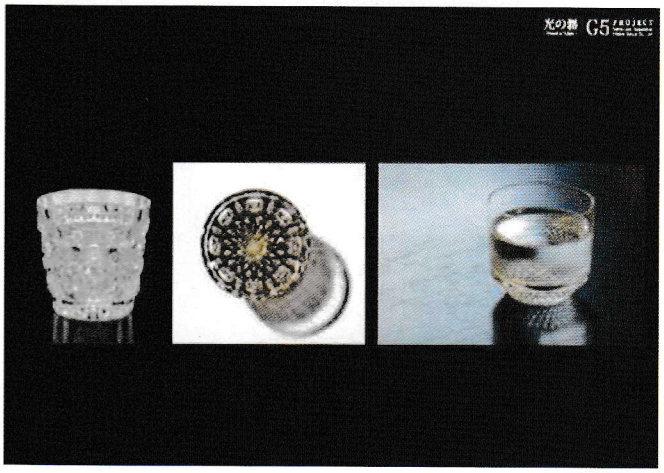
三つ目として、商業施設というビルディングタイプについて少し触れたいと思います。大きく言ってしまえば、西洋の百貨店を基に発展した日本の商業施設は「ハコ」としてつくられてきました。外部の世界を拒絶し、内部に非日常の世界観をつくることが、日本の商業施設の設計におけるオーソドックスな手法となってきました。こういった商業施設は外部から中の様子が分からず、記号化されたサインが外壁に取り付けられ、人々に情報を伝えます。日本の商業施設における内外空間の断絶が、本当にこの時代によいことなのか、我々は疑問を感じていました。そして、このオーソドックスな商業施設の形式を打ち破り、日本らしい、銀座らしい商業施設のあり方を見直すことが、これからの新しい商業施設のデザインに必要だと考えました。

最後に、四つ目の事業主である東急不動産様の求められた与件を説明します。一つは東エリアにおける東急プラザのフラグシップとして、街のランドマーク、シンボルとなるような建物にすること。また、銀座エリアにふさわしい品格を備えたビルにすること。最後に、時代により左右されない、時間がたっても人々に愛されるビルにすることが、クライアントの強い思いでした。



ここで一度、与件をまとめたいと思います。敷地条件への応答として、巨大なスケール感による圧迫感の低減。日比谷、有楽町、新橋へとつながるにぎわいや界隈性を生むこと。４面すべてをファサードとしてデザインすること。二つ目の銀座という街への調和として伝統と革新、すなわち新しさと品格を備えること。また、パブリックスペースをどうつくるのかということと、昼のファサードがつくる風景のあり方です。三つ目は、商業施設というタイポロジーに対し内外空間が断絶していること。どこの場所に立っていても、変わらない空間に対する場所性の復権。最後に、クライアントの思いとして、街のランドマークとして時代に流されず、人に愛される建物をつくることが求められました。

これらの与件を踏まえた上で、我々が考えた「光の器」というデザインコンセプトの説明を行います。カットガラスに代表される透明なガラスの器は、それ単体でもプロダクトとして美しいものですが、中に液体が入ることにより、その機能を満たし、より本来の美しい姿になると言えます。また、光の種類、反射、透過、屈折などのさまざまな現象により、その表情に変化を見せます。

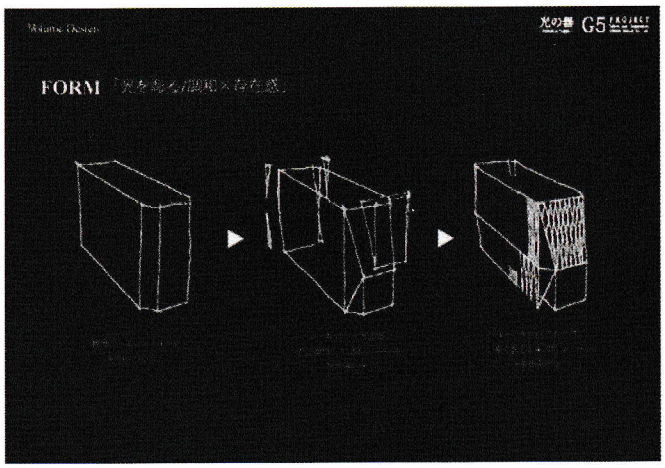


我々はそのカットガラスの持つ性質に着目し、今回のプロジェクトに生かせないかと考えました。建築はそもそも人を収納する器ではありますが、「器」というものが持つ先人により磨き上げられた文化や技術、さまざまなものを納めることで、その姿を変化させる多様性、また、器によって中身をより美しく見せるという関係性を抽出しました。その「器」と、光の普遍性や、商業と関連性の深い演色性、環境性能、さらに昼の太陽光、夜の照明という、光源の違いなどを表す「光」というキーワードを組み合わせ、デザインコンセプトを「光の器」としました。すなわち、透明な美しい器をデザインし、内部のにぎわいをそのままファサードに映し出すことで、時代とともに変化し、常に時代を表現する、昼も夜も明るい建築をつくろうと考えました。そういう建築がこの土地に建つ、これからの時代の商業施設にふさわしいと考えました。

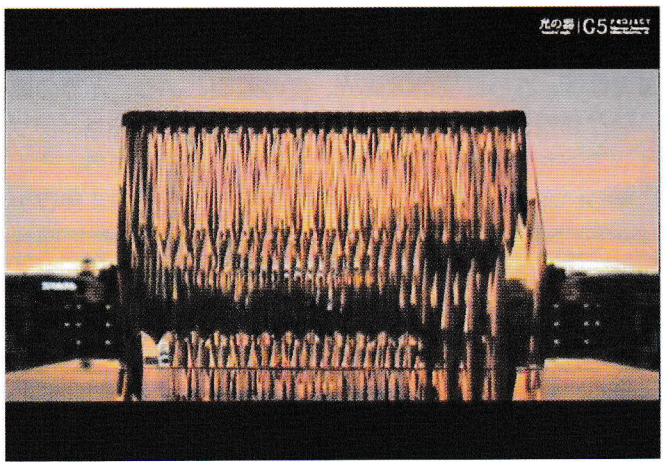
基本ボリュームの考え方を説明します。まず、銀座にある他の建物と同じく容積を消化するため、敷地いっぱいにボリュームを立ち上げます。銀座には道路幅に応じて、壁面後退距離が地区計画により定められています。そして、各コーナーをカットすることで、上部の圧迫感の低減と低層部の周辺環境への調和を図ります。同時に建物形状をよりシンボリックなものにします。そこにパターンを放り込んでいくことで、品格のある幻象的なファサードを生み出

そうと考えました。

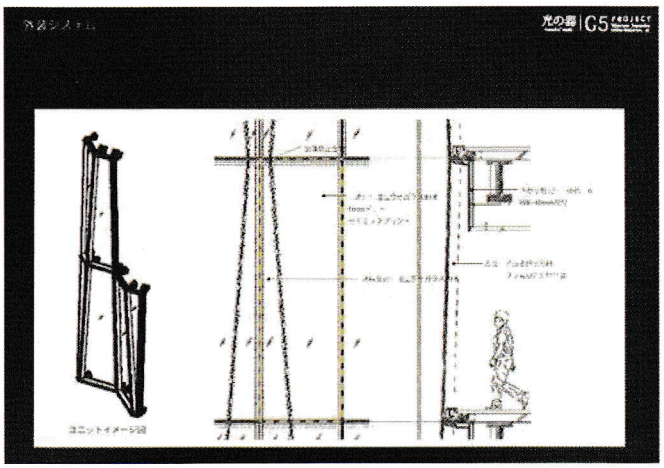
ファサードに関しては、まずカットグラスと同じようにガラスの外形を立体化することを考えました。それにより、光の反射や透過の現象が起こります。また、立体的にすることで夜だけでなく、昼も太陽光によってきらめきを生み出したいと考えました。そして、銀座の街に調和する、品格を持ったパターンの検討を行いました。銀座地区の敷地周辺には、比較的縦基調のファサードが多くあることや、縦基調のゴシック建築が持つ荘厳さを持ったパターンが、品格のある銀座の街にふさわしいと考えました。



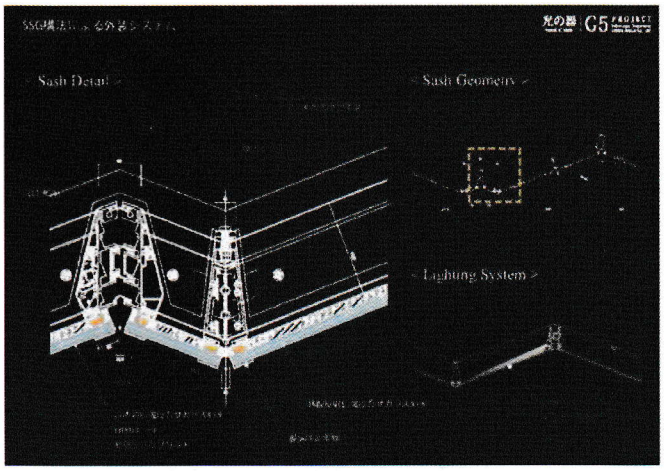
ここで我々は、ひし形の頂点を立面的にへこませたパターンを提案しました。まさに江戸切子のように立体的に彫り込んだような形状です。これは実際に江戸切子の職人に、ガラスをカットしてつくっていただいた建築のコンセプトモデルです。彫り込まれた立体的なガラスが、光を透過、反射し、内部を含めたその姿を美しく浮かび上がらせます。我々は、このような光の幻象を生み出すファサードを検討していきました。



光の器を実現するためには、まさに器である内外境界となるファサードが重要になるわけですが、その外装について説明させていただきます。銀座は上品なイメージがありますが、サインが乱立するなど、意外と雑多な街と言えます。このまま平面的なガラスで街を反射すると、正直あまり美しくない街の風景がそのまま映り込んでしまいます。日々刻々と変わる街の風景を３次元に合成したガラスにより、一度分解、そして再構築し、都市の様相そのものをファサードとして見せることで、時代や時間により変化するファサードがつくれないかと考えました。同時に、内部のにぎわいを外部で感じ取ることのできる、新しい都市との関係性を持った商業施設のあり方を提案したいと思いました。

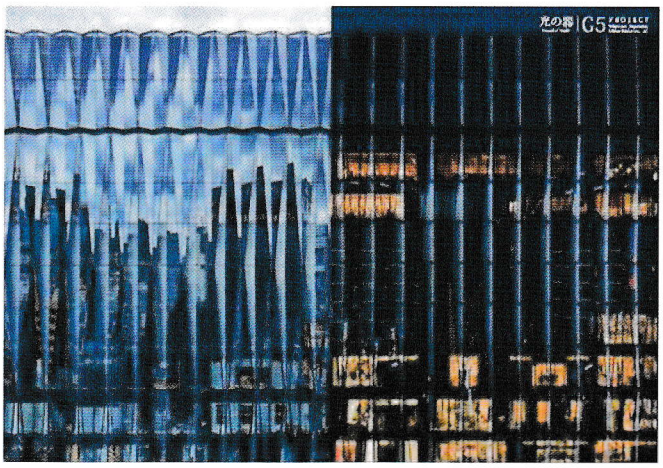


今回、コンセプトが「光の器」であることから、できるだけ外装をガラスで構成するためにSSG構法を採用しています。日本では４辺SSGの実績がほとんどなく、タイで実物大性能試験を行い、あらゆる検証を行いました。これらの検証を行い、最終形となった外装のシステムを説明します。

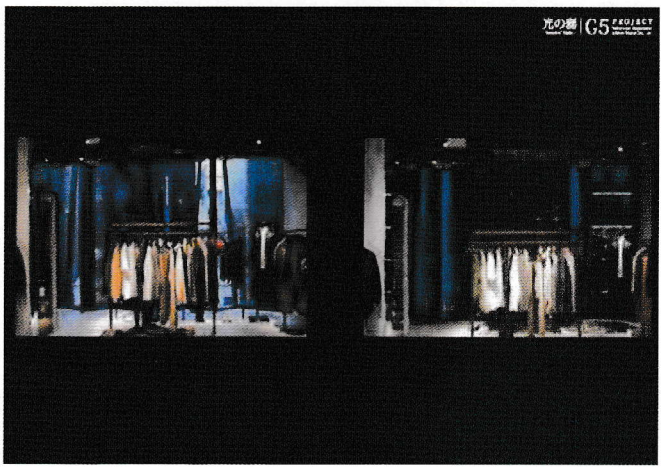


カーテンウォールのユニットは１５００mm×５０００mmで構成され、見付が長方形形状になっています。熱線反射倍強度合わせガラスと高透過倍強度合わせガラスの、２種類のガラスを使用したユニットになっています。倍強度ガラスを用いたのは、これだけの数のカーテンウォールユニットなので、強化ガラスのように爆裂の危険を避けるためと、できるだけガラス圧を薄くすることでガラスが持つ緑の色を薄くしたいと考えたからです。また、熱線反射ガラスを用いたのは前述しましたが、昼にできるだけサッ

シを透けさせず、オブジェクティブに見せたかった事と、建物の環境性能を上げるためです。

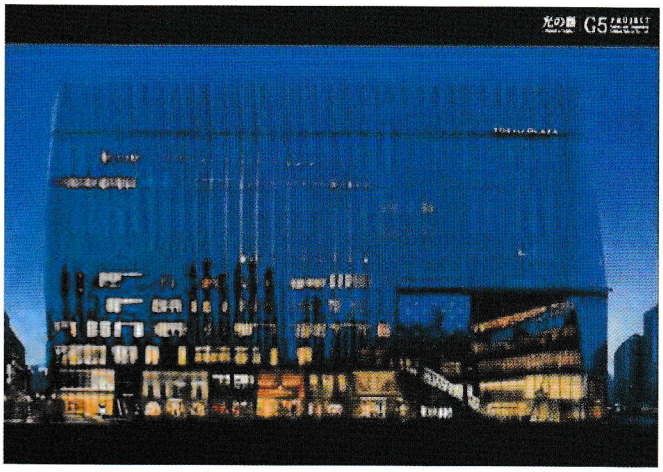


先ほど説明したとおり、透明で一体的に構築されたファサードは、光の現象により内部の商環境や、風景をフィルタリングし、さまざまな景色がオーバーレイします。すなわち、都市の様相がそのままファサードとして立ち現れます。この写真のように夜は太陽光の代わりに外装照明を設け、内部のテナントの照明と外装照明、街の明かりが一体となり夜のファサードを構成し、幻惑的な表情をつくります。



インテリアからの見え方です。このように商品の背景に街の風景がオーバーレイします。夜間も外装照明越しに街が映り込みます。商業施設で外装をガラスにすることは、とても大変なことでした。特に物販店舗においては、商品の日焼けなどに気を使う必要があります。今回クライアントである東急不動産様の多大な努力により、テナントにレギュレーションをつくっていただき、外装面の半分は壁を閉じないようにしています。

メインファサードの全景です。6層で一つのひし形を描く外装パターンは、こういう仕掛けです。都市的なスケールを意識してデザインされています。このように巨大なボリュームが都市に存在する上で、ファサードを都市との緩衝フィルターとして捉え、街への調和を図りました。



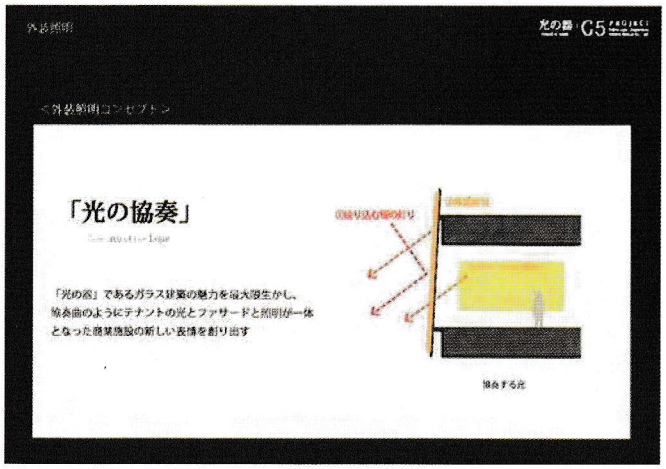
こちらが夜の全景になります。

各方面からの外観になります。左より、みゆき通りの交差点から、真ん中が数寄屋橋交差点から、右が対岸の晴海通りからの見え方になります。これらの写真のように天候や時間帯、周辺環境に合わせ、光の器はさまざまな風景をオーバーレイし、街への調和を図りながらシンボリックな造形を街に示します。

遠景からよく見える北西側のファサードは、設備のための開口が必要であるため、アルミルーバーにより、ガラスと同じように器の形状を立体的に構成しています。2色に

塗り分けることで、長大な立面を分切し、リズムを生み出しています。ガラスカーテンウォール部分のすべての面が立体的になっていることに対し、こちらはフラット面を彫り込んだような形状にしています。１本１本、長さの違うアルミルーバーが、最小限のクリアランスで収められています。また、２色に塗り分けることで凹凸感を強調し、光による表情の変化をより強めます。

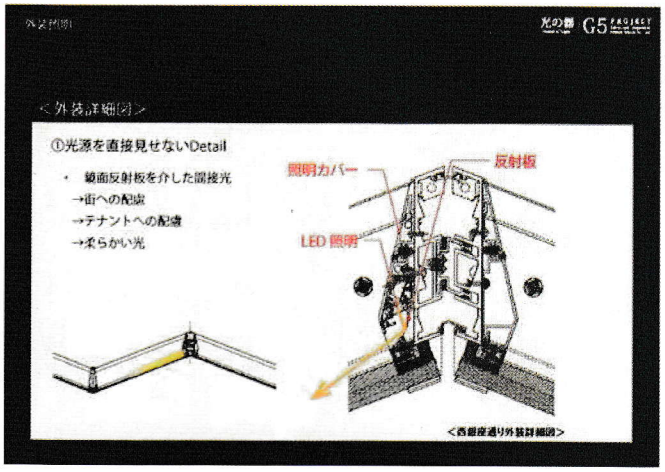
続いて、外装照明について説明させていただきます。外装照明についてもさまざまな検討を行いました。東急プラザ銀座は商業施設なので、夜間のライティングを魅力的に行う必要がありました。通常の商業施設における外装照明は、単独でその光を放ち、テナントの光はサイン主体となります。我々は外装照明とテナントの明かり、街の明かりが一体となった外装照明を考えました。東急プラザ銀座の外装照明のコンセプトは「光の協奏」です。



すなわち、ガラス建築の魅力を最大限生かし、協奏曲のように商業施設の新しい表情をつくり出そうと考えました。外装照明に求められた与件は、まず江戸切子の美しさを表現すること。また、テナントによってばらばらになりがちな商業施設のファサードを一つにまとめること。その上で、銀座にふさわしい品位を持った外装照明を提案することでした。機能として内部テナント、主に飲食店になりますが、眺望を備えることも与件の一つでした。これらの与件を踏まえ、我々は外装にベールのような外装照明をかけることで、光の協奏を実現したいと考えました。そのために、こちらの３点の工夫を行いました。一つ目は光源を直接見せないディテール。二つ目はベースを白色とした構成。三つ目はグラデーションの受光面です。

まず、光源を直接見せないようにLED照明を外装マリオンに組み込み、反射板によって間接光で光らせるディテールとしました。

これにより、街へ過度に光らせない。また、内部のテナントのビューを阻害しない、柔らかい光を実現しました。また、通常LEDはRGBの強弱により光の色がつくられますが、今回はできるだけニュートラルで繊細な光を実現するために、RGBに加えホワイトの素子を入れたLED照明器具の開発を行いました。これによって、より繊細で柔らかい表情の、白を基調とした光を実現しています。

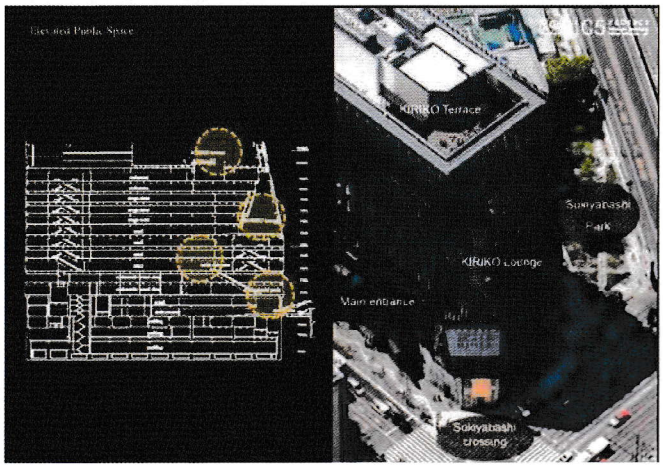


また、ガラスを光らせるために高透過ガラス部分には、１mm ドットのセラミックプリントを施していますが、これらに粗密を加えることによって、より繊細な表情を出す工夫を行いました。こちらが外装照明のイメージパースになります。

技術的には光の協奏を実現するに当たり、テナントの光を透過しながら外装照明の光の輝度を確保することが求められました。外装照明の光が強すぎるとテナントの明かりが見えず、またテナントにも影響を与えてしまいます。逆に、外装照明の光が弱すぎると、ただテナントの光が漏れるだけになってしまいます。外装照明についても、何度も銀座デザイン協議会様とやりとりをさせていただき、さまざまなご意見をいただいた上で、今の外装照明が完成しました。

続きまして器の中、すなわち内部空間の説明をしたいと思います。東急プラザ銀座も周辺建物と同じく敷地いっぱいに建てられ、収益を生むために足元はブランド店舗に貸し出され、パブリックスペースがありません。そこで隣接する公園を敷地の一部と捉えて整備し、また建物の上層階にパブリックスペースを設けました。東急プラザ銀座は屋上にキリコテラス、中層階にキリコラウンジを設け、パブ

リックスペースを立体的に構成しています。パブリックスペースを上層階に設けることで、そこに人が集まり、街と建築に連続性が生まれ、街の魅力が増します。都市空間をより立体的に捉え直すことで、新しい街のにぎわいを生み出すきっかけをつくりたいと考えました。

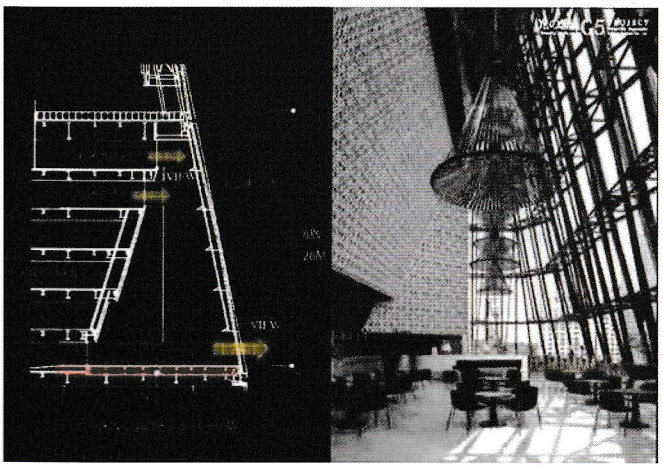


キリコラウンジについて説明します。キリコラウンジではフィルタリングされた銀座の夜景と、ガラスに映り込む壁面のアルミパネルが、ここでしか体験できない幻想的な雰囲気をつくり出します。

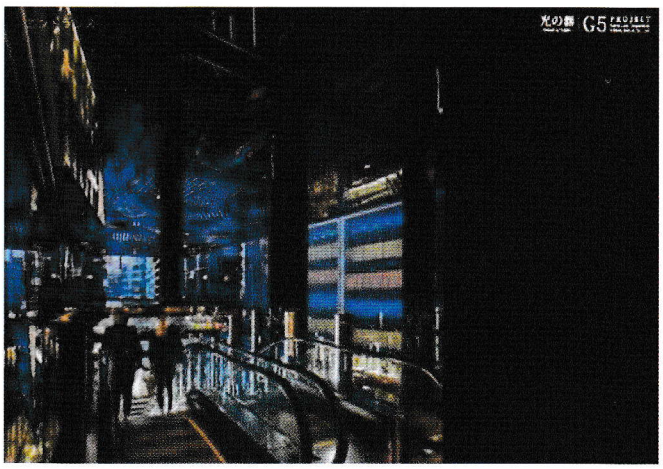
キリコラウンジは東急プラザ銀座のメインとなるパブリック空間であり、２６m、三角形状の６層吹き抜けの空間となっています。パブリックスペースにカフェが併設されていますが、家具はすべて可動となっており、さまざまなイベントを行うことのできる空間となっています。また、６００mm 床を上げられており浮床になり、イベント時の下階への振動対策となっているとともに、空調のチャンバー空間として、構造と設備が一体となった空間になっています。

屋上には２種類のパブリックスペースを設けています。

２種類設けているのは、片方をイベントスペースにしているときも、片方がパブリックスペースとして使用できるなど、様々な使い方ができるようにしています。どちらも外周に回っているゴンドラスペースの目隠しをしており、グリーンサイドは約５０種類もの壁面緑化を行い、四季によりさまざまな見え方を楽しむことができるように設計しています。また、シンボルツリーとしてベニシダレ桜を植樹しています。銀座は初めて街路樹で桜が植えられた街で、今はないのですが、それにちなんだデザインとしています。



また、ウォーターサイドはギャラリーのようにしつらえ、壁面にプロジェクターなどを投影し、イベントスペースとして使いやすいデザインとしています。



こちらが３階のメインエントランスになります。反射材を多用することでエントランスの高揚感を生みながら、軒

天に交差点の風景を映し込みます。エスカレーターを上りながら、鏡面の方立てに映り込んだ交差点の景色を見ることができます。軒天は風景を映し出すために、アルミパネルを研磨して全艶の黒で塗装しています。

数寄屋橋公園について説明させていただきます。数寄屋橋公園は、銀座においては貴重な緑を持ったパブリックスペースでありながら、従前の公園は人の溜まらない、緑がうっそうと茂る陰鬱な空間でした。公園には裏手に東京都選定歴史的建造物である泰明小学校や、公園内の岡本太郎がつくった「若い時計台」などのアート作品がありながら、それらがうまく生かされていない状況でした。我々はそれらの既存財産を生かしながら、公園を買い物に疲れた人や待ち合わせる人など、さまざまな目的を持った人が気持ちよく憩い、にぎわいあふれる場所につくり変えることを目的として計画を行いました。

こちらが数寄屋橋公園の平面図になります。

まず、公園内に東急プラザ銀座を含め銀座ファイブなど、周辺を取り巻く各施設を結ぶ動線を整備し、公園内に人の行き来を生み出す仕掛けをつくりました。また、その動線によって生じる隙間の空間に、植栽や家具をしつらえ、人々が緑陰の下で気持ちよく憩える溜り空間になるように計画しました。こういった動線を先に通し、その間の隙間に植栽とファーニチャーを設ける計画にしています。中央には既存のレベル差を生かした階段と広場を設け、区や民間で催すさまざまなイベントを行うことをできるステージとして活用できるようにしました。また、数寄屋橋公園には、さまざまな種類の桜を植えています。４丁目側に桜が植えてあるため、それらをデザイン的につなぐことを考えたのと、様々な種類を植えることで開花時期がずれていき、少しでも長い時間、桜を楽しめるように設計しました。

数寄屋通り沿いには地域貢献施設として、G Info という観光案内所を設けています。また、小規模ですが、店舗を配置することで通りのにぎわいをつくり出しています。店舗の奥行きは９００mmから１５００mmしかありませんが、通りのスケール感に合ったサイズの店舗になっています。これはどちらも、銀座デザイン協議会様との協議によって生まれた空間です。民間の開発にもこういったスペースをつくり出せることが、銀座という街が持つ力だと思います。

最後に、現代における商業施設の役割について触れたいと思います。今の都市は、記号化されたサインに埋め尽くされています。あらゆる商品は記号化され、バーチャルな世界で手に入れることができます。そのような都市において、わざわざ商業施設へ行く理由は何でしょうか。我々は、それが体験であると考えました。すべてがバーチャルで済む時代において、そこにしかないフィジカルな体験を提供することが重要だと考えました。すなわち、東急プラザ銀座の空間やファサードは、江戸切子のように光の現象によりフィルタリングされ、風景はオーバーレイし、すべてがここにしかない特別な体験となります。今後の銀座の都市景観にとって必要なことは、ファサードという外観を含め、ここにしかない体験を数多くつくっていくことで、より街としての個性を発揮し、魅力ある街を形成していくのではないかと考えています。

連続講演会 §3. GINZA PLACE 新しい銀座のアイコン -FRETWORK-

開催日：2018年12月7日（月）
会　場：サンゲツ 品川ショールーム

時代を反映する新しさを取入れながら「銀座らしさ」は形成されてきた。益々世界に開かれることを期待された街の中心に位置する本プロジェクトでは、これまでの歴史の踏襲と、これからの「銀座らしさ」を形成するための新しさが求められた。銀座の洗練されたイメージと、躍動感溢れるグラフィックを両立させる『FRETWORK（透かし彫り）の白磁』をモチーフとした外観により、日本のクラフトマンシップを発信するとともに、街に良い新たなデザインの刺激を与えることを目指した。

登壇者：山本 実氏　GINZA PLACE 設計者　大成建設

■略歴
1966年 島根県生まれ
1990年 大成建設株式会社設計本部入社
2010年 同社設計本部室長

■主な作品
2004年 高松シンボルタワー（日本建築学会作品選集、公共建築賞優秀賞）
2005年 サッポロビール園再編計画（BELCA賞）
2014年 アウディ みなとみらい（照明普及賞）
2016年 ヨックモック青山本店改修（BELCA賞）
2016年 GINZA PLACE（日本建築家協会優秀建築選、CFT構造賞）

GINZA PLACE ですが、今まであまり話す機会がなかった計画のプロセスなどを折り込みながら説明していきたいと思います。

最初にロケーションと計画の概要を説明したいと思います。計画地ですが、中央通りと晴海通りが交差する銀座四丁目の交差点に位置しています。この交差点の直下には地下鉄銀座線の改札口があり、街の起点、ゲートとなっているような交差点です。そして他の角には銀座和光、三越百貨店、三愛ビルと銀座を代表する名建築が建ち並んでいる交差点であり、今回の講演のタイトルにもあるように交差点自体がアイコンになっているようなポテンシャルの高い場所でございます。

続いて、今回の計画地の変遷について簡単に説明いたします。この計画地は明治に入り横浜毎日新聞の社屋がありました。この明治の時代には銀座地区にはその他にもたくさんの新聞社が居を構えており、銀座は情報発信の一大拠点というような側面がありました。そして、1911年に新聞社が移転し、築地精養軒による「カフェー・ライオン」が開店しています。

日本初のカフェとなる「カフェー・プランタン」が同じく銀座に誕生しましたが、それと同じ年に少しあとを追って開業したという変遷です。当時の最先端の施設であり、銀座らしい施設であったといえると思います。その後、サッポロビールさんの前身になる大日本麦酒に経営が移り、ビアホール業態の「ライオンビアスビヤホール」となりました。

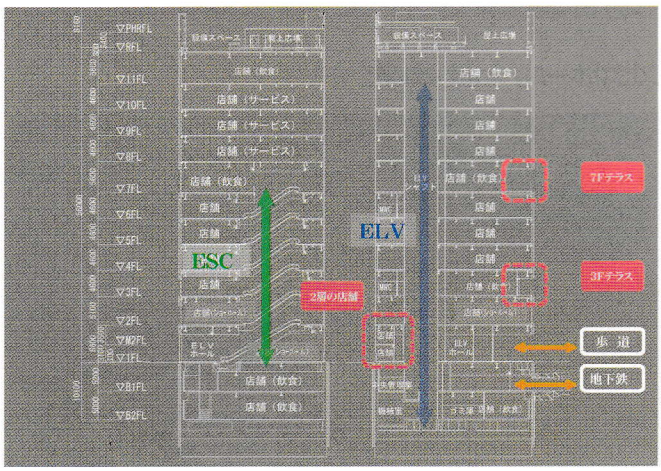
その後、戦災で一度消失し、1952年には改装開店し、1970年にサッポロ銀座ビルとして新築されました。このビルは覚えていらっしゃる方も多いかと思いますが、1、2階に日産のショールームが入っており、上の階は業務系のテナントが入居するテナントビルとなっていました。

2016年に今回のGINZA PLACEに建て替わったという変

遷です。

続いて、施設計画について説明いたします。まず施設の概要です。事業主はサッポロビール様の系列会社であるサッポロ不動産様と老舗の呉服店のつゞれ屋さんの共同建て替え事業でございます。CMとして久米設計さんが参画されていました。当社はマスターアーキテクトという立場で設計を担当し、外観のデザインはクライン・ダイサム・アーキテクツ様、照明デザインはシリウスライティングオフィス、そういった体制で計画しました。建物用途は商業施設を中心としたテナントビルで、地下2階、地上11階の建物となっています。実は一部に中2階があり、法的には12階のビルとなっています。これは後ほど断面図で説明したいと思います。

以上が簡単な概要です。



こちらは断面図です。

この建物は地下1階で地下鉄と直接つながっており、1階の地上のメインエントランスと当然直結したような関係にございます。地下2階については飲食店の「銀座ライオン」が2フロアー使いで入居しています。1、2階は前のビルと同様に日産のショールームが入居しています。1階はショールーム仕様ということで大きな階高にしているので、それを利用して共同事業者のつゞれ屋様の店舗をこの位置に2層設けています。そのため法的にはこの2階のショールームが実は3階となり、建物としては地上12階の施設計画となっています。3階についてはテラスのある飲食店舗、4階から6階は物販店舗となっています。7階は3階と同様にテラスのある飲食店、こういった構成となっています。各店舗をつなぐ縦動線としては地下2階から11階、最上階までエレベーターで接続しており、地上1階から7階まではエスカレーターを設置しています。

続いて施設計画のコンセプトについて説明いたします。まず施設のコンセプトを語る前にこの場所に何をつくるのかが大きな課題としてありました。これはとてもシンプルな問いなのですが非常に重い課題でもありました。当初開発に携わる皆がこの場所にふさわしいものとしなくてはいけないとプレッシャーを感じていました。基本構想の初期の段階では計画の手をいったん止めてワーキングを開催していました。私たち設計も参加させていただき、何をつくりたいか、何があったらよいか、各自のドリームプランを思い思いに自由に話し合う期間となっていました。

実際には実現しなかったことも多かったと思いますが、皆で可能性について話し合ったことにより、基本構想が決まってからも大きくぶれることがなくゴールに向かうことができたと思います。

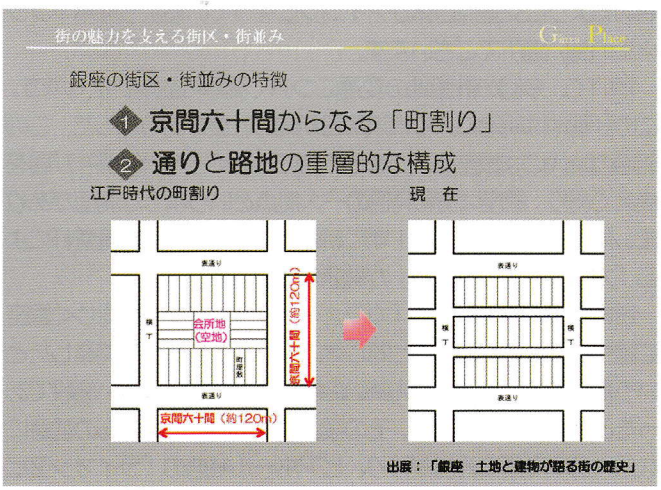
ちなみに私は地下に地ビール工場をつくり、世界一高い生ビールを提供したらどうかという提案をしましたが実現には至りませんでした。

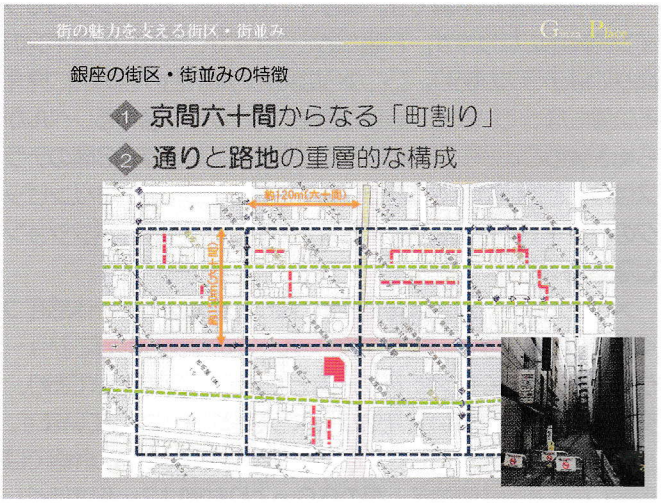
このような経緯を経て策定した開発コンセプトですが、「発信と交流の拠点」「明日の銀座を創るランドマーク」という2つのテーマとしてまとめました。これは、かつての銀座はこの土地の記憶にもあるように多くの新聞社が居を構える情報発信の拠点であったこと、現代においてもこれからさらに増えていくであろう海外からの来訪者と交流しながら世界に向けて日本を発していく、そういったことが求められているのではないかということで掲げています。また銀座を代表する交差点に位置するというポテンシャルを考えて、これからの銀座をイメージさせるようなランドマークになることを目指しました。

この開発コンセプトを受けて、施設の計画コンセプトも整理しています。場所性を生かし、街との良好な関係を創出しながら共に発展する施設を目指しました。そのポイントとしては銀座の歴史を継承するような施設。それから街との一体感、魅力を高め合うような施設。これは調和というよりも、もっとアクティブな感じでシナジー効果を発揮するような施設としたいということです。また新しい銀座の体験ができる施設を目指しています。これらを実現することで、銀座を象徴するようなアイコン的存在になるのではないかと考えました。銀座と言えばテレビでも銀座和光が登場しますが、そのような存在に少しでも近づきたいという大きな目標を掲げました。

このようなコンセプトに基づいて、まず銀座の街の歴史を整理する上で重要なファクターである街区、街がどのように発展してきたのかを簡単に説明したいと思います。

銀座の街の特徴は、江戸時代から継承されている「京間60間からなる町割り」が挙げられます。江戸時代は約120m四方の町割りが基本となり、中央に空地があるような構成となっていました。その町割りが現在でも引き継がれており、サブとなる通りが通過することで現在の街区が形成されています。

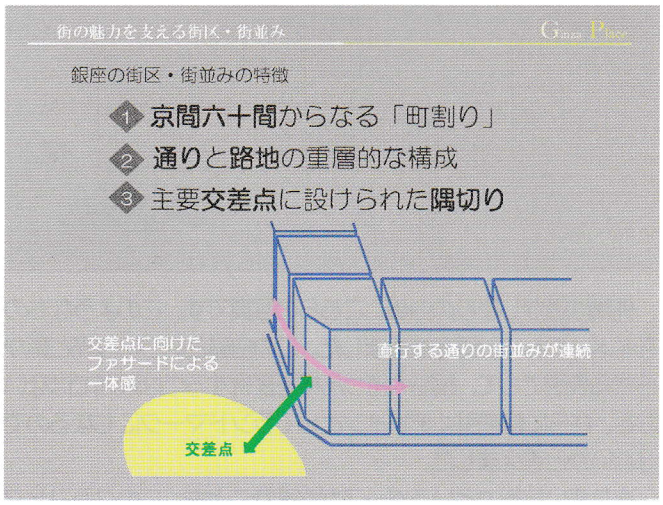


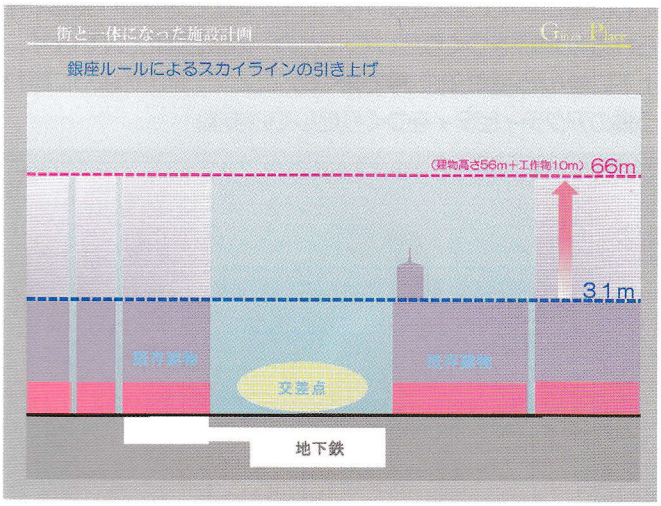


次に、通りと路地の重層的構成というのも銀座の特徴です。こちらは銀座の地図ですが、現在でも江戸時代のグリットがそのまま継承されていることが分かります。この緑色の部分がサブ的な通りとして追加され、現在のビル群に対応した街区となっています。この赤色の部分は私有地を出し合って形成されている通り抜け通路です。右下のこの写真のように、ビルの背面のほうに皆で土地を出し合って通路をつくっている形で、今でも多数残っています。誰でも自由に通り抜けることができる設えとなっており、このような通路に面して名店のレストランが存在するなど銀座の奥深さと面白さを形づくる要素の１つとなっています。

このように街の骨格を形成する大通りとその他の通りや路地空間、そういった重層的な構成が整った街並みをイメージさせながら、ストリート上ではなく面的に広がる銀座の賑わいの基礎となり発展してきたと言えるかと思います。

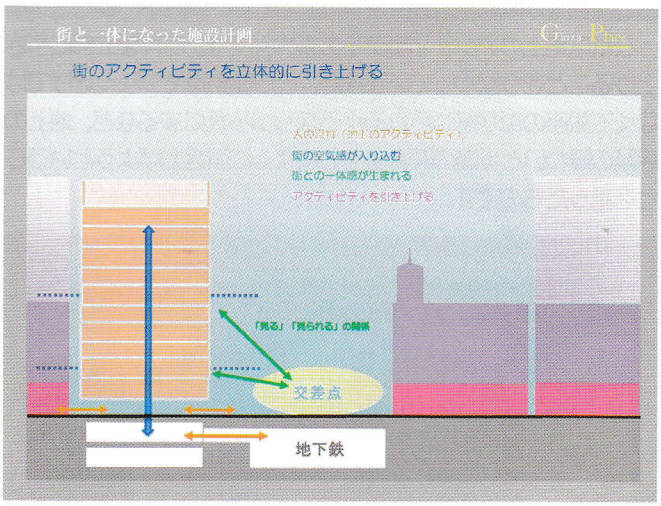
主要交差点に設けられた隅切りというのも重要なファクターです。こちらは簡単な模式図ですが、角に切り取られた隅切りがあることで直交する通りの街並みが連続するという効果があります。建物が交差点に向けたファサードになり、街の一体感が強化されるということで交差点は街の拠点として賑わいに貢献する重要なファクターとなっています。





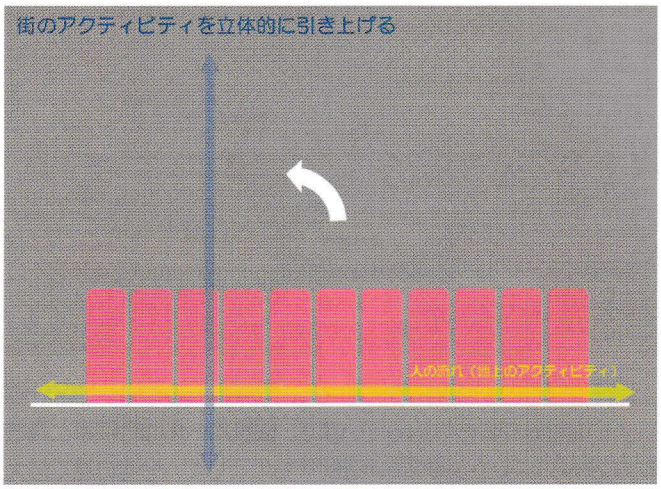
現在ではこのような特徴に加えて、銀座ルールという地区計画により街並みが変わり始めています。銀座ルールは容積率と高さ制限を緩和しながら機能更新を促すものでして、沿道の建て替えが進むにつれて壁面の位置が揃い、工作物を含む建物の高さが引き上げられた街並みになっていくと思われます。

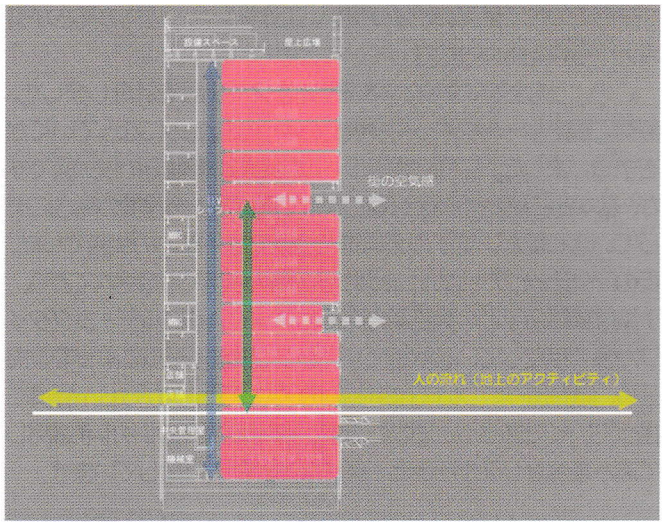
このような銀座の特徴や状況を踏まえて施設を計画しました。最初に銀座ルールによって今後どのような街並みになっていくかを予想しました。これは銀座ルール制定前の街並みの模式図ですが、基本的に建物は斜線制限によって高さ３１m程度の高さに揃っていましたが、屋上の工作物については不揃いの状態でした。街のアクティビティは地上２階から３階の店舗で形成されており、上階は事務所などの業務系の用途となっているビルディングタイプが多く存在している状態です。そこで銀座ルールによって中央通り、晴海通りについては街並みのスカイラインが６６m程度に揃っていくであろうと思われます。当計画も銀座ルールを適用して高さを生かしながら街と一体になる計画を目指しています。



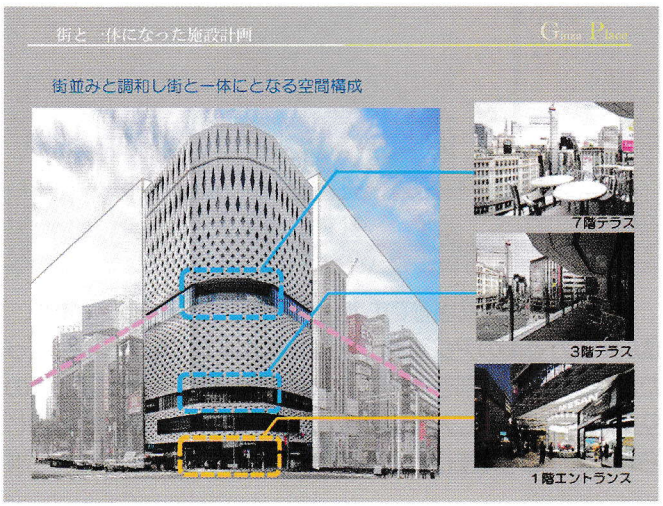
こちらは断面の概念図です。地上と地下にエントランスがあり、面的に広がる街のアクティビティと結びついています。高くなった計画建物の中間部をオープンなしつらえとすることにより街の空気感を建物内部に入り込ませ、建物内部でも街の賑わいが感じられるように考えました。その際に交差点に面する隅切り部に当

たる位置に屋外テラスを設けることで、地上と建物が「見る・見られる」の関係をつくりだして、街との一体感を強化しています。上下に並んだ店舗を縦動線で強く結ぶことで、地上のように賑わう縦のアクティビティをつくりだしています。





これは地上のアクティビティの模式図です。これを上部に引き上げることを今回やっていますが、ただ縦動線でつなぐだけではなくて銀座の街が感じられるようなしつらえにするなど、地上の店舗の賑わいと歩道の関係をそのまま上に引き上げようということを狙ったものです。



こちらは実際の写真です。高さ３１ｍのラインはピンク色のラインの高さになります。７階にあたりますが、ほぼこのラインの高さにはテラスがあり、ここからは和光の時計台が目の前に見える位置になっています。新旧の建物の高さが切り替わるレベルから街を望むことができるということを考えています。３階のテラスは地上と近い位置で交差点を見下ろすことができ、オリンピックのパレードや駅伝などのイベントの際には、ベストポジションとなる場所です。

メインエントランスは隅切り部に設けて交差点との一体感をつくりだしていますが、日産のショールームの中央の部分にショーケースを設置してコンセプトカーなどを展示していただいており、交差点に対する賑わいを発信するような機能も付加しています。

実はこれはあまり話したことがありませんが、今回の計画では目隠しの工作物の天端を上限の６６ｍよりも実は２ｍ程度低くした高さとしています。この部分がおおよそ６６ｍのラインですが、それよりも少し低くしています。

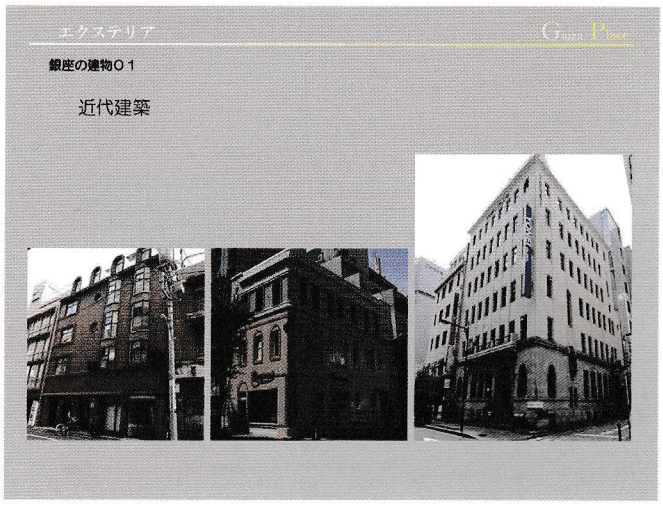
これはどうしても強くなってしまう角部の建築の存在感を少し和らげようということを考えたのと、計画するビルによっては工作物の部分をデザイン的に処理したりして、かならずしも６６ｍの高さでスカイラインが揃うとは限らないのではないかということを想定しました。それで直交する街並みがスムーズに連続することを思い、配慮しました。実際にこうした考えが功を奏すかは今後の建て替えの状況にもよるかと思いますが、こういった重要な角地に建つ建物としていろいろなことを考えながら計画した１つの事象です。

続いて内外装の意匠計画について説明いたします。

日本らしさを表すキーワードとしてクラフトマンシップを掲げました。

外観は透かし彫りの白磁、こちらの写真です。このようなものをイメージして計画を進めました。この白磁というのは光と影から成る表現でして、銀座の持つ品格を表現するには最適ではないかと、さらに目を引くデザインとしてランドマークにもなるのではないかと考えました。

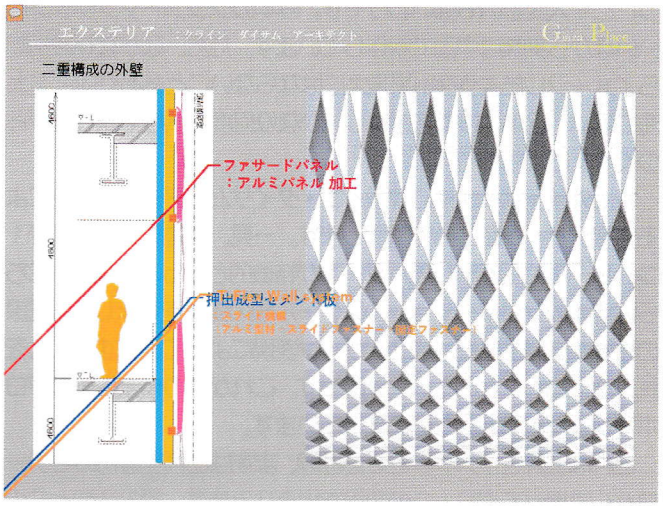
また高い技術力というベースが必要なことも、このクラフトマンシップというものを表現しているのではないかと思います。



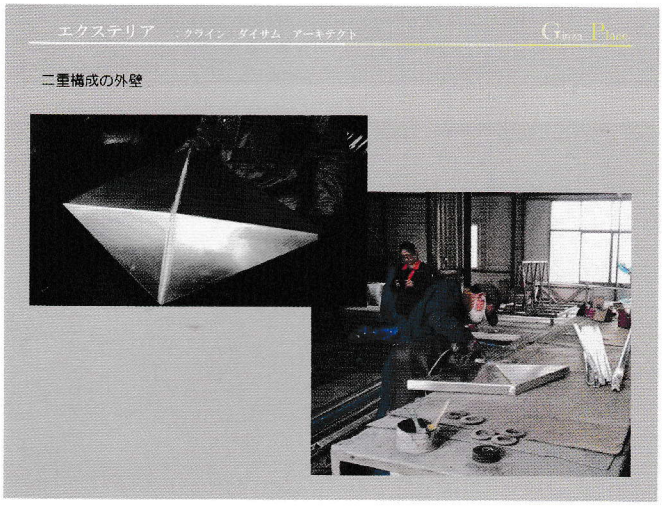
外観を考える上で現代の銀座について少し考察をしてみました。ここに挙げているように銀座には格式の感じられる近代の西洋建築も多数点在しています。それと現代の新しい建物が一緒に共存していることが銀座の街の魅力の１つにもなっています。一方では昨今のトレンドの１つとしてファサード全体でブランドを表現するビルが増えてきています。銀座という土地を考慮するとどうしても高価な土地なので、敷地境界いっぱいに外壁を設けるような計画となり、外装がわりと平面なしつらえとなるのですが、そのような中でオリジナル性の高い、美しい表現を試みているのがこのブランドビルの特徴です。

今回の計画においてもビルが持つアイデンティティをしっかり持たせたために、透かし彫りという１つのモチーフでファサードを構成する手法を採用しながら、新旧の建物と調和する外観を目指しています。

こちらが前景の写真です。これは断面図です。こちらが簡単な初期段階のパースで検証したものです。性能壁の外壁の位置はこの青い部分になり、押出成形セメント板で構成されています。その外側には化粧のファサードパネルを設置しています。そういった二層構成の外装計画としています。



この赤い部分のファサードパネルは約５４００個の菱型から構成されています。この菱形がトータルで約５４００個あり、そのパネルを一つ一つ取り付けています。実際に一つ一つ付けるとなると層間変位などをクリアしなければならず、ミリ単位の高い精度が求められました。そこで、今回は「T-Flex Wallsystem」という壁面材の下地システムを開発し実現しました。これは特許を取った工法です。T-Flex Wallsystem は、アルミ型材、スライドファスナー、固定ファスナーを組み合わせ、スライド機構を用いた壁面材の下地システムです。この部分ですね。こうしたシステムを開発することで、多様で複雑な外観デザインに対応しながら、かつ良好な施工性と層間変位の追従性能を実現したものです。こちらが実際の写真ですが、すべてこの菱形と菱形の間は約１０ミリ程度の目地で分かれています。それを一つ一つ取り付けていくような形です。

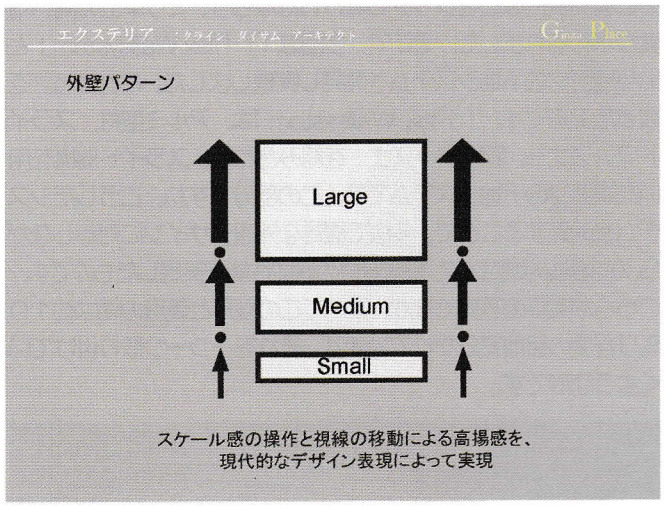


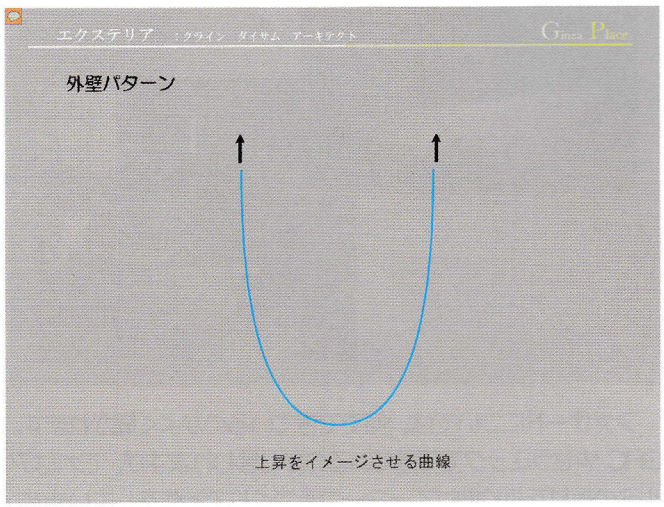
ファサードについては、何でできているのかよく聞かれます。GRC やセラミックでできているのかと言われますが、これはアルミの板材を折り曲げて一つ一つ手づくりで制作をしています。こちらが制作している風景を撮影したものですが、この菱形をまず２つのパーツに分け、折り曲げて成型したものを溶接でつなげるということを一つ一つやっています。非常にローテクですが、クラフトマンシップといいますか、手づくりで制作しているとい

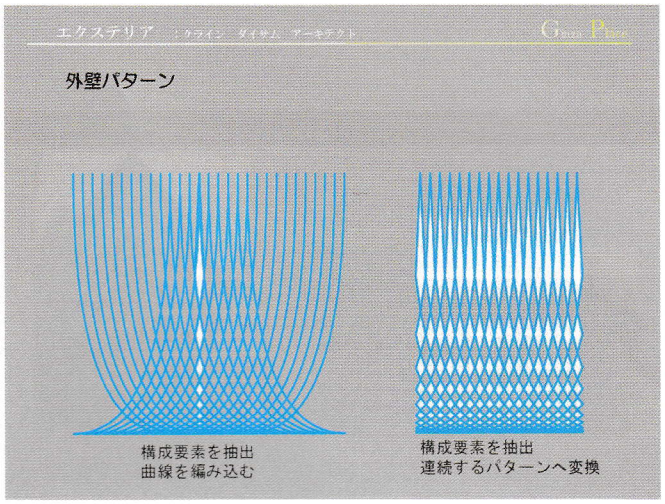
うことで大変思いも強いわけです。日本のクラフトマンシップといいながら実際は中国で制作しています。ただ、なかなか最初からイメージしたような出来栄えにはならないこともあり何度も上海に通い、日本の技術を指導し、かなり何度も試行錯誤しながらつくり上げたものです。

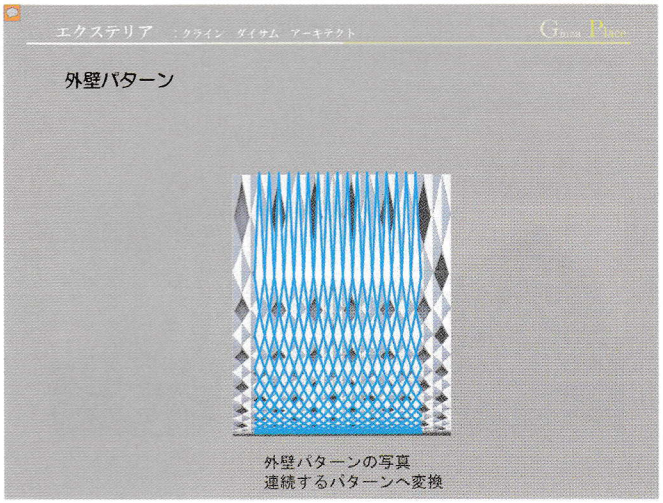
次に外装デザイナーのクライン・ダイサム・アーキテクツによる外装デザインについて説明します。一見、複雑に見えますが1つのルールで生み出したパターンが特徴的となっています。こちらは全体のプロポーションのスケール観の操作をしまして、視線の移動や高揚感を現代的なデザイン表現によって実現することを試みたということのイメージ図です。これがそのまま外観のプロポーションとも近いものになっています。

これは上昇をイメージさせる曲線、まずはこれを最初のモチーフとして掲げており、この曲線を編み込みます。編み込むとこのような図形になるわけですが、その中から構成要素を抽出しました。抽出したものを連続するパターンへ変換することで今回のような外装のパターンが出来上がりました。

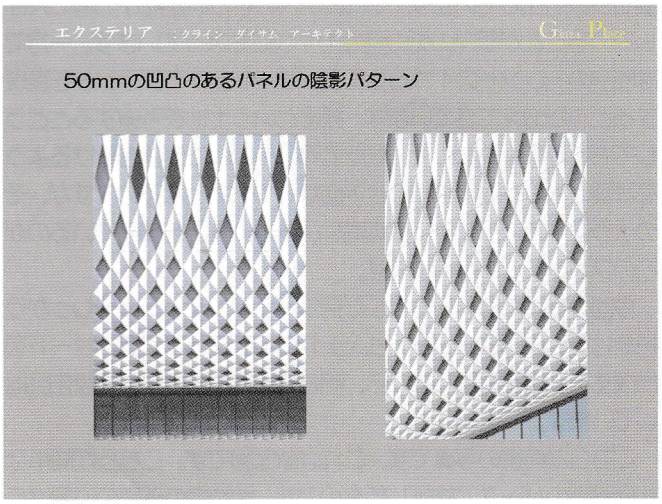








こちらも外装の写真ですが、クライン・ダイサムさんが最初に思い描いたグラフィックをそのまま表現できていると思います。



こちらも下から見上げた写真等ですが、透かし彫りの陶器のようなイメージになっていると思いますが、このだまし絵的なパターンにより実際には平面的な外装に独自の立体感を創出しています。一つ一つの菱形パネルを50ミリ程度の凹凸をつくり、陰影のパターンをつくりだしています。そうすることで重層する陰影

による豊かな表情ができあがっています。このだまし絵的パターンによって見る角度によっても違った印象を受けるのも今回の外装の特徴の１つであると思います。

こちらは全景ですが、歩行者天国になった際の外観です。やはり交差点から望みますと、この隅欠きの分ですね。銀座の特徴と説明した隅欠きの部分にエントランス、それから３階のテラス、７階のテラス等を設けることにより街との一体感が生まれている様子が分かるかと思います。

こちらは街並みの中でこのように見えるということです。現在は銀座ルールによる機能更新が進んでいないので高さは揃っていませんが、先ほど説明したように２m程度下げた高さが今後どのようになっていくのか少し期待しながら街を眺めているような次第です。

インテリアについても簡単に説明いたします。インテリアも同様にクラフトマンシップというキーワードを掲げ、一手間かけた本物志向の素材でつくることを目標にしました。こちらはエレベーターホールの写真ですが、石と左官壁で構成しています。この縦の部分が石で、横に流れているような部分が左官壁となっています。この左官壁は左官職人の久住氏、カリスマ職人などと言われていますが、久住さんに依頼してつくったものでして、高い技術を表現した壁となっています。

細かいしつらえで分かりにくいかもしれませんが、この石の部分と、少し奥まった部分に左官がありますが、その間の部分をミラーとすることで、横基調の左官と縦基調の石材が重なり合うようになることを目指しました。これは銀座の街区の重層的な通りの構成等も少し表現したいということで、こういったことを考えました。

共用部では、こちらはエスカレーターの壁にあたる部分、今回の建物は平面形状が小さいこともあり、あまり共用部分がなかったのでこの壁で今回の建物のイメージをつくりだそうと考えました。また先ほど地上のアクティビティを垂直に引き上げようと試みたと説明しましたが、この外装のイメージと近いこういった凹凸の壁をつくることで外のアクティビティを中にそのまま持ち込むようなイメージに連続してつなげたいという思いもあり、要所要所にこのように立体感のあるパネルを使用しています。

こちらは地下１階の地下鉄と接続する部分です。こちらも同じような凹凸のパネルを使っています。

新しい銀座の体験ということですが、今回は演出照明についても少し銀座の街と共生することを考えています。

こちらは外観の全体図です。二重構造の壁を生かして、その隙間を照らすことで透かし彫りのイメージとしています。この光が動きを与えていて、実は標準的にはこういった普通の色の光としていますが、季節やイベント時には色彩を変えられるようになっています。このような、いままでにあまりなかった、ゆったりとした変化を与えることで交差点に新たな魅力を提供しようと考えたものです。

こちらは動画です。今回音が出ないので残念ですが、和光の鐘の音が毎時間0分になると鳴るので、それと連動する形で光が動き出すような、そういった光と鐘の音がシンクロするようなことを考えています。

今回はクリスマスバージョンということで、この緑色、時折このあたりに現れる赤色などで街に新しい体験を提供しようというものです。

昨今はインターネットが普及して、その場所に足を運ぶ目的が物を買うことから事を体験するということに重心が動いてきているので、こういった状況を踏まえて商業の街として今後も発展を遂げていく銀座において新しい体験を経験してもらう、そういったシーンとして皆さまの記憶に残ることを願ってこのような計画としています。

景観シンポジウム

開催日：2019年2月20日（水）15:00～17:45
場　所：日本大学駿河台校舎１号館CSTホール

■ファシリティーター
陣内秀信氏（建築史家・法政大学特任教授）

■基調講演
中島直人氏（都市計画家・東京大学准教授）

■パネルディスカッション
中島直人氏（都市計画家・東京大学准教授）
三浦展氏（マーケティングアナリスト）
竹沢えり子氏（銀座街づくり会議 事務局長）
坂本弘之氏（GINZA SIX 設計者 鹿島建設）
畑野了氏（東急プラザ銀座 設計者 日建設計）
山本実氏（GINZA PLACE 設計者 大成建設）

司　　会：島本健司（愛知株式会社）
場内撮影：立石博巳

主　　催：（一社）日本建築美術工芸協会

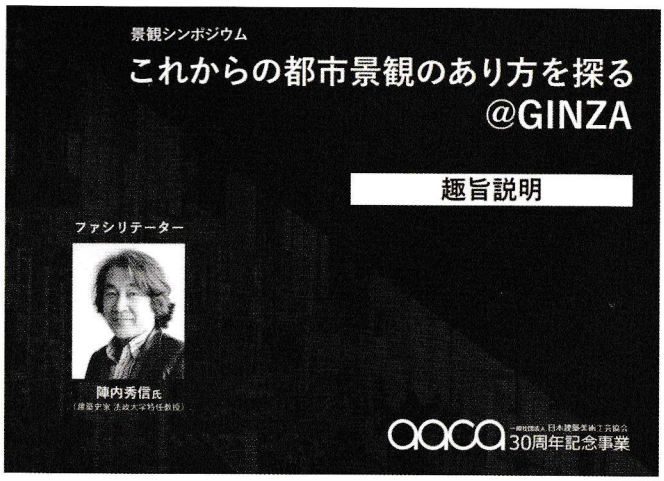
会長挨拶　岡本賢会長

皆さま、こんにちは。本日はaacaの景観シンポジウムにこんなに大勢のご参加をいただき、本当にありがとうございます。日本建築美術工芸協会は平成元年に芦原義信先生により創立され、昨年平成３０年に３０周年を迎えました。それを記念する意味をもちまして、３０周年記念事業として色々なプログラムを展開してきました。その一環でGINZAシリーズということで、現在の銀座の景観に非常に大きなインパクトを与えた3つのプロジェクトを取り上げさせていただきました。GINZA SIX、東急プラザ銀座、GINZA PLACE、それぞれ設計を担当されました建築家の方々にご参加をいただき、たいへん興味深いお話を伺うことができました。

ご承知のように、銀座は凄い勢いで変化しているというか、いつも変化をし続ける、景観が新しくなり続ける場所です。そして多くの人たちにより多くの人々を引き寄せるような場所です。最近は中国人、韓国人観光客に占拠されつつあるような感じもしないでもないのですが…。
そういう中で本日はGINZAシリーズの集大成、まとめの形で陣内先生をはじめ、銀座に関係される方々から、「これから銀座がどう変わっていくのか」「都市景観はどうなっていくのだろうか」と、興味深いお話を聞けるのではないかと期待しています。

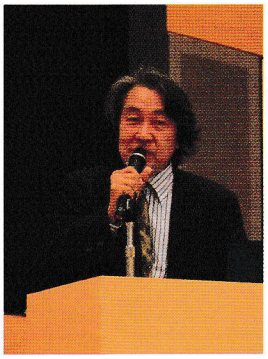
最初に中島先生にご講演をいただき、その後、陣内先生とリンクして、色々なご意見を交換されると思います。長時間にわたりますが、ぜひ貴重な時間をお楽しみいただければと思います。当協会は時宜に合ったプロジェクトをご紹介したり、その時々の興味あるテーマを捉えて情報発信をしていくために、会員にはたいへん活動を活発にしていただいています。今年３月で３０周年の記念事業としては目処をつけるつもりでいますが、その後も引き続き数々の事業企画は用意されていますので、ぜひ皆さま方もご参加いただきたいと思います。また、当協会に様々な形でご支援を賜りましたら幸いです。本日はどうもありがとうございました。（拍手）

趣旨説明　陣内秀信氏



皆さん、こんにちは。何よりも日本建築美術工芸協会３０周年おめでとうございます。また、それにふさわしい景観をめぐる大きいスケールでの議論を期待できる、素晴らしいシンポジウムにお招きいただき、ありがとうございます。私も大学時代に、芦原先生にたいへんお世話になりました。イタリア留学に行けたのも、芦原先生に推してもらったからです。

その芦原先生は建築の世界で、初めて本格的に「景観」

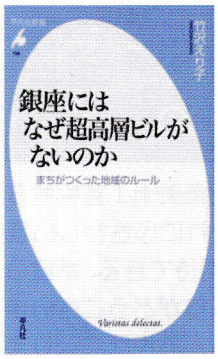


のことをおっしゃった方です。著書の『街並みの美学』でまさに景観の重要性を指摘されたわけです。また、芦原先生がつくられたこの協会が、ずっと景観を大切にして繰り返しシンポジウムをやってこられたことはたいへん素晴らしいことだし、私も時々お手伝いをさせていただきました。

今回も主催者側から相談を受けました。銀座で話題になっている３つの建築があるので、それを事例にしながら、銀座らしい景観をどう考えるのか。それを担当者からお聞きしながら、その望ましいあるべき景観をみんなで考えよう、そういう趣旨の説明を受けました。

しかし、ただ普通に「景観と銀座らしさ」というだけでは面白くない。というのは、銀座ではこの２５年ぐらい、日本の歴史、街づくりの中で大変なことが起こってきました。それは素晴らしいもので、銀座のあり方を本格的に探り、銀座の街がどうあればいいのか、個々の建物の設計やデザインがどうあればいいのか地元の主体性を尊重しながら議論するという方向に踏み出していったわけです。そのような一連の動き、成果を理解した上で、この問題を考えていきましょう、というご提案をしました。

今回の企画の責任者でいらっしゃる芝山さんからそれで賛同をいただき、「ぜひ、そういう方向でダイナミックにいきましょう」そして、３人の設計者の方からも、その趣旨に乗ってご発表をいただければと企画を考えた次第です。その意味でも、「銀座街づくり会議」のリーダーで頑張っていらっしゃる竹沢えり子さんに、中心に入っていただく必要があると申し上げました。彼女がこの迫力ある素晴らしい日本の街づくりの中で、画期的な本『銀座にはなぜ超高層ビルがないのか』を書かれました。今日は会場に蓑原敬先生をはじめ、銀座の街づくりのリーダーの方が何人も来られていると思います。後ほど是非ともこの議論に加わっていただきたいと思います。



銀座では東京という大都市の都心で、初めて地元主体の価値ある面白い動きが出てきました。そういうコンテクストの上で、この景観の内容を議論していけば、さぞかし我々も学ぶことが多いのではないかと思います。つまり、個々の建物の景観、デザインの課題に問題を閉じ込めないで、もっと大きい視野でやろうというわけです。

これまでの銀座の歩みを少したどってみたいと思います。銀座は誰もが知っている憧れの場所で、華やかですね。しかし、８０年代に日本全体、東京もバブルになり、渋谷、青山や原宿が華やかで若者文化、女性の文化で賑わいました。そういう時代、意外に銀座はおとなしく停滞していました。裏の方がバブルの状況で、スナックやバーの勢いが凄かったらしいです。何が問題だったかというと、既存不適格建造物が多く、容積率が８００％で抑えられていて、建て替えがしにくい状況でした。少し停滞して、他にいいところを取られていましたが、１９９７年に国の容積率の抜本的緩和政策がとられるようになり、それを受けて銀座の方々、そして中央区との非常に重要なコラボレーションが開始されました。現在、副区長をなさっている吉田不曇さんとある意味で一緒になり、銀座の街の発展のために容積率アップの方向に動き出したのです。

私は竹沢さんの下で、文化科学高等研究院という学際的なグループを銀座８丁目に構えてやっていました。それで銀座の方々や竹沢さんと親しくなり、街づくりのお手伝いを始めました。それでできたのが銀座のビジョンです。容積率も１１００％まで認められ、高さは５６mに抑えようという銀座ルールというものもできてきました。銀座の色々な問題が起こる前にビジョンのベースづくりをやっていたのです。

ある段階からリーダーシップをとられた遠藤彬さんは、国の方針や自治体任せになっていてはだめだ、自分たちで議論して決めるべきだと意見されました。それで銀座連合会の８０周年記念で、このようなビジョンができたのです。予めベースがあったことが強かったということです。その辺から銀座をどうしたらいいのか、何が銀座の特徴で魅力なのか、何を大切にしようかということで、行政、専門家と連帯して街づくり会議が必要だろう。そう考えていたときに、松坂屋と森ビルさんの超高層ビルの提案が出てきました。最高高さは１９０mでした。これにはびっくりしました。果たして超高層が銀座に合うのだろうか、という真剣な議論がそこから起こりました。銀座の人達にはみんなで意思疎通をして、街づくりに熱心に動く体制がちょうどできていました。そして、開発委員会もでき、竹沢さんもその中に入られ、そこから本当に凄い真剣勝負の状況が続きました。緊迫した会場で街づくりのシンポジウムを開催して、蓑原敬先生にも基調講演をしていただきました。蓑原さんに「銀座の人たちは危機感を持って、本気で取り組む覚悟はあるのか」と突き付けられました。また、銀座の人自身が推進組織を担っていく必要があるということで、「銀座街づくり会議」が２００４年にできました。

そして、またシンポジウムを行いました。そのときも緊迫していました。開発に係る方々は、みんな来られていました。お声がけをしたところ、快く引き受けてくださった槇文彦先生の基調講演は素晴らしいものでした。「道空間が充実し、通りに人間的な息遣いやくつろげる空間のある都市こそが魅力がある」とおっしゃいました。建物と道空間の関わりの重要性ですね。その辺から蓑原先生に加え、若手建築家の慶應大学の小林博人さんが加わってくださいました。そこからみんなでワークショップを行い、本当に

銀座らしい街づくりについて、物凄く議論をしたらしいです。私は脇から眺めていました。銀座フィルターによって銀座らしいものが生き残るとか、街の個性を本当に発信していこうとか。

これはみんな本に書いてあることですが、もう１回読み直して重要なところを紹介したいと思います。印象的なところは、シャネルの社長リシャール・コラスさんの発言です。銀座は目的なく水平的に回遊して楽しむ界隈空間だと、路地と界隈の魅力を強調しました。だからシャネルは出店したい。つまり、ビジネスチャンスだけではなく、銀座に惹かれて、銀座だから出したい。そういう外資系企業がいくつもあったということです。つまり、大規模開発建築は目的の定まった閉鎖的な限定的空間や、集客装置だけであってはだめだというのですね。そのようなものでは銀座の街づくりの目指すものとは反対になることを、非常に感覚的におっしゃっていました。

それこそが今日のテーマです。建物の中の論理だけで通ってしまうような集客だけをもたらすような企画では、銀座らしさは全く無くなってしまいます。では、どうしたらいいのか。そこで行政との思いを共有しながら、中央区と一緒にデザイン協議会が生まれるようになります。デザイン協議会では、自分たちがこうあるべきだということを押し出すのではなく、銀座らしくないもの、ふさわしくないものには「ノー」と言おうということのようです。

とにかく地区計画、銀座ルールをもう１回つくり直し、そこでもう１回確認します。高さ制限は５６m、屋外広告が加わると６６mの高さで抑える。今東京もあちこちで総合設計制度や特別地区の特区の指定などで従来定まっている高さや容積率をボーンとアップし、大きいものをどんどんつくって都市が変貌しています。ここで重要なことは、それを絶対にさせないことです。銀座の主体性、銀座のルールの中で、質の高い魅力あるもの、銀座らしいものを、意欲的に本当にいいデザイン、企画でつくってほしい。再開発を抑制するのではなく、いい形で推進してほしいということが、銀座側の狙いであり、考えです。結局ある時期、松坂屋と森ビルで提案した高層建築の計画が凍結されます。その間にやりとりがあり、今日も坂本さんがお話しくださいますが、素晴らしい議論が行われ、結果的に銀座らしいものが出来上がっていくことになります。

本日のシンポジウムでは、いわゆる普通の景観、建築のデザインの枠にとどまらず、この間に学習してつくり上げてきた銀座らしい考え方や哲学と方法、そして実践的活動の上に立って話し合いができればと思います。

基調講演は都市計画がご専門で、非常に広い範囲の視野で大活躍されています中島直人先生にお願いします。現在は銀座デザイン協議会にも加わっておられ、銀座をよくご存じの方です。

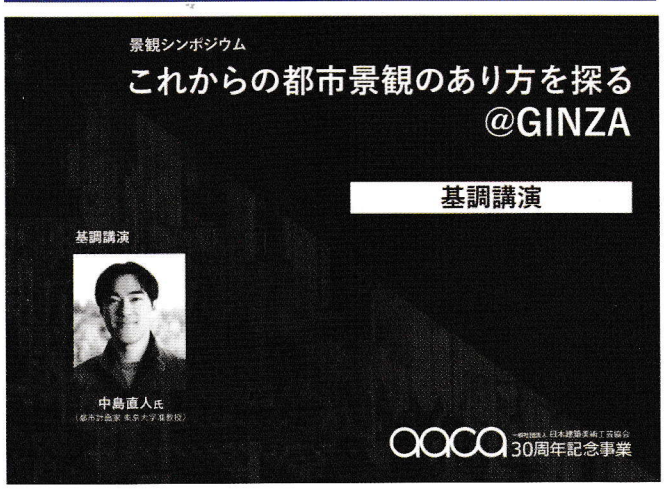
そして、休憩を挟みパネルディスカッションに入ります。銀座で話題となった３作品の設計者によるショートスピーチがあります。そこで銀座での動き、考え方、デザイン協議会からの要望などを踏まえ、どのように銀座らしい建物、建築施設を設計し、あるいは景観デザインを広い視野から考えれたのかを説明していただきます。その次に、銀座の側にいらっしゃる竹沢えり子さんに、３つの作品に対し、銀座街づくり会議がどういうことを要望し、どのように実現したのか、あるいは何が課題として残ったのかという評価の話をしていただきたいと思います。

銀座は、今ある意味で非常に難しい状況にきています。地価は高く、グローバリゼーションで外資がどんどん入ってくる。そして、ブランド企業のビルが表通りに並び、ちょっと入りにくい。ストリートの活気、賑わいが少しずつ失われ、老舗が幕を閉じざるを得ない状況もあります。そこで銀座を本当に活気ある、近未来に向けてのいい街にしていくためには何が必要なのか。消費者の考え方も変わり、少し大きい視点で言うと文明の岐路にあるかもしれません。これは銀座だけではなく、日本中の大きな都市の抱えている問題だと思います。

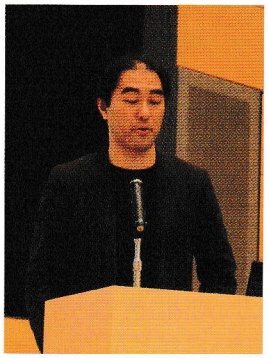
その辺は、何としても三浦展さんに登場していただくしかない。先日８０年代を振り返る本を贈っていただきましたが三浦さんと言えばパルコの『アクロス』です。今渋谷が、また少し違う方向で様変わりをしていますが、本当に渋谷が輝いて面白いのは８０年代前半です。これをリードされ、それ以後も色々と発言されています。消費者の動向、メンタリティ、文化のあり方、暮らしのスタイル、街がそういうものをバックにどう変わってきたか、どう変わるべきか。少し先を読んで、実に的確に掴んでおられます。

三浦さんにはファンが多いのですが、特に今では中国が凄いらしい。中国の人たちが、三浦さんの書物を読んで参考にしている。銀座もやはり参考にしたい。三浦さんは銀座のことを、しばらくは語っていなかったかもしれませんが、そういう思いで見ていただきたいということです。そして、その後にフリーディスカッションをしていければと思っています。

基調講演　中島直人氏

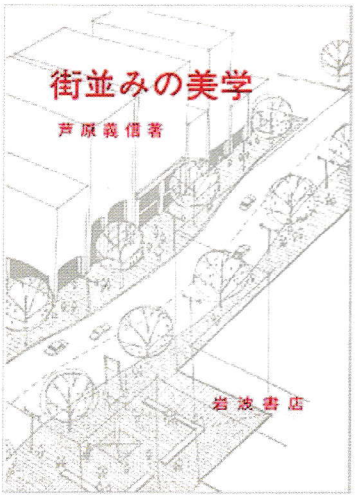


■銀座の都市景観を議論するために



皆さん、こんにちは。aacaの３０周年、おめでとうございます。このようなたいへん貴重な場にお話をさせていただけることを光栄に思います。今陣内先生の趣旨説明で、景観というものを大きな視点で捉えたいというお話がありました。今日私が用意してきているのは、銀座の都市景観を議論するための基礎として、銀座の景観の取り組みを少し大きな視点から見ると同時に、銀座の景観そのものについても共有しておくべきものがあるのではないかと考え、その説明をさせていただきたいと思います。

『街並みの美学』から読み解く芦原義信の銀座街並み論

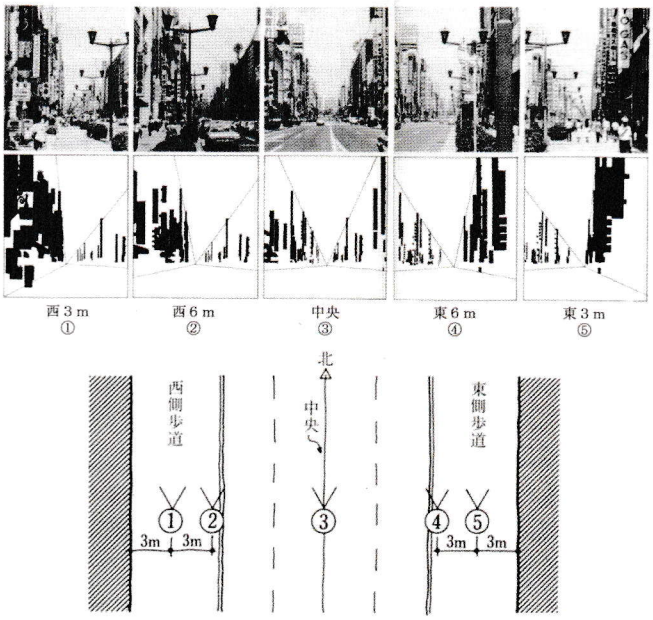


芦原義信先生の『街並みの美学』は１９７９年に出版されましたが、今でも書店で売られていますし、私たちの研究室の学生も読んでいます。これと『続・街並みの美学』もありましたが、両方を読んで勉強させていただいた記憶があります。

今学生たちが読んでいる『街並みの美学』は２００１年の岩波書店の文庫で出ているものだと思いますが、私の学生時代には同時代ライブラリーの、この表紙の『街並みの美学』でした。

この本の中で芦原先生は、１９７９年版のこの表紙に載っているプランを説明されています。これは銀座の再開発プランです。芦原先生はアメリカやヨーロッパなど、色々なところで景観という概念、あるいは街並みという概念を学ばれました。そして、日本や世界の街並みを比較しながら、特に日本的な街並みとは何かということを議論しようとしたのです。その中で銀座というものが芦原先生にとって大事で、この本の中心的なテーマと密接に関わってくるものであることが、この表紙からよく分かるかと思います。芦原先生が銀座をどのように考えたのかということを、少し紹介したいと思います。というのは、芦原先生の再開発案には、現在まで通じる銀座の課題を指摘しているところがあると思うからです。

『街並みの美学』の銀座の分析は、この１枚の絵だけです。これは見てのとおり銀座通りで各々の視点から、街並みがどう見えるかを議論した図です。芦原先生の関心は、一次輪郭線と二次輪郭線という概念を銀座で提起し、適用してみることでした。上のほうは当時１９７９年、７０年代の銀座の通りです。その通りの風景が実際、人々にどのように見えているか、ということを先生は分析しています。下の①から⑤までの景観は、それぞれ銀座通りのどこから見ているのか、その視点場が下のほうで説明されています。



建物の第一次輪郭線＝外壁面
建物の第二次輪郭線＝袖看板

ここで芦原先生は、実は銀座では建物が街並みにほとんど寄与していない、つまり建物を見ているのではなくその建物の外に付いている袖看板のつながりが街並みを構成していると論じ。それを二次輪郭と説明されました。通りの中央からは建物が見えるのですが、①、②のように子どもから見たときには、歩道側のほうの袖看板で建物が見えなくなることを分析されたものです。基本的に日本の街並みは二次輪郭線で構成されているけれども、建物の連なりによる一次輪郭線をはっきりと見せるようなものが本来の街並みではないだろうかと、この分析から議論されています。

これは先週の日曜日、歩行者天国のときの写真です。真ん中から見ても袖看板がかなり連なっている風景が銀座のもととなっているというか、現在でもあまり変わってはいないことが分かると思います。通りの真ん中から見ているといいのですが、端から見ると、確かに看板の列が連なっていることになります。

次に、芦原先生が銀座通りを再開発ではなく、改造しようとしたことが先ほどの表紙に載っている絵に表現されています。見てのとおり、道路の線形が少しカーブしたり、壁面が少し凸凹したりしています。芦原先生の説明によると、一つは歩道がもっと広いほうがいいじゃないかと。街並みという観点から見たときに、歩道が狭いと基本的には看板と風景になるけれども、そこのモニュメントを広げることでゆっくりはっきりと建物の一次輪郭線が見えてきて気持ちよい通りになる。それと併せて、袖看板を撤去すべきだとおっしゃっていました。

これらの表紙に描いてある道路の線形自体は、当時のミネアポリスのニコレットモールの影響を大きく受けています。いわゆるモール化ですね。アメリカを中心に世界で歩行者優先のモール化が始まっていましたが、そのモールでは車はスピードを落とし、ゆっくりカーブしながら進みます。４０年も前のものですから、これが良いか悪いかをここで批評してもしようがないところがあります。

歩道の拡幅、袖看板の撤去に加え、銀座に必要な３つの要素として「入隅」「正面性」「近接性」という概念をこの表紙の絵の中に描いています。

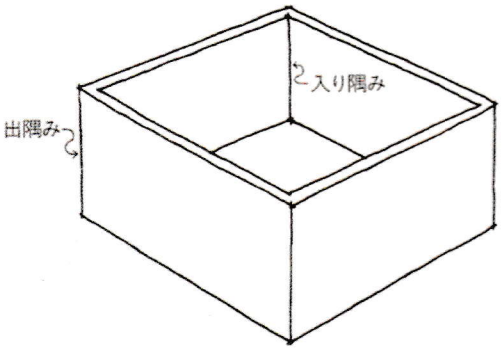


図 21　一升枡の「入り隅み」「出隅み」

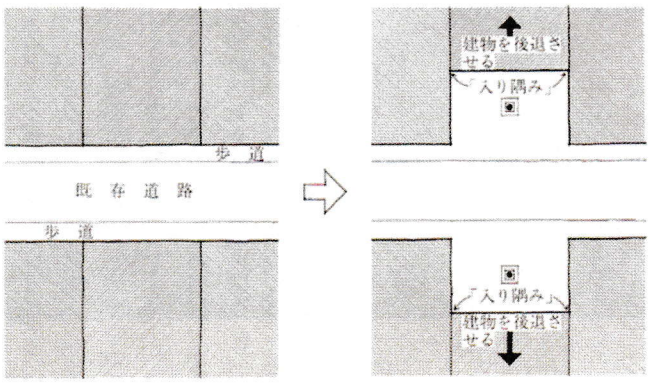


図 24　道路の「入り隅み」 既存道路でも，建物を後退させるような工夫をすれば，「入り隅み」をつくることができる．

「入隅」についてはアーバンデザインに造詣の深い建築家たちは常に注目していましたが、芦原先生は人々を包み込むような温かいまとまりのある都市空間を生み出す入隅ということを升の概念を用いて説明されています。升でいくと出隅と入隅、要するに外側と内側の角があります。建物の出隅は端の角になるわけで、ある種とげとげしいというか、人に対してはあまり優しくない印象を与えます。それに対し、内側のへこんだ入隅に関しては、人々を包み込むような温かい空間をつくることができる。芦原先生がおっしゃっていたのは、銀座には入隅がないということでした。それは「銀座が」ということではなく、銀座のようなグリッドの都市、整形の都市においては、建物の壁面性をパッと見たときに、基本的には全部出隅が角に出てくることになります。

芦原先生は銀座の街並みに対し、あるいは街の景観、背景に対し、やはりここには入隅が必要ではないか。そこで入隅を形成する方法として、先ほどの絵の中で建物をセットバックしている部分を表現していたわけです。そして、ここに広場的な空間を取るべきではないかということをおっしゃっていました。

芦原先生の作品にたくさんの入隅があることはよく知られていて、特にソニービルですね。

色々な使い方がありましたが、数寄屋橋の交差点に面して、角にまさに入隅をつくっているわけです。ソニービルの場合は、さらに１階の室内と連続させていて、全体としての広場的な空間となっていました。これは銀座通りではありませんが、芦原先生としてはこのような形で、銀座の中に少しでも温かい空間を実現しようとしていました。

銀座ソニービル（芦原義信設計、1966年　※2017年取り壊し）

今ソニービルはSony Parkになっていて、特にそこの入隅的な空間の持ち味というか、効果がよく分かります。階段があるので完全な入隅にはなりませんが、数寄屋橋の角とここで今までの銀座には見られなかったような形が生まれ、人々がゆっくり休んだりしています。

銀座通りを歩いてみると、ほとんどセットバックは行わ

れていません。後で申し上げますが、地区計画でセットバックをしないといけないのですが、それはわずかな距離です。地価の非常に高いところですから、１階のお店の面積を最大化するためにも、なかなかこういう空間はできていません。

しかし、いくつかこういうものがあります。伊東屋さんの場合は真ん中が回転扉になっていて、その回転半径も含め、このようなセットバックになっているということだと思います。

G.Itoya（大成建設、2015年）

芦原先生の指摘を受け、私もこの１週間に何回か銀座を歩いてみました。確かに街並みの中で壁面線が揃ってきれいで端正だけれども、特に銀座通りにはほっとするような空間が少ないのかもしれません。

銀座の名物として、例えば和光の前ですね。これは昨日の夜なので雨が降っていますが、このように沢山の待ち合わせのお客さんがいらっしゃることはよく目にする光景です。和光は少し丸くなっているのですが、この方々が本当に気持ちよく待っているかどうかは別の問題です。交差点での話においても芦原先生の指摘は、確かに今でも同じような考えで街を見直すことはできるかもしれないと思います。

もう一つ、芦原先生は「正面性（フロンタリティ）」という概念で銀座の批評をしています。フロンタリティは特に難しいことではなく、建物を斜めから見ると一次輪郭線は少し消えるけれども、正面から見ると袖看板が見えなくなるということです。正面から見ると、要するに建物の形がきれいに見えてくるということです。

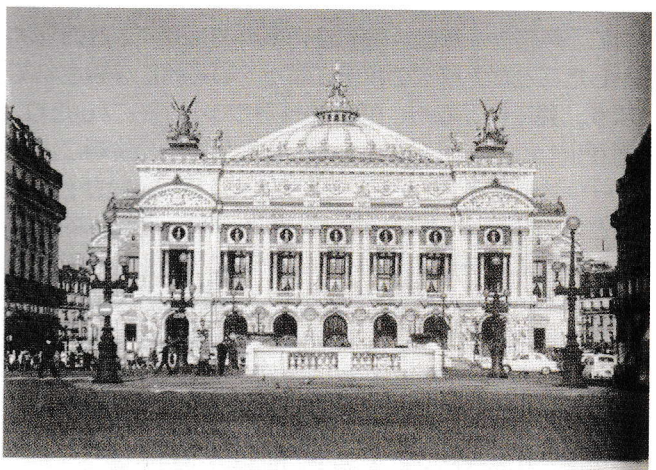


写真 31　建築の正面性――パリ，オペラ座

これはパリのオペラ座です。芦原先生が『街並みの美学』で取り上げていることですが、この美しさはビスタで効いてくるわけです。引きが２倍から３倍ないと、このように見えないという話です。

実は銀座の中には、そのような幅の広い通りも広場もありません。実は銀座では交差点が正面性を持っています。このこと自体は芦原先生が述べたことではないのですが、改めて銀座を歩いてみるとよく分かるのは、銀座通りは幅員27mで、建物の高さに対しては半分ということになります。交差点に立ったときに、ようやく１対１ぐらいになってきます。和光だと１対１以上になっています。それで初めて正面から見えますが、そういう建物がすでにいくつか交差点にあるわけです。

これは、この後でお話をいただくGINZA PLACEと東急プラザ銀座の写真です。東急プラザ銀座は引きが弱く全体が入らなくて上が切れています。特に銀座通りでは交差点に建っている建物は正面性を持つ意味で貴重であると同時に、街の印象を大きく決めています。これも芦原さんの分析からもよく分かる話かと思います。銀座は通りでは交差点の持つ意味、あるいは交差点に建つ建物の持つ意味が、非常に大事になってくる。そのことを芦原先生はおっしゃっていたのではないかと思います。

芦原先生が銀座に提案していることの3つ目が、「近接性」です。意味が分かりにくいのですが、入隅の空間と同じような感覚です。芦原先生が紹介しているのは、ニューヨークのマンハッタンにあるペイリーパークという、世界で最も有名なポケットパークです。地価が高く、人の多いニューヨークの中心部に、公園がポコッとあることの意味を問うています。

ペイリーパーク（ニューヨーク）

先ほどと少しかぶる話ですが、それが大事なのは、すぐ行ける、そばにある、手近であるという意味でのimmediacyということです。そういうものが道と一体化して、広場がポコッとあることが非常に大事だと述べています。先ほどのセットバックの話のデザイン版ということかもしれませんが、そのことを述べています。

銀座の街並みを改めて考えてみると、今そういう空間は非常にたくさん出てきています。銀座には今テラスがたくさんあります。キリコテラス、三原テラス、GINZA SIX、そしてもともと三越さんのテラスガーデンです。それはたぶん、銀座の街並みに対する問題意識があり、テラス的な空間が街並みの中で重要な役割を果たしているからだと思います。

ただ、先ほどのimmediatelyという近接性ということでは、これらのテラスはいずれも屋上であったり、通りからは入りにくい裏側の2階レベルにあります。そうすると芦原先生の批評には、「なるほどな」と思うところがあります。銀座の中でテラス的な空間が求められていて、街並みの中でもこれが非常に効いてくるはずなのですが、実は見えない場所にある。それが今の銀座だということです。

芦原義信先生の銀座通り改造論を最初にお話ししました。それは当時の銀座を見て改造を提案しているわけですが、現在の銀座の街並みを見るときにいくつか示唆的な話をされているのではないかと考え、紹介しました。

銀座の景観を生み出す都市計画のフレーム

実は、芦原先生はあくまで今のようなことを議論していて、景観については議論していないし、語っていないことの方が多くあります。大事なことは、今日のテーマになっている都市計画のフレームについてです。それは街並みの基調を成しているわけですが、そのことについて芦原先生は本では特に述べていません。そして袖看板、あの連なりを生み出している一番の原因は銀座独特というか、銀座が受け継いできた細やかな間口をつくらないということですね。その持つ意味を考えないといけないのですが、そのことまでは言及されていませんでした。また、銀座通りには建築の一次壁面線とおっしゃっていますが、実際には色々な路地があったり、縦に通りがあったり、そして裏側には裏側の通りがあったりということで、建築の壁面線で固く閉じられている感じはありません。

もう一つは夜です。逆に言うと一次壁面線で、夜は消えるのが基本です。そう考えたとき、一次壁面線を見せることの意味は何なのか。そして、景観は人が生み出すもの、人がいる風景とはどういうものか。この通りの写真を見て、確かに看板に目が行く人はいらっしゃるかもしれないけれども、多くの人はそこにいる人を見るのではないかということです。そういうことを、この後もう少し議論をしていきたいと思います。

ここで問題になるのは、芦原先生は一次輪郭線を直線で描いています。これは当時の銀座の街並みをこのように捉えたということですが、実態とは少し差があるようです。芦原先生は、銀座はスカイラインがそろった街並みがあると書いています。スカイラインがそもそもなぜこうなっているのか。そして、これが今どう変わっているのか。先ほ

ど陣内先生から趣旨の中で説明があったところですが、都市計画としてそのことを少し考えたいと思います。

建物の第一次輪郭線＝外壁面
建物の第二次輪郭線＝袖看板

『都政人』という、東京都の職員がメインに見る雑誌があります。１９６０年７月にそこで、当時の首都整備局長の山田正男さんと対談をしています。この中に山田正男さんと、直接面識のある方もいらっしゃるかもしれません。都市計画の世界では「山田天皇」と呼ばれた、高度成長期の東京の都市計画あるいは都市開発のドンというか、首都整備局長でしたので色々なものを判断した方で、オリンピックのときに高速道路を計画したり、あるいは新宿西口の超高層ビル街の計画を立てました。一般によく知られているのは日本橋の高速道路です。今まさに都市計画でそれを撤去して地下化する案が都市計画審議会で説明されているところだと思います。

１９６０年、山田さんは芦原さんと非常にエキサイティングな対談をされています、出だしは穏やかですが、山田正男さんがおっしゃったのは、都市計画は今までは公共施設の計画にすぎない。しかし、これからは公共施設に対する民間の需要を、建築物を含めてしっかりと考えなければいけない。しかも、それは美観という要素だけではなく、建築の容積と公共施設とのバランス、その関連性について考えること。そこが都市計画の肝だと。

それに対し芦原先生は、それはたいへん結構な話だ。従来、我が国では都市計画は常に二次元的な、地図に色を塗るというものだったのに対し、ようやく三次元的に立体的なものになることで、われわれ建築家としてもそれはウェルカムであり、大事だということを述べています。

対談の先へ進む前に、もう少しこの話を見てみます。この山田正男の言葉が収録されたのは１９８０年です。当時彼は東京都の人間でしたが、もともとは国の役人で、都市計画法の改正の中で色々なことを考えていました。彼の考え方は、今までの都市はつくるものであったけれども、これからはできるものであるということです。つまり、今までは行政あるいは国が道路をつくったり、銀ブラをつくったり、あるいは銀座でいくと映画館のようなものかもしれませんが、とにかく行政がつくっていく。しかし、６０年代の高度経済成長期になると、民間の都市に対する投資、需要が非常に高まってきました。すると行政はつくる必要はなく、むしろ都市は勝手にできてくるものになりました。そして、その勝手にできてくるものを都市計画はどのように受け止めて、それをコントロールしていくことが大事だと。都市ができるとなったときの需要については、需要と言われているものが容積に置き換えられ、その容積をコントロールすることでインフラの量と都市の活動量をバランスさせようという考えです。ここに大きく現代の都市計画にいく転換点があったわけです。

陣内先生から紹介があったように、今までは建物の形態を規制していました。商業地区では３１ｍと、ずっと決まっていましたが、それは建物がどのくらいの活動量があるかということとは、正確にはリンクしていませんでした。それに対し、山田正男が述べたのはどのくらいのビルが建てばどのくらいの交通発生量があるのかということ。そのようなことを検討して容積制度へと移行していくわけです。

参考までに交通需要と容積の関係についてお話ししましたが、銀座についても同様な検証がなされて容積が８００％になったという経緯があります。

次に、容積制度への移行によって、どのようなことが起きたかという事例を紹介します。丸の内がいちばん分かりやすいのですが、前川國男さんが設計した東京海上ビルディングです。これは容積地区制度になって最初の丸の内の建築計画で、大好評でした。この建物は、当時、最高高さ１１０ｍぐらいで建てようとしたものです。丸ビルを含め、それまでの丸の内は３１ｍと高さがそろっていたわけですが、これがなくなっていくわけです。

丸の内美観論争（1965－1970）

美観論争が起きたときにこれを推進したのは建築界でした。山田正男は、容積制度により街並みが崩れることを当然理解していました。景観をコントロールすべきだということで、容積制度と同時に都市計画に関しても論争をよびましたが、実はこのとき、ここには戦前から美観地区が指定されていていました。これを機に美観地区条例をつくり

始めたのが山田正男ですが実現はしませんでした。

容積制度による街並みは崩れ、最終的に高さ９７ｍで決着しました。その後、大手町方面は全て１００ｍのビルが建ちました。その後、容積がアップしました。これは三菱地所の提案によるものですが、その容積により街並みがどんどん高層化していく。今の丸の内はマンハッタン計画とは少し違い、基本的に超高層でも容積２０００％まではいきませんでしたが、１５００、１６００ぐらいになっている建物が建ちました。そこには需要があったということです。そこにオフィスの需要があってということです。そして、これにより東京の一極集中を促進するということで批判されるわけです。

先ほど陣内先生もお話ししてくださったように、銀座の場合は容積制度で８００％になっても街並みがほとんど崩れなかった。すでに重要な建物、つまり三越さん、和光さん、松屋さん、そして三愛ドリームセンターもそうですが、容積制度の前に３１ｍで建っていました。それ以外の建物は６０年代、７０年代にたくさんありますが、敷地は狭く、前面道路が２７ｍです。その中で８００％という容積を使って建てられないわけです。

実は丸の内が違ったのは、少なくとも新しく建った建物に関しては、あまり大きなものが建つという形で美観論争が起きなかったところです。

一方で、既存の３１ｍ建物が容積率の点で既存不適格になってしまい問題になったことが、先ほどの陣内先生の説明にあったところです。三越とかは１０００％を超えるような容積になっていたということで、要するに敷地ぎりぎりで建ぺい率がかなり高く、３１ｍで建てているということでした。この点について、私も竹沢さんの本を後で読み返してみようと思っています。

今の銀座の景観のいちばん大事なところは、その背景に都市計画の枠組みがあるところだと思います。２度にわたる地区計画の改定も含めた策定と、そこに地区協に加えデザイン協議があることです。竹沢さんにお目にかかったときに渡された当時の文化科学高等研究院の報告資料は非常に内容の深ものでした。普通にやると高さ３１ｍでギリギリ。しかも建て替えてしまうと、今のものより容積が減ることを検証しながら、その容積率をどのように上げるか。しかも前面道路の斜線制限を外せば、容積がどのように使えるか。こういう議論を街の人たちがやっていたことが非常に大事です。

もっと大事だと思ったのは、５６ｍがどのように決まったのかということです。資生堂の建物の計画が当時すでにありました。大事なことは、ここで建物が本当に必要なものを積み上げたときにどのくらいの高さになるのか。それを資生堂のビルで検証すると５６ｍであり、それでいこうとなった。５６ｍに何か環境的な根拠があるというよりも、銀座で本当に将来必要なものがこれだということだったのです。

逆に言うと、とにかく容積をたくさん積み、高く建ててもうけようということではなく、ここで代々商売をやっている人たちが、その商売をどのようにやるか。資生堂なら資生堂の商売をやるという中で積み上げたのです。その数字に科学的な根拠はあまりないのですが、ものすごく意味がある数字なのです。その決め方としては丸の内とは違い、銀座らしい、少し違うものがあったということです。これにより斜線制限が外れ、かつ高度利用地区で３００％までの容積上乗せということで方針が進んでいきました。

先ほどの芦原先生と山田正男さんの議論はその後、白熱していきました。その中で考え方がいちばん違ったこと、芦原さんは次のようにおっしゃっています。街並みというのは制限するのではなく、むしろ積極的に創造することにより、都市美をつくり出すことが今の主流である。壁面とかの規制をそろえるという考え方は、１９世紀のヨーロッパの都市であり、それはおかしいのではないか。

それに対し山田正男さんは、いや、それは考え方が違う。都市美の観点で高度を制限するのは、確かに１９世紀かもしれない。しかし、そもそも１９世紀的、今的ということで街並みを考えるのはいかがなものか。その時代、時代において流行の震源地を見て、それは都市美であるというのは少し違うのではないかと。

山田正男は建築家に対し、都市行政は公としての責任だから、個々の建築家の趣味としてやられたら困ると繰り返し厳しく言っています。因みにこれは銀座のことを言っているわけではなく、例えば新宿西口でどのようなルールを決めるか、という話の中での議論です。

しかし、この中に銀座の景観の問題としても重要なことが含まれています。銀座での地区計画により、どのように都市構成として決めるか。その一方で、建築家の都市美を創造する力もある。その両者の相克のようなものがあり、それを芦原先生と山田正男が６０年に議論しているのですが、その議論は銀座の中でも同じように９０年代から２０００年代にかけて議論があったと思います。５６ｍという高さでそろえると言ったわけではなく、最高の高さを指定

して、それでそろえるのか、そうしないのかという議論があったということです。

景観とはどういうものなのか。創造力と、一方で全体としての調和ですね。その中で銀座デザイン協議会が、まさに建築家の創造力と都市美をつくっていく力を最大限に活用していく。それを都市計画の銀座ルールと同時にやっていく。その中で銀座らしさを創出する銀座フィルターを考えていく。今の銀座にあるのはそんな仕組みですね。

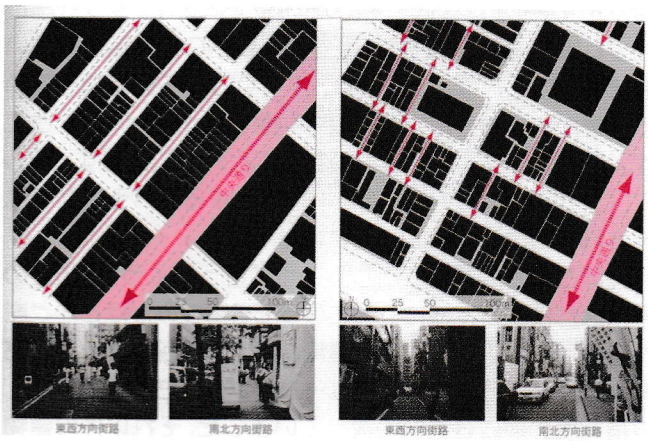
これは、たぶん山田正男の頭の中にはない仕組みです。つまり、近代都市計画の頭の中にはない議論が銀座を生み出した。近代都市計画的な地区計画と同時に、そのようなことを合体させたことが、銀座の今の景観をつくるのにとても大事な仕組みです。これは今日の重要な話になるかは分かりません。むしろ、景観の背景となるこの二つの考え方を、どのように両立させるか。そういったところに銀座の問題があるということです。

銀座の景観を生み出す銀座の個性

銀座の景観の特徴と言えることは、「細やかな間口の連なり」でしょう。これは、どこにでもある街並みではなく、日本的でもなく、しかし銀座の個性を表す非常に細やかな街割による風景だと考えられます。これがなぜできたかのを岡本哲志先生が非常に詳細に追っていて本当に素晴らしいと思います。銀座が素晴らしいのは、銀座のことをしっかりと調査して、それを形に残し、次の人が勉強できるものがあるということだと思います。

また、銀座がなぜ面白いかというと、細かいだけではなく、細かいものと大きなものが混在していることだと思います。そのことも歴史的に見れば、江戸時代からの敷地割りと、敷地の中での町家の建て方ですね。そのことがずっと効いてきて、つながっていることが書いてあります。今日はそれ以上のことはあまり述べられませんが、街並みをどのように考えるかということが歴史的にも見えてきます。

今銀座で起きていることは、細やかな間口が合併され大きくなっていると同時に、一方でGINZA SIXなどは、まさに暖簾の表現により間口をむしろ復活させ、ここまで割ったわけです。間口がどんどん広がっているわけではなく、一方で本当の間口ではないものの、新しくまた小さいものを創造されたりしています。非常に大事な、面白い銀座のダイナミックなところです。



銀座　　京橋

東京大学都市デザイン研究室『都市空間の構想力』2015年

京橋との違いについてお話します。銀座通りを少し北に行くと京橋です。銀座とグリッドはほとんど一緒ですが、方向が９０度違っただけで、こんなに景観が違ったということです。つまり銀座の場合は頂点が銀座通りに面していたので、それを６０間のグリッドで割ったので今の景観になっています。

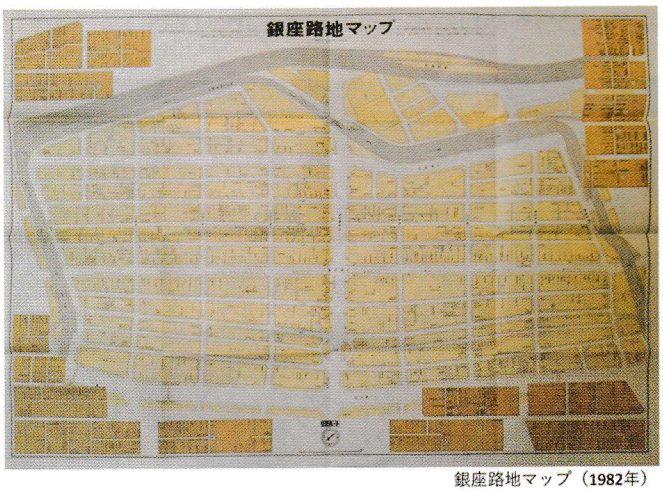
実は京橋に行くとそれが逆転してしまっているせいで、銀座通りの延長にある中央通りは、その感じが面白くない通りになっていて、むしろ横の通りに力があったりします。実は銀座の景観は、もともとの街割りがどのようにつくられたかということに非常に関係していること。そしてその中で、歴史的にずっと築いてきた路地があるということだと思います。

銀座の通りというと、どうしても銀座通りと晴海通り、数寄屋橋ぐらいになりがちです。しかし、銀座にはその裏側にたくさんの魅力的な通りがあることは、銀座デザインルールでも取り上げ、銀座通りだけではない、景観の多様さがあることを指摘しています。

そのことも含め銀座の景観は、パッと１回で見られるのではなく、歩き回って体験して浮かび上がる像というものが、その景観と分かると思います。西並木通りは幅員が銀座通りの半分、１４.５mだと思います。

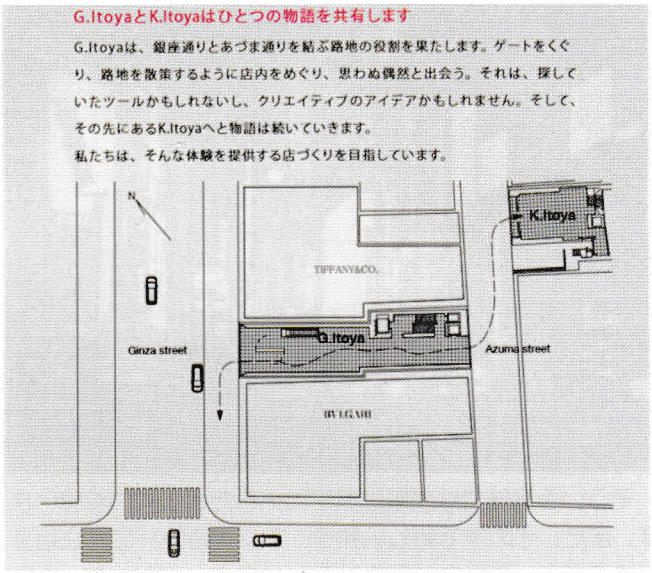
ここだと銀座通りと全然違う、まさにヒューマンな街並みであったり。あるいはみゆき通りは日本の都市ビルの発祥地の一つでもあり、戦前から都市の美観運動をやっているところです。今でもペイブ（舗装材）とか植栽に非常にこだわった通りが縦に伸びていたりします。

しかし、路地も歩いてみたらだいぶ無くなったり、様子が変わってきているところがあり、残念に思うところもあります。その一方で残り続けることが非常に大事です。銀座通りからも、かつての路地がビルの中に取り込まれていたりするところがたくさんありますし、また新たにつくったりしています。

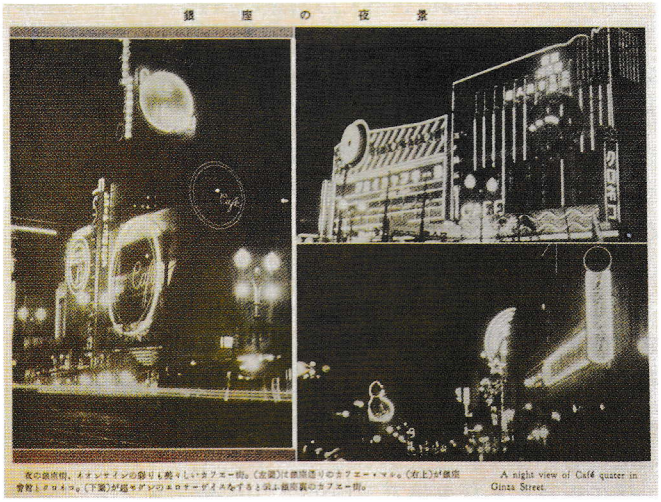


銀座路地マップ（1982年）

伊東屋さんも実は、これは自分のお店をショーウインドー化したところもあり、建物のコンセプトには書いてあります。「路地としての建物」と。

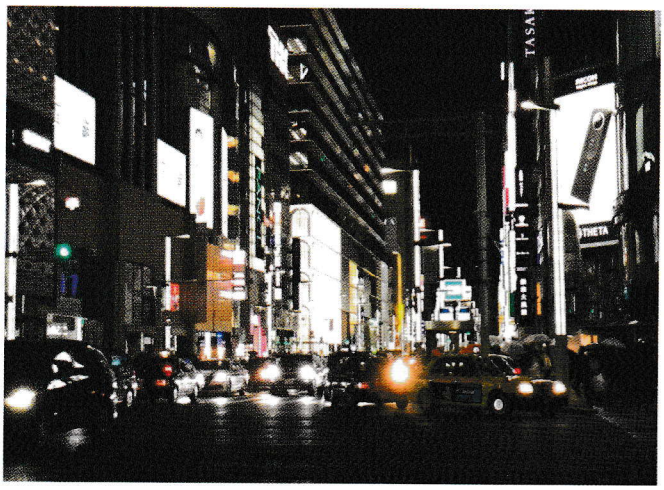


そういう意味では路地というDNAが、古いものをただ残すということではなく、銀座の一次壁面線がそろった街並みに対し新しく違うものとして、９０度に入ってくるものとしての路地のようなものが、この街並みにとっては大事なものとして存在しています。



そして、夜の街。夜になると建物は消え、看板とかが光るのがかつての風景でした。今の銀座は、実は建物が光ってきます。GINZA SIXは夜が本当にきれいだと思います。

下の店舗の面と上部の水平な庇の話とか、その効果がよく分かります。あるいは、いま明かりは銀座の活気そのものを表しています。山田正男はこれを容積という形で数字に置き換えましたが、われわれは景観として、見るものとして、温かい光として、銀座の活動を感じることができる。夜に行くと銀座が元気なのか、そうではないのかがよく分かります。



そういう意味では夜景は非常に大事だとつくづく思います。また、その中で新しい技術、テクノロジーにも注目すべきですね。もともと電気は新しいテクノロジーで、銀座が導入してネオンをつくったものです。最近ではプロジェクトマッピングとか、色々なプロジェクターの精度も上がりました。次々と新しい技術が銀座の街並みに取り入れられてくることについて、まさに銀座街づくり会議で議論になっています。

人が生み出す風景。世界では風景と景観の話がどう動いているかというと、建物ではなく、そこでのアクティビティに人々の関心は圧倒的に集まっています。それはlivableとかlivabilityと呼ばれているものではなく、暮らしやすさ、生き生きとしたというときに、実は建物が少し汚い、そろってないというよりも、路上でどのような人々の表情があるか、生き生きとした表情が生まれているかということに大きな関心が持たれています。

そこで銀座はどうか。銀座がいちばん凄いと思うのは、必ず銀座の通りの真ん中に立ち、誇らしげな顔で写真に写る人方がまだ何人もいらっしゃる。そういう方がいることに、銀座の街がまだ価値があり、認められているということだと思います。

その街をどんな表情で人が歩いているのか、どんな表情で歩いてもらいたいのか。そういうことを考えると街並みのつくり、特にボトムのつくり方が決まってきます。そのことも銀座の景観をどのように考えるのかにおいて大事です。建物がきれいでも、人が死んだ顔をしていたら意味がありません。人をシャキッとさせるものなのか、笑わせるものなのか、色々なことがあると思います。人との応答関係をどのようにやるかということが、また一つ大事なことだと思います。

街並みとは何か

最後ですが、芦原先生は『街並みの美学』の最後に「街並みとは何か」について端的に述べています。「街並みは、そこに住みついた人々が、その歴史の中でつくりあげてきたものであり、そのつくられかたは風土と人間とのかかわりあいにおいて成立するものである。であるから、この地球上に現存する街並みは、その人間存在の時間的空間的な自己了解の仕方と深く関わりあっているものである。」と。その人間が、自分が、どういうローカリティで、どう存在しているのか。その自分を考えることと、自分というものが街並みを創出するのであると。

銀座は、まさにそういうことをずっと問うてきています。それは、銀座という街は何なのか、銀座とは何なのかを問いながら、それを街並みとして表したいということです。

地球上には、歴史のある街並みが色々とありますが、近代の中でこのような街並みをつくってきた銀座は、色々な面で岐路に立っており、一方では近代を超えた、次の時代の街並みを考えるときには、大きな示唆を与えてくれると思います。

私もこのことについて勉強し続けていきたいと思っています。どうもありがとうございました。（拍手）

パネルディスカッション

（陣内） 先ほど中島先生が見事に問題の核心に触れ、アプローチや考えるべき課題を整理してくださり、ベースをつくっていただいたと思います。この協会の創立者でいらっしゃる芦原先生の考え方をベースにしながら、当時の銀座の特徴を芦原さんがどう考えられたか。実際に銀座にそういうものを当てはめるとどうなのか。交差点が非常に重要だという話も出てきました。GINZA PLACEには交差点がありますし、東急プラザ銀座もそうです。そういう課題を、設計者がどう考えられたかという問題が出てくると思います。

そしてもう一つ、入隅の広場ですね。ニューヨークのポケットパークという話がありました。芦原さんの場合はソニービルで見事にやられたわけですが、そういうものはなかなか難しい。つまり、銀座は壁面線がそろっていて、地価が高いところでセットバックするのも難しい。

最近は、少しずつ工夫はあるけれども、本格的にはなかなかできない。その中で、ある種の現実を踏まえた妥協ではないでしょうが、代償物として屋上に広場や公園ができ

ています。これは新宿のデパートあたりにたくさんありますし、大きな建築の中間層にもあります。それはある意味で日本的な現代の解決方法かと思います。一方で、シャネルの社長が銀座の特徴を魅力として言ってくれた、水平に移動しながら街を歩く地上のオープンスペースのネットワーク。それだけではなかなかできないのではないかという気もします。

それから、路地の話、間口も非常に重要です。間口をどう考えるか。大きい建築の場合、外観、分節的なデザインをどう考えるか。GINZA SIX は見事にそれをなさったわけですが、他の建物ではどう考えられたのか。それから、路地の中にこそ面白い機能がある。人のアクティビティ、メンタリティと非常に結び付いた日本的な空間の魅力を、銀座は総体的に持っていたと思います。

その辺が高層ビルばかりになってくると、中の居心地が悪くなってきて、逆に今度は大きいコンプレックスの中に路地を、パサージュのようなものかもしれないけれど、それを取っていく。公共性、街路性、都市性のようなものを、都市の空間の建築の中にどうやって入れていくかという大きなテーマがあります。しかし、全部都市性をパック化して、それを中に入れてしまったのでは死んでしまう。この辺が建築を設計していくところでの、非常に重要なテーマかと思います。

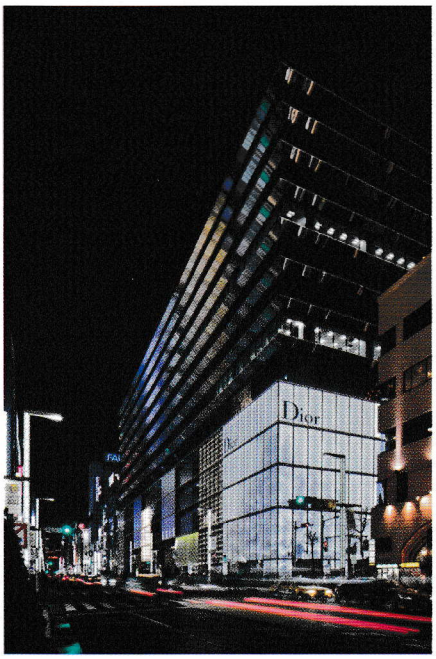
もう一つ、芦原さんと山田正男さんの論争を知らなかったのですが、非常に面白く伺いました。芦原さんの、規制をするより、むしろ創造性を伸ばし、そこから都市美が導かれるという話。それに対し、どちらかというと規制を有効に働かせながら都市美をつくっていく山田さん。都市計画化という話がありました。しかし、芦原さんが街並みのことをおっしゃったときに、私は非常に重要な問題提起をされたと思います。

それはジェイン・ジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』で、どんどん高層化していくアメリカの再開発でオープンスペースを取り去りってコミュニティも崩れるし、街並みなどはなくなる。しかし、逆にそれが犯罪の温床になったり、問題を引き起こしている。むしろ、混在しながら連続的にできている界隈性。芦原さんはそれを街並みに置き換えて、その持っている重要性を初めて日本でアピールされたのが芦原さんだと私は思っています。それを見事にやっているのが銀座です。

丸の内はそれをどんどん壊しているわけで、公開空地やオープンスペースを取り、それはまた別の美学が生まれている気がします。日本橋はまた上手にやっていると思いますが、岡本哲志さんが明らかにしたように、銀座はいやが応にも非常に間口の狭い街区。びっくりしましたが、京橋は街区の間口が狭いというのは面白い指摘ですね。銀座は長く連続しているところが魅力。しかし、通り抜けができないとなるときつい。その辺のアーバンコンテクストと建築の設計を、どう考えたらいいのか。まさに面白い課題がたくさん出てきます。基調講演でたいへん素晴らしいお話をいただきました。あとDNAですね。DNAを受け継ぎながら、これからどうつくっていくか、銀座のデザイン会議が創造的に話し合いながらやっていくということですね。

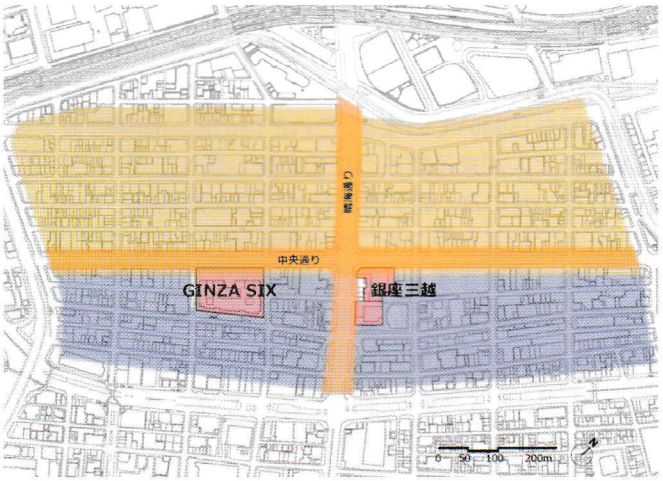
さて、銀座からの要望に対し、設計者がどのように答え、受け止め、解釈し、つくってこられたか。伺うのが楽しみなのですが、それぞれ5分で申し訳なく思います。
それでは、坂本さんからお願いします。

■ GINZA SIX 設計者　鹿島建設　坂本弘之氏



（坂本）GINZA SIXと街づくり協議会は本当に表裏一体で進んできました。私自身は、昨年10月のaaca講演会でお話したとおり、2012年から鹿島として参画しました。

これは銀座の地図です。銀座三越も同じように道路を付け替え、区道の廃道付け替えを行っています。



あづま通りの延伸部と言われているところは奥に百貨店の駐車場があり、渡り廊下で建物がつながれている形でした。ここは車が往復したり、荷さばきの動線に利用される形になっていました。特に街づくり会議で言われたのが、銀座はどちらかというと並木通りなどは、にぎわっているけれど、以前お堀があった頃は栄えていた東側が、お堀が埋められてからは活気がないという事でした。それで三越

でも、なるべく人を東側に送るにはどうしたらいいだろうかと考えました。それが景観についての読み解きです。

道路付け替えをした部分は、なるべく歩行者が歩きやすい道にしました。当初、ここにカフェを入れてパリにある歩道のようなものを目指しましたが、今では宝石店に変わっています。街づくり協議会の了承を得て、そういう変更になっていますが、車がいなくなり歩行者専用になれば、この道のよさがでてくるかと思います。ハードとしてはそろえていますが、正直まだソフトが伴っていないところがあると思います。

GINZA SIX の三原テラスにしても、中央区の要望としてバスの乗降所をつくっています。また、地元の要望で「水と緑のポケットパーク」というお題をもらい、それを実現しています。ただ、実際には敷地の外ということもあるので、これを実現するのに駐車場の付帯施設として成り立っています。先ほど指摘がありましたが、今は三原テラスを降りて三原通りへは行けません。それは街づくり協議会からも言われているテーマで、この辺、そのきっかけはつくっているのですが、我々だけができるものではありません。今後、街づくりと一緒になり、さらによくしていくのが一つの課題かと思います。

街を生き生きとさせる建築のあり方についてお話します。それは、チャンスがあればできることですが、敷地の外にまで建築が関与して提案していくことかと思います。そのことが街とのつながりを作ったり、通りに人があふれるような感じを生み出すのに大切かと思います。

屋上の広場は店舗が閉まってもオープンしていますし、朝も7時から開いています。これだけの広い面積が最上階にあるので人が来るだろうかと心配しましたが、街並みに広場がないせいか、朝7時に行っても人が結構います。銀座ルールでレストランをつくったりはできないのですが、結構賑わっています。　また、施設としては定期的に色々なイベントを開催しています。地下３階に観世能楽堂があるので、屋上で薪能をしたりします。そういうことをやると盛況です。歩行者天国と同じように常設ではないのですが、そういうお祭り的なのも日本の広場としてはあるのかと思います。

もう一つ、生き生きとさせるという意味では「ひさし」と「のれん」のシステムがあります。これは谷口先生の考えですが、一人の建築家が幅１１０m のファサードをデザインするのではなく、他人にやらせる形で提案するのも街に対するファサードを持続させる点では意味があるかと思います。のれんルールのようなものをつくり、各店舗のデザイナー達にやらせると、自分で決めてしまったルールで縛ってしまうけれども、いい案だとそれを破っても実現させてあげたいと思ったり、スケールは違いますが街づくり協議会の苦労がわかるような気がしました。

（陣内）ありがとうございます。重要なポイントを言っていただきました。先ほど時間があり、道路から三原テラスに上ろうとしたら「だめだめ」と怒られました（笑）。あれはつながるといいですね。

それから、のれんの話がありました。あれは時代により、だんだん変えていくことも可能ですか。

（坂本）もちろん、そうです。お店を営業しながらも容易に変えられるようになっています。

（陣内）それぞれお店に、ダイレクトに銀座通りから入れるのがいいですね。もともとのデパートはそうなっていないので、間口だけではなく、それが決定的に違いますよね。

（坂本）ただ、あれがのれんとして看板のようになってしまうと本当はよくない。多少奥行き感というか、中が分かるといいと思います。それは建築家がデザインしていると、中の様子を見せたりしますが、インハウスのデザイナーだと、モニュメント的な捕らえ方でデザインしてしまう傾向にあります。

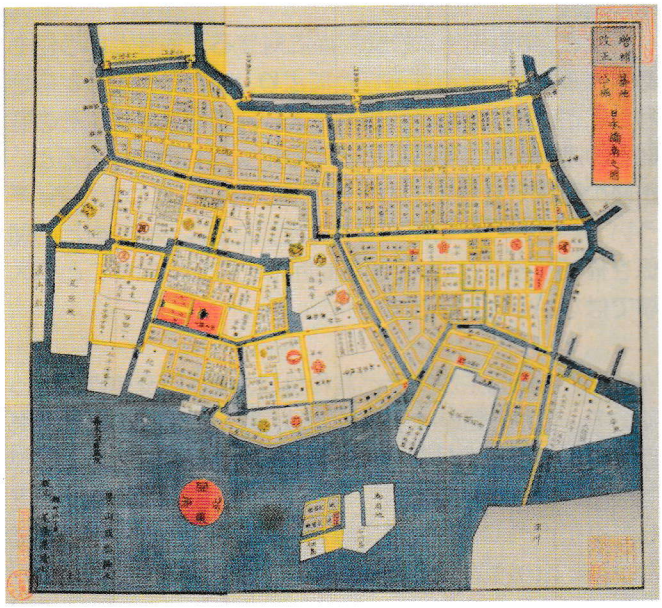
（陣内）重要ですね。独立したお店が並んで雰囲気のある空間と景観ができる。ありがとうございました。

■ 東急プラザ銀座設計者　日建設計　畑野了氏

（畑野）設計者として銀座の街をどう読み解いたかというところを説明します。銀座は比較的新しい建物がありますが、ともかく江戸時代から４００年間続いてきた都市です。それは岡本先生の本にも詳細に書かれていて、設計をしているときにすごく参考にさせていただきました。

銀座は目に見えて分かりやすい古いものがあるというよりは、中島先生の発言にもありましたように、街区のスケールに街の歴史が表れているのではないかと思っていました。特に隈研吾さんが歌舞伎座を語られるときに、ファサードに対し遠景、中景、近景、つまり遠くから見たときの視点場と、中景で見たときの視点場と、近景で見たときの視点場。それは私が設計をすると

きに、すごく意識していたことです。銀座を大きな通りから路地まで、スケールの横断が簡単にできるところが銀座の街の魅力になっていると感じています。そのスケールというものをすごく意識しながら、建物の設計をしました。



次に、都市を生き生きとさせるために建築ができることについてですが、これからの都市景観を考える上で、二つ大きな視点があると思います。一つ目はパブリックスペースです。都市を考える上で建物と道路、パブリックスペースというところがすごく重要になってくると思います。銀座のような地価がすごく高いところで、公園を新たにつくったりすることは現実的ではありません。そういったときにどうしていくか。都市をより立体的に捉え、建築の中にパブリックスペースをどうつくっていくのか。そこが今後の街づくりにとって、また銀座の街づくりにとってもすごく重要な点になると考えています。

もう一つは、先ほどの中島先生の講演の最後でアクティビティについて語られていたと思います。私はまさにそう思っていて、体験ですね。インターネットでものが何でも買える時代において、わざわざ銀座の街に出てきて買い物をする理由は何なのか。やはり銀座の街でしかできない体験をつくること、それが大事ではないかと考えています。その体験を建築でいかにつくるのか。それを今後、銀座の街の中で、一つひとつの建物が設計されていくときに考える必要があると考えています。

（陣内）ポイントをおっしゃってくださり、ありがとうございます。具体的に建物内にパブリックスペースを探求したのは、例えば屋上を含めて？

（畑野）はい。東急プラザ銀座では、本当は１階に数寄屋橋公園とつながる公園のようなものをつくりたかったのですが、さすがにそこは収益性が重視されました。そこで、６階にキリコラウンジという数寄屋橋交差点から見えるパブリックスペースを設けています。

あと屋上に、キリコテラスというパブリックスペースを２カ所設けています。グウランドレベルでは数寄屋橋公園を建物と一体で整備させていただいていますが、その数寄屋橋公園を建物のパブリックスペースと見立て、その１階と６階と屋上。都市の中で立体化するパブリックスペースのようなものをテーマに設計しました。

（陣内）地上で必ずしもつながっていなくても、視覚的、心理的につながっていくということですね。そういう解釈もありますね。ありがとうございました。

■ GINZA PLACE 設計者　大成建設　山本実氏

（山本）先ほどから話にあがっている芦原先生の『街並みの美学』ですが、私も学生時代に読んでたいへん感銘を受けた本です。そして今、このような場にいられることにすごく感激しています。このような機会を与えていただき、たいへんありがとうございます。私自身、この１０年間に銀座でいくつかプロジェクトをさせていただいています。その経験を通して銀座をどのように読み解いたかについてお話ししたいと思います。

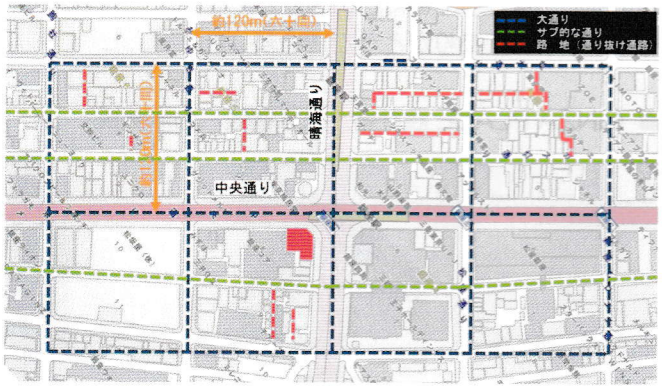
まず、銀座と言えば、恐らく高級感、洗練された街、上質な大人の街、そういったキーワードが思い浮かぶのではないかと思います。そして、街についても、端正で落ち着いたイメージが一般的ではないかと思います。しかし、実際に銀座を訪れてみると、建物が統一されているというよりは、むしろ個性的なものが多いことに気づきます。

例えば、この写真です。GINZA PLACE があります。街並みは、現状はこのようになっており、一つひとつがかなり個性的で、統一されている印象ではないと思います。それから、銀座の魅力として先ほど来挙がっていますが、

大通りとは趣の違った界隈性の高い路地なども中心部に多く存在しています。決して高級なものばかりがあるわけではないことが、銀座の一つの魅力かと思います。

しかし、なぜ統一感のある印象を受けるのか。考えてみると、銀座は地価が非常に高いこともあり、敷地いっぱいに建物を建てることで外壁ラインがそろっています。あとは地上のアクティビティですね。店舗の賑わいが連続してつながっていることで、街並みの一体感をつくっているのではないかと思います。

もう一つ、銀座の街区構成がしっかりしていることも重要な要素だと思います。江戸時代の街割りが、そのまま受け継がれていることがその特徴で、６０間、約１２０mの碁盤目状の街区が形成されています。



大通りは６０間ぐらいのしっかりした街区。先ほど来、中島先生からも説明がありましたが、そういった構成がしっかりしていることが、その内部にサブ的な通りや路地裏空間が同居しても、全体としてまとまっている印象になるのだと思います。これが地上の銀座の平面的に広がる賑わいにつながっています。

今回、銀座の中心に建つ建物として平面的には大きくないこともあり、この地上の賑わい、アクティビティを垂直に引き上る試みをしました。その中で多様なシーンが混在していることも銀座の魅力の表現と考えています。

街を生き生きとさせる建築について私の考えをお話します。先ほどからパブリックスペースというキーワードも出ていますが、その答は街との関係をしっかりと構築することにあると思います。ただ単に周囲に同調することではなく、銀座の多様な通りにその特性に合った足元の賑わいを考慮しながら、単体としても個性的で魅力のある建築を生み出していくことが、街に活力を与えるのではないかと考えています。

これはGINZA PLACEの足元ですが、いちばんこだわったところは入口と軒空間です。入口の部分を交差点に向けてつくろうと、クライアントと話し合いました。最初は、やはりテナントをたくさん入れたい、最大限の貸し床面積を取りたいということで反対意見もありました。多くの案をつくって議論を重ねた結果、最終的には何とか納得していただき、入口をこの真ん中にもってきました。

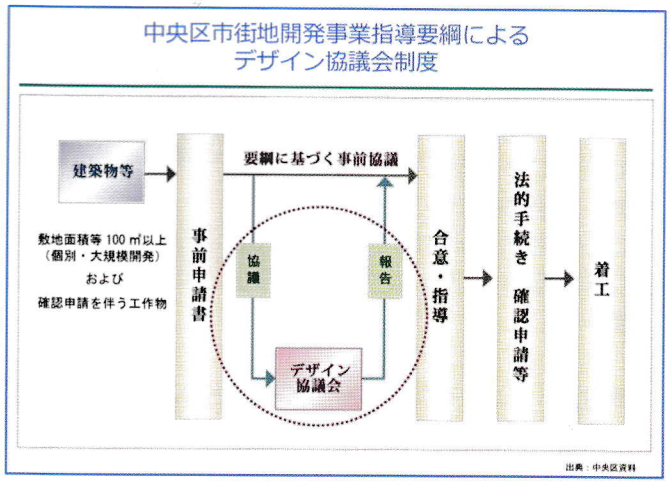
先ほど、中島先生より交差点に対する正面性という話もありましたが、そうすることにより、街としっかりと向き合うこと。それから、交差点で人が滞留しますが、その空間との連続性をつくることを考えました。この中に入ると、垂直の動線であるエスカレーターに直結してつながる。そういったところにこだわりました。このように、街との関係を構築することに、できる範囲で工夫していくことも大事ではないかと思います。

（陣内）中島先生が先ほど言われた、まさに交差点に建っている。しかも銀座４丁目の角は、銀座煉瓦街のときにもうすでに隅切りをしていましたね。朝野新聞、そして服部時計店、今の和光ですね。そこに三愛、三越と、隅切りをした交差点は非常に重要ですね。ここをどうデザインするか、今までの建築家はみんな向き合ってきたのではないかと思います。これに対し、一つの解決を与えられたと思います。ありがとうございました。

（陣内）それでは、今までの思いを込めて設計をなさった。それに対し、銀座デザイン協議会の竹沢さん、色々な注文を出されたり、銀座への熱い思いを語ってくださったと思います。その話を中心に、よろしくお願いします。

■ 銀座デザイン協議会からの要望とその実現について

（竹沢）こんにちは。全銀座会、銀座街づくり会議の竹沢です。今銀座を代表する３つの建築について、設計者の方からご発表をいただき、本当にありがとうございます。銀座で行われる開発の皆さまには、まだ建替計画がはっきり定まらないくらいの、東急さんの場合は土地を取得したぐらいのときから細かく話し合いをさせていただき、本当に感謝しています。と申しますのは、先ほどから話が出ていますが、銀座には高さや容積率を定める地区計画とは別に、銀座デザイン協議会というものがあります。



左から右に流れる流れは中央区の手続きの流れですが、敷地面積１００平米以上の建築物、そして確認申請を伴う工作物に関しては、その途中に地域のデザイン協議会を設け、そこときちんと協議をしなければ中央区も合意しません、という決まりがあります。

実はこの決まりはGINZA SIXさんという名前が付く６丁目の開発が当初、超高層を建てたいという話があった頃の２００６年に生まれたものです。様々な規模の開発に対応していますが、特に大規模開発の場合はこの協議にとどまらない、様々な話し合いを継続的に行っている状況です。

今対応している協議件数を紹介したいのですが、２００６年から始まり総計、累計で２０００件を超えました。年間３００件ぐらいの協議をしています。その内容は先ほど紹介した新築、確認申請を伴う工作物の範囲を超え、ちょっとした袖看板、広告の張り替えなども、ほとんど協議をさせていただいている状況です。これをタイプ別で見ると、広告デザインが今半分ぐらいとなっています。

銀座には全銀座会という、銀座の町会、通り会、それから様々な業界団体が集まった会があります。その下部組織として銀座街づくり会議、銀座デザイン協議会が運営されています。これは中央区の要綱に基づき、区長から指名を受けて運営されているものです。銀座デザイン協議会で何か協議をすると、先ほどからお話があるように、都市はつくるものではなく、できるものだという話だとか、創造性についての議論になります。

私たちは何か規制やルールを、カチッとした決め方をするのではなく、「銀座らしいかどうかを事業者の方と徹底的に話し合いをしましょう。クリエイターの皆さんはプロの方々なので、その方の考えるクリエイティブな銀座らしさのデザインを提案いただき、それについて話し合いましょう」という姿勢で協議をさせていただいています。様々な案件を協議するのですが、特に大きな開発や、銀座にとって非常に重要な開発の場合、私たちがどうしてそのような要望を行ったのかを、きちんと書面に残して要望書という形で出させていただいています。事業者の担当者さま、行政の区の担当者さまが替わっても、私どもがどういう意図でこういうことを申し上げたのかということが、きちんと残るようにしておきたいからです。

また、様々な法的な規制、色々な事業的な現実から、「努力したけれども、どうしてもできない」ということもあるわけです。そういうことに対し、「本当は、銀座はこうしたかったのだ」ということが後世にも伝わるようにということで、その要望書を書かせていただいています。今日いらしてくださっている設計者さまとも、色々と話をさせていただき、皆さん、本当に真摯に私たちの要望を受け止め、美しい建物をつくっていただき、感謝しています。そこで今日は、私たちがどのように要望してきたかを紹介したいと思います。

まず、GINZA SIXさんにどういう要望をしたかということです。

1　銀座という街の固有性の理解

・銀座の都市デザインの基本的な考え方と計画との基本的な相違。銀座の街の考え方を理解したうえで、計画をすすめていただきたい。
・江戸以来の歴史的街区構成。大中小の通りの連携による面的な街の広がり、歩くのにちょうどよいサイズ。間口の狭い多様な専門店が連続して連なる。
・建築物と街路とが一体となって醸し出す、変化にとんだ、人のための回遊空間の存在こそが「銀ブラ」の源泉である。歩行者に歩きやすく快適な環境づくり。

2　デザイン協議会との協議

・正式な都市計画提案書においても、銀座デザインルール中の「通り空間に対する考え方に特段の配慮を払う」と入れる。

3　道路の付け替え

・あづま通り延伸の道路は、地区施設として都市計画決定し、中央区が関与した形で、将来にわたる担保措置を実現してほしい。

4　ファサードの外観

・巨大で無表情な壁面の露出は避け、空間の分節化を図るデザイン、なおかつ銀座にふさわしいクリエイティブでオリジナリティの高いデザイン。
・銀座通り側では沿道部分への開放性を確保。
・みゆき通り、交詢社通り、三原通りも同様。各通りの個性を生かし、にぎわいの連続性を生むような作り方をお願いしたい。
・できるだけ短いピッチで商業施設と出入りできる工夫を。狭い幅員の通りに対して少しでも圧迫感を感じさせず開放感を持たせる工夫として、ショーウィンドウを設ける、薄い店舗を張り付ける等の工夫を求める。
・店名ロゴ、業態案内を含め、美しき店舗の連続。今後の銀座の模範。テナントデザインもデザイン協議。

5　南北の通り抜け

・従来の通り機能を継承したうえで、荷捌き駐車や渋滞等の解消に努めてほしい。
・明るさ、快適性、防犯への懸念。安心安全への配慮。歩行者が夜でも安心して歩ける環境づくりを。
・ハシゴ車を含む緊急車両や観光バスが十分に通れる高さ、渋滞しても緊急車両が通過できる道路幅を求める。
・パサージュの設置をお願いしたい。路地の大切さを理解してほしい。

6　東西の通り抜け

・地上からなるべく自然なかたちで、わかりやすく三原通りに抜けられる工夫。

7　観光バスステーション整備

・観光バスの駐車場問題について、中央区とともに検討する。将来の交通システムの一環としての位置づけを。
・みゆきからの大型車両誘導は控える。観光客が溜まるのでなく、そこから銀座の街に出ていく工夫をお願いしたい。
・バスターミナルに特化せず、水と緑の豊かな空間として整備、休んだり憩える気持ちのいい空間。

8　地下道

・あづま通りへの配慮。賑わいを減少させず増加させるような工夫を。

9　多目的ホール

・帰宅困難者一時受け入れ施設を。
・地域貢献として全銀座会主催イベントへの協力をお願いしたい。銀座全体の文化発信力を向上させるような内容。

この要望書は中央区区長、東京都知事、再開発準備組合理事長、中央区都市整備部長、谷口吉生先生の事務所、施工者である鹿島建設さま等にこれを出させていただいた、そのまとめです。

一つは銀座という街の固有性を理解してください、ということをお願いしました。銀座の都市デザインの基本的な考え方と、最初に提案いただいた計画が、基本的に相違があるのではないか。最初に超高層の提案をいただいたわけ

ですが、高さを伸ばし、周りに公開空地をつくるという都市デザインのあり方は、銀座としてはあまり望んでいない。銀座は先ほどから出ている界隈性、路地の楽しみなどを大事にしているところです。また、粒が並び、賑わいが連続しているような街並みを大事にしているので、そこをしっかり理解をした上で開発をしてください、とお願いしました。

江戸以来の歴史的な街区構成、歩くのにちょうどいいヒューマンスケール、それから大中小の通りの連携による街の広がり、そういうことをちゃんと調べてください、ということ。また、銀ブラの楽しみですね。銀ブラの源泉になっているような、歩きやすい環境づくりに配慮をお願いします、ということを言いました。

二つ目としては、デザイン協議会と徹底的に協議をしていただきたい。正式な都市計画提案書というものが出されるわけですが、その中にも私どもがつくっている「銀座デザインルールに配慮をする」と入れてください、とまでお願いしました。また、先ほど坂本さんから話があったように、道路の付け替えをしています。道路の付け替えも、先ほど江戸時代の地図も紹介がありましたが、あの頃からきちんと銀座は碁盤の目で出来上がっています。その街区の構成が銀座らしさの源泉でもあると考えています。そこで、その付け替えをするとしても、例えばそこは私道だから、将来はつぶして売り場にしようという発想にならないように、都市計画決定をしていただきたいということをお願いしました。

また、一街区を丸々埋める開発なので、ファサードの外観はそこがのっぺりと一面にならないように空間を分節化していただきたい。大きな壁面が路面にそのまま出てくるのではなく、小さい間口が連続してつながるような。それでいて、かつ銀座にふさわしいクリエイティブで、オリジナリティの高いデザインにしていただきたいとお願いしました。

また、やはり大きな建物は街に対し閉じてしまいがちです。防災上からも入口をすごく少なくするので、そうではなく銀座通り側、沿道に開くお店をつくってほしいとお願いしました。それを銀座通りだけではなく、周り三方を囲っている区道に対しても賑わいの連続性が裏側にならないようにとお願いしました。実際にはそちら側はどうしてもエレベーターの裏側になったりするので、壁面が連続するのですが、そうではなくショーウインドーを付けるなどして、賑わいが連続するようにしていただきたいとお願いしました。

つまり、長く歩かないと入口に到達しないのではなく、短いピッチで中に入れるつくり方としていただきたい。もしできないのだったら、ショーウインドゥをつくってほしい。そんなことをお願いしました。また、ロゴ、業態案内など細かい看板もあるのですが、そういうものもちゃんと話し合いましょう、ということです。

それと南北の通り抜け。これは銀座通りと平行するあづま通りの延伸です。GINZA SIX に行かれた方は分かると思いますが、間を貫通しているトンネル状の道路があります。そこも夜中でも女性が安心して歩けるような、安心・安全な空間にしていただきたいということ。そこが渋滞などの交通問題を引き起こさないこともお願いをしました。

一方、二街区を合体するので、銀座の中に昔からあったような路地の通り抜けのようなものがどんどんなくなっている中で、二街区をわざわざ回っていくということではなく、中を通り抜けられて、なるべく自然な形で反対側の通り、銀座通りの裏側の通りに抜けられるようなつくりをしていただきたいとお願いしました。これは坂本さんに最後の最後の土壇場まで苦労をおかけして、あの中を朝７時から通り抜けができるようなつくりにしていただいています。

また、観光バスステーションができました。先ほど陣内先生からお話がありましたが、なかなか上に上れないという非常に困った事態が起きていて、それはまた別の問題で色々苦労しています。その２階に、三原テラスという公共空間ができています。そういうところのつくり方を、水と緑の豊かな空間にしていただきたいということもお願いをしてきました。また、あづま通りの地下道をつくることに対して、地上の通りの賑わいを失わせないこと。それから、多目的ホールは観世能楽堂として実現しますが、そちらについても色々意見を言わせていただいていました。

次に、東急プラザ銀座への要望です。

1　西銀座通りとの関係

・回遊性を重視し、低層階を開放的に。
・銀座のヒューマンスケールを大事に。
・７～８丁目に向かう人の流れをつくる。
・テナントにかかわらず、施設の一貫したコンセプトがストリートレベルのファサードのデザインでも表現できるよう求める。
・ファサードデザインについては、テナント誘致後も協議継続。テナントにもデザイン協議の趣旨を伝え、協力していただくようお願いする。

2　銀座の顔づくり

・数寄屋橋交差点への顔づくりが重要。
・できるだけ人にやさしい、親しみの持てるビルに。
・歴史に残る、銀座の新しい魅力と価値を生み出すビルに。

3　小学校との関係

・区立泰明小学校との関係を大切に。日照や通学路の安全確保について、小学校との十分な打ち合わせを。

4　周辺環境への貢献

・数寄屋通り、公園が暗いため明るくし防犯や公園環境の改善に貢献してほしい。
・数寄屋通りの車の流れが良くないので解消できるような工夫を。

5　地下の活用

・地下の複雑な動線をすっきりし、地下鉄との流れをスムースにする。晴海通りによって分断されている１-４丁目への流れができれば望ましい。

6　銀座に必要な施設の希望

・駐輪場の設置。
・ひとやすみできる場所、カフェ、文化施設、銀座から文化発信できるようなイベントができる公共空間づくりがビルとしての価値を上げるために非常に重要。

7　銀座ブランドの確立への貢献

・商業の質、グレードが銀座にふさわしいかどうか。
・銀座の価値を確立させるために貢献するという意識を持っていただきたい。

一つは西銀座通り（外堀通り）は、新橋寄りに向け人通りが少なくなっているところがありました。そこで、そちらに向かう流れをつくってほしい、ということをお願いしました。それから、GINZA SIX さんと同様に、外に向かって開いた店舗をつくっていただきたいということをお願いしました。東急プラザ銀座さんは全部、店舗が西銀座通りに向かって開いていると思います。中からはもちろん入れるのと、両方に開けているということです。

２番目として銀座の顔づくりです。数寄屋橋の交差点という非常に重要なところですし、今は東京ミッドタウン日比谷ができましたが、あちらからの人の流れがこれからもっと増えるだろうということが予測されました。そこで、ここが銀座の入り口なのだということで、ちゃんと顔づくりをしてほしいとお願いしました。なるべく人にやさしい、親しみのもてるビルにしてほしいということもお願いしましたし、歴史に残る銀座の新しい魅力と価値を生み出すビルにしていただきたいということもお願いをしました。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、銀座には区立の小学校、泰明小学校があります。東急プラザ銀座は泰明小学校のすぐ隣にあり、そこは通学路になります。日照の問題もあるので、そこはよくよく話し合ってほしいということもお願いしました。これは雑談ですが、建築中に泰明小学校で全銀座会が主催する子どもたちのイベントがありました。その日に「これは工事の音がうるさい」ということに東急の担当者の方が気がついて工事現場に走り、その日は工事を止めていただくこともありました。

周辺環境への貢献ということで、泰明小学校の隣に公園があります。東急プラザ銀座さんと一緒に東急さんが公園の再整備をやってくださいました。それまで数寄屋橋公園は少し暗くて、夜は何となく近づきにくい感じの公園でした。しかし、今は非常に明るく、緑も豊かで、だからといって夜も緑に埋もれすぎない、非常に明るいきれいな公園にしていただきました。今、とても賑わいが増えているかと思っています。ありがとうございました。

それから、地下の活用もお願いしました。また、銀座に必要な施設の要望ということで、駐輪場の設置、一休みできる場所、カフェ、文化施設、それから銀座から文化発信できるような、イベントができるような公共空間づくりがビルとしての価値を上げる。ということでお願いして、キリコテラスや６階のラウンジなどをつくっていただきました。

また、これは東急さんのことだけではなく、今地区計画全体の問題ですが、商業が用途として増え過ぎているところがあります。一方で、事務所機能も必要ではないか、また他の用途も必要ではないかということで、そういうことにもぜひご配慮いただきたいとお願いしました。

次に、GINZA PLACE への要望です。

1　象徴性の高さに対する配慮

・4丁目交差点という場所性から、繊細かつ高品質に作られている印象が重要。デザインを生かすためにも完成度の高い建築上の工夫を。

2　側面のデザインへの配慮

・周辺の建物が低いため、周囲から建物の側面が見えてしまうが、銀座にとってはどの面も重要。いかにも「裏側」というつくりではなく、側面にもファサードのデザインがつながっているような、ひとつの建物として意匠上の工夫をお願いしたい。

3　サイン計画

・低層部、上層部のテナントサインは、すべてのテナントをわかりやすく、ビルと一体的にデザインしていただきたい。建物自体が企業を象徴するビルなので、ビルサインはシンプルな表現を。それによって、広く長く愛されるビルになる。

4　照明計画

・照明計画については適宜ご相談いただき、試験点灯等の機会には、立ち会わせていただきたい。
・光によって季節感を出すことは街の賑わいにつながるので良い試みだが、光の強さ、色味によっては周辺への影響も懸念されるので事前に確認させてほしい。

5　デジタルサイネージ

・デジタルサイネージの設置については、ガラス窓を通して見えるようにするなど、通りに対して直接的ではない表現方法を考えていただきたい。繊細なファサードデザインを尊重することが、建物の品格を維持することにつながる。
・デジタルサイネージは技術が発展途上。象徴的な場所なので、技術が進歩しても対応できる設備、設置方法を検討していただきたい。

6　テナント

・テナントについては、客層、性格がどのようなものか、早めに教えていただきたい。

7　外装

・窓のサッシおよび外装の下地を隠す目隠し板の設置。さらに、目地位置、外装面の色、テクスチャーなどを、モックアップや模型などで早めに確認させていただきたい。

8　広告

・壁面広告、ガラス内側からの広告は控えていただきたい。

ご承知のとおり４丁目の交差点という、銀座にとっていちばん大事なところの建て替えということで、その象徴性の高い場所に対する配慮を、非常に強くお願いをしました。

また、先ほどの GINZA PLACE さんの写真で分かるように、正面から見ると白く美しいきれいな網目のものですが、実は突出して周りから高いので側面や裏面が見えてしまいます。そこもきれいにつくってほしいということを強くお願いをしました。

また、サイン計画ですが、以前はこちらのビルは本当に大きな広告が出ていました。そしてなおかつ、色々なサインが出ていたのですが、今回はそういうサインを出さないということでした。その出し方について、また広告を出さない、サインを一つにするということでした。星印と SAPPORO と付いているのですが、その位置についても協議をさせていただきました。

照明計画ですが、夜は本当に美しい照明です。また、季節ごとに、照明の演出をしていただいています。今でも私どもはそれが変わるたびに、現地での決定に立ち合わせていただいています。もともとの計画のときにも、何度も街の人たちみんなで夜８時集合ということで見させていただきましたし、今もそういうことをさせていただいています。また、デジタルサイネージを付けるという計画もあり、そ

の付け方についても色々な議論をさせていただきました。
テナントについての議論、それから外層の網目の向こうから内側のサッシが見えてしまうのではないか。そういうことについてのやり方も、議論をさせていただきました。壁面広告、ガラスの内側からの広告もやめてください、ということでお願いしました。

このように、個別にうるさいことを申し上げて申し訳なかったのですが、それでは、銀座は大規模開発について、どのように考えているかということを簡単にまとめさせていただきます。銀座は本当に間口の小さい、粒の小さいビルが並んでいることが一つの特徴です。色々な条件から、どうしても共同化の方向に向かわざるを得ない部分があります。ある程度の共同化は仕方がないと思っているのですが、原則としては街区の共同化、建物の大規模化、超高層化は望んでいないという姿勢だと思います。
しかしながら、それを絶対にだめ、反対ということではありません。なぜなら小さいビルでは絶対にできないことがあります。大規模開発だからこそできることがあります。それは先ほどから話に出ている、豊かな公共空間の創出です。銀座には広場もありませんし、芦原先生が言ってくださったような小さな広場もありません。こういう中でどうか豊かな公共空間をつくっていただきたいと、お願いしたいと思います。また、地域防災ということで、帰宅困難者への対応や備蓄品などのご協力もいただいています。

大規模開発に対する考え方

・ある程度の共同化は仕方ない。
→ が、、、原則として街区の共同化、建物の大規模化、超高層化は望まない。
・大規模開発だからこそできること。
→ 豊かな公共空間の創出。地域防災、公共貢献。

大規模開発への要望

・賑わいの連続性。
→ 建物として閉じず、路面（歩行者）に対し、分節化され、開かれた面をつくる。
・一体化したデザインと同時に、店舗ごとに個性あるファサード

大規模開発への要望として申し上げたことをまとめていくと、賑わいが連続している、粒が際立って並んでいるという銀座の特徴を尊重してほしいということかと思います。建物として閉じず、路面に対し分節化され、開かれた面をつくることが大事です。これはGINZA SIXさんでものれんとひさしということでやっていただいたのですが、一体化したデザインと同時に、やはり店舗ごとに個性あるファサードをお願いしています。
先ほど陣内先生からご紹介いただいたような地区計画を１９９０年代の終わりにつくり、そして高さ、容積率、壁面後退を決めてきました。実は、今、その見直しの議論を中央区としているところです。銀座は建物、ハードの部分については、しっかりとした決まりをつくりました。それから、デザイン協議という、デザインに対し銀座らしさを皆さんにどうご理解いただくか、考えていただくかという仕組みもできています。
しかしながら、時代が前の地区計画の時期から変わり、人口減少、少子高齢化もあります。また、観光客が非常に増えてきて、ホテルが増加しています。消費の構造も変わってきていると捉えています。そういう中で、商業床だけを増やす街づくりから、住宅を取り入れて夜間人口を加味した用途のバランスを考えた街づくりへと、少し舵を切りたいと考えている次第です。
また、建物についてのルールはできましたので、大げさかもしれませんが、次は銀座における行動指針のようなものについて考えています。商売の仕方や振る舞い方、銀座に来ればどんなアクティビティがあって、どんな楽しみ方があるのか、そういうことを、もう少し積極的に打ち出していけるようなものが必要なのかと考えているところです。
銀座は伝統と革新と言われますが、ずっと変化を続けている街です。関東大震災、戦災では全部焼け、そこで、半分ぐらいの住民が入れ替わっている街です。ですから、決して何かを守ってきた街ではありません。関東大震災の前に福原信三さんという、資生堂の社長がつくった本の中で、その時点ですでに、「ああ、もう僕の知っている銀座はなくなってしまった。こんなに変化が激しい」と書いてあります。
それなのに震災の後、「やはり銀座は銀座らしいわね」、そして戦争の後も「やはり銀座っていいわね」といろんな方が言っている。そこが銀座の凄いところだと思います。これからも変化はどんどんすると思いますが、それでも「銀座らしい」と言ってもらえるためにはどうしたらいいのか。それを私たちはいつも考えています。

（陣内）どうもありがとうございました。銀座の皆さんがそれぞれの建築、大型の建築に、本当に色々なことをおっしゃった。しかし、設計する側からしても、それを受け止め、それを反映できれば質がものすごく上がるし、街に貢献できるということで充実感があったと思います。
ただ、できなかったこともたくさんあっただろうと思います。例えばGINZA SIXの表通りは非常に見事です。しかし裏、横、裏手、は狙ったものができているのかどうか。
（坂本）実はのれんは全周にあり、GINZA SIXとしては駐車場出入口を建物の真ん中に入れたので外周が全部ファサードになりました。どちらかというと銀座通りにのれんが目立つのですが、他の面ものれんは一応存在しています。
ハレの場の非日常ののれんではなく、どちらかというと建築本体が表現する日常ののれんとして、それがルーバーであったり、偏光のフィルムであったり、そういうものに

配慮をして、表通りほどのにぎやかさはないのですが、裏には見せないファサードをつくっています。

（陣内）ありがとうございます。たくさんお聞きしたいことがありますが、時間がなくなってきました。今銀座の色々な状況が変化していて、機能、建物のあり方、用途もバランスよくとか、色々話がありました。ライフスタイルも含めて日本の状況は本当に変化しています。その中でどうしたらいいのか。三浦さん、お願いします。

■ 銀座の今後

～消費社会の終わりと真のパブリックの模索～

（三浦）三浦です。今日私はアウトサイダーであります。中国では有名ですが、皆さんの中ではあまり有名ではないと思いますので最初に自己紹介をします。

ご紹介いただいたように、パルコの渋谷が全盛期に若い頃を過ごしました。１９８７年に『「東京」の侵略ー首都改造計画は何を生むのか』という本を書いて以来、ずっと東京の郊外の研究をしてきました。「東京の侵略」を出すために陣内先生と知り合いになって以来、様々なお付き合いをさせていただいています。そして、今日も銀座という人生史上、初のテーマについて語ることになる次第です。

郊外研究の流れで、ロードサイドの大型ショッピングモールの増加と中心市街地の衰退についても問題視して、２０００年来にそのような本を書いてきました。『ファスト風土化する日本　郊外化とその病理』では、今日もいらっしゃっている蓑原先生の本を引用し、もっとこういうことを言う都市計画派が増えてほしいと書いた覚えがあります。ファスト風土でもない街をもっと調べようということで、高円寺を研究したり、陣内さんと中央線の古層を探ったり、横丁だ、下町だということも訪ね歩いたりしました。

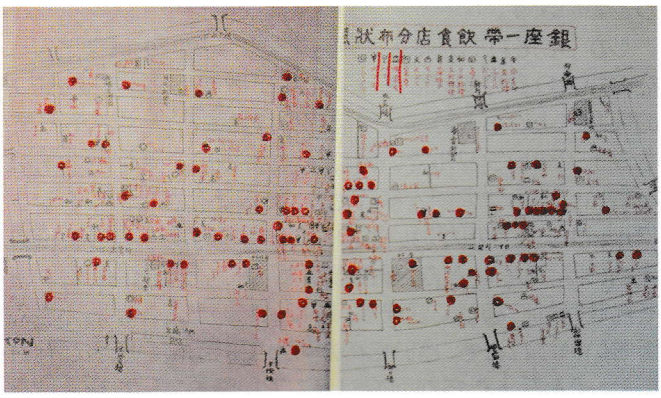
本来は消費を考えるのが仕事ですが、中国で今売れているのは７年前の『第四の消費　つながりを生み出す社会へ』です。その前の年にシェアについて提言をしました。実は２００２年からシェアについては考えていました。そのときに隈研吾さんと座談会をし、それを連続ということで、産経新聞で隈さんとの対談もしています。消費とか、都市とか、たまに建築とかにもチャチャを入れている人間です。

最近皆さんは銀ブラをしたことがありますか。「銀ブラをしたぞ」という方は手を挙げてください。けっこういますね。偏っているなあ（笑）。銀座というテーマですから、いらっしゃると思いますが、もし新宿でやると、いないと思います。吉祥寺でやってもいないでしょう。これだけ人数がいても、全くいないことはないですが、パラパラだと思います。

私は地方出身者ですし、大学は三多摩の奥でしたから、銀座なんてところはほとんど縁がなかったです。パルコは日本の中心は渋谷だと思っていましたし、その頃は先生がおっしゃったように銀座は少し衰退気味でしたので、銀座は私の人生において重要な地位を占めたことはありません。

私の場合、やはり銀座と言えば思い浮かぶのは銀ブラです。銀ブラという言葉がどうしてできたかについては諸説あるようですが、私の知る限り平岡権八郎という新橋の有名料理店花月楼の経営者からできた言葉です。義理のお父さんが都踊りをつくった平岡廣高という人で、京急沿線に花月園をつくった人。その奥さんがたいへん美人なのですが、今で言う読者モデルで、凄い人気だったらしいです。その養子が権八郎で洋画家でした。先生は黒田清輝で、岸田劉生とも付き合いがありました。また小山内薫、山田耕筰、市川猿之助とも付き合いがあって、永井荷風とは清元仲間で、新橋演舞場の取締役。帝国劇場の舞台装置も手がけた。それで仲間同士が集まる場所としてカフェプランタンを開業した。いつも彼は仲間とぶらぶらしていたので「銀ブラ」という言葉が生まれたそうです。

ということで、何が言いたいかというと、これを読むと銀ブラは高級品を買って歩いていたのではなく、カフェ、料亭や芸者さんとかの世界をぶらぶらしていた。今で言うコト消費をしていたということですね。



これは今（こん）和次郎がつくった地図にサインペンで赤丸をつけましたが、カフェとバーと喫茶店です。凄い数です。現在よりずっと多いのではないでしょうか。いかにぶらぶらしてしゃべって、「そいつは面白いな。今度そういう仕事をしようじゃないか」とか、「今度あそこにあんな店をつくろうじゃないか」という話をしていたのではないかと思わせる。永井荷風も小山内薫も、こういうところを歩いていたことが感じられる素晴らしい地図だと思います。ということを最終的な落としどころにしたいと思います。

『第四の消費』は中国、他にも何冊か訳されています。今度アリババに呼ばれました。中国は最近、新聞をにぎわせているように、経済が少し落ちています。みんなブランド品を買いました。次は何ですかと、次が気になっていま

す。みんなインターネットで買い物をするので小売店は売れません。だから、小売店はこれからどうするのかという問題意識があるので、次の消費は何なのかということで相談に来るわけです。しかし、アリババが私の話を聞いたら第四の消費的に、もう３年後には日本中の消費をアリババが支配しているかもしれません。そういう大きな革命があるかもしれないということです。

そもそも第四とはいったい何か。第一の消費は、まさに資生堂さんに象徴されるような、銀座が発達した時代です。丸ビルに勤めるお父さん、田園調布に住む家族、そして遊園地に家族で遊びに行く、百貨店で買い物をする。こういうライフスタイルができたわけです。ちなみに、丸ビルができたのも、資生堂チェーンストアができたのも、田園調布ができたのも１９２３年と同じ年です。

第二の消費社会は、それが一気に大衆社会化して、いわゆる高度成長で一億総中流になった時代です。業界で言えばスーパーマーケットなどが郊外でどんどん発展していき、そのため渋谷、新宿、池袋といった西側ターミナルが発達した時代に対応しているかと思います。

第三の消費社会はブランド消費とか、要するに量を売る時代が終わり、質の時代になっていきます。そうすると、１個当たりが高いものを売らなければいけなくなるので、ブランドやデザインなど付加価値を高める消費が大事になった時代となります。こういう時代の象徴が渋谷だったろうと思います。

しかし、それも日本人は飽きてきて、第四の消費に入ったのが２０００年代に入ってからだろうと思います。モノの豊かさよりも人間的なつながりが大事とか、買わなくてもシェアやレンタルでいいじゃないかとか、高齢社会になっていくからケアが大事だとか、高級品を買うよりもシンプル、ナチュラルがいいとか、欧米志向があまりなく日本志向のほうがいいとか、都会志向よりも地方が面白いとか、そんな時代になってきます。新しいものがどんどんできる街もいいけれども、古いものが残っている街のほうが魅力だと、そんな人たちが団塊ジュニア以降の若い世代で増えてきていると思います。

２～３週間前の土曜日に古本屋に行き神保町の裏通りにあるおなじみの喫茶店「さぼうる」に行こうと思ったら大行列で入れません。若い女性が行列をしています。先月は何とか入れたのですが、満員です。今昭和喫茶ブームなので、新宿の「らんぶる」などは、７年前は僕しかいなかったのですが（笑）、今満員で入れません。そういう時代になっています。

これは私の住んでいる西荻窪で、最近古い喫茶店のおじいちゃんはもう仕事を辞めました。昔だったら建て替えて白いビルができるのですが、今は古い喫茶店が大好きな人が多いので事業継承する会社ができています。村田商會という会社です。このまま経営だけ変わり、同じ喫茶店が始まりました。そういう時代です。

上海も万博までバンバン建てましたが、今行くとショッピングモールに人はあまりいません。昨年、上海に講演しに行きました。ここは横丁が人気です。観光客も外国人も若い人も、横丁にはたくさんいました。東京で言うと、月島のような地域が変貌した例です。

第五の消費社会は何かと、中国人に必ず聞かれます。今日初めて少し書きましたが、第四の消費社会がさらに完成すると思います。「小売業は消滅します」と柳井さんが言っています（笑）。情報産業とサービス産業だけになる。モノはもう店で買わない時代になります。では、街には何がある、商店街はどうするのか。マッサージ屋さんやスナックとか、人と人が直に対面してサービスをするもの。それしか必要がなくなってくるのではないか。マッサージはネットで買えません、スナックのママもネットで買うわけにはいかないので、ネットで呼ぶかも知れませんが、とにかく対人的なサービスが主流になるだろうということです。

それから、ファスト風土化ということを先ほど言いましたが、今都心のファスト風土化が起きているのではないかと、私は懸念しています。本来は郊外ロードサイド。

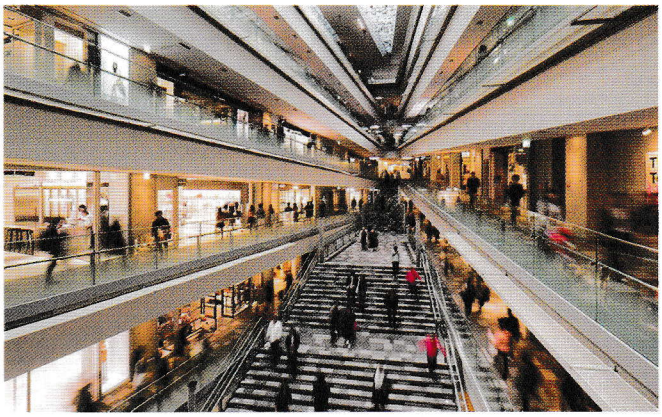
これは秋田県横手市の写真です。かまくらの横手でも今は日本中同じ風景になったのです。

これはどこに行ったか、もう忘れました。こういうショッピングモールが２０００年代に日本中に増えました。

これはアメリカです。ご存じのようにアメリカでは、もうショッピングモールがつぶれています。私が行った十数年前には、ウォルマートが出てきて古い地域のモールがつぶれていましたが、今はもちろんネットのおかげでつぶれるわけです。これはコロラド州、ニューメキシコ州ですが、このような廃墟がいくらでもあるわけです。

フランスもファスト風土化しています。オギュスタン・ベルクさんに呼ばれ、２００４年にフランスの大学で講義をしました。なぜ私が呼ばれたのか分からなかったのですが、行ってみたら郊外化が問題でした。また、移民の問題もあることが分かりました。フランスは郊外に行くと、日本と同じようなファスト風土が広がっていました。これもパリのすぐ外側ですが、千葉と同じです。

こういうファスト風土化の資本が都心にどんどん押し寄せてくる。資本というか、そのノウハウが押し寄せてきている気がします。



これはネットからの切り張りですが、恐らく表参道ヒルズです。もうどこだか分からない、一緒です。

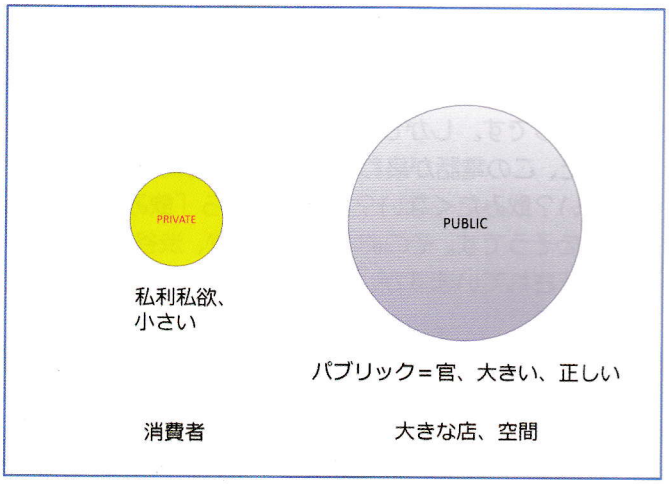
左は確か、岡山の駅前のイオンです。右は品川のエキナカです。一緒です。だから品川に行っても、岡山駅前に行っても、表参道に行っても、同じようなものができている。売っているものの単価が違うぐらいの話です。こういうもので都心、都会とか……。こういうことを進めておきながら都心の魅力といっても、どっちなのよと思うわけです。

再開発された街が郊外でも、地方でも、都心でも、同じようになってしまったので、ごく普通の若い女性は「さぼうる」に行ってしまいます。横丁でホルモンを食べます。そういう時代になりました。そういうものをつぶそうとする地上げ屋さんが、渋谷の「のんべい横丁」の焼鳥屋さんに「早く土地を売れ」と、電話をかけて脅してきた時代があったそうです。しかし、その焼鳥屋の社長が偉かった。「あなた、この電話が終わった後、仕事を終わって横丁で飲みたい？飲みたくない？」と言ったら「飲みたいなあ」と言ったそうです。そのおかげかどうか、渋谷があれだけ再開発をされていますが、渋谷のんべい横丁が残ることになりました。

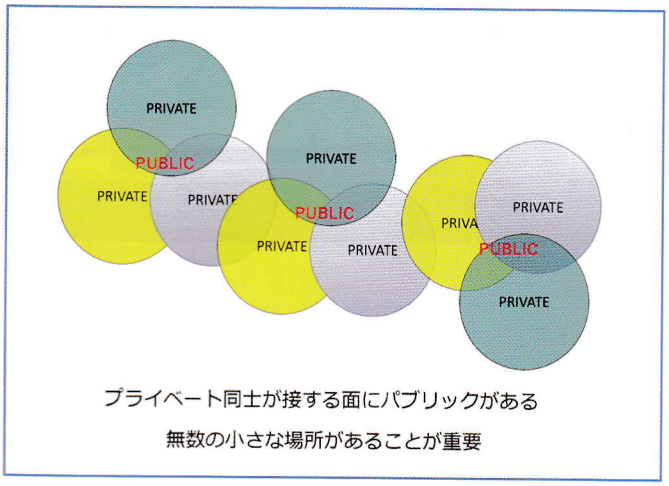
これは高円寺です。まさに人間が最も楽しそうにしている街だと、私は思います。外にどんどん、街に、ストリートにはみ出してお酒を飲んでいる。でも、本当ははみ出してはいけないのですね、道路の上だから。

これはアメリカのフロリダのニューアーバニズムの住宅地ですが、ちゃんと焼鳥屋の屋台がある。ということがあり、こういうものが銀座にありますか？若い女性が行列をする場所があるのでしょうか？ということを問いたいわけです。

それから、消費。特にモノを買う消費というものに、少なくとも日本人はこれから５年後、１０年後には興味を失っていくと思います。中国人ですらそうです。そのときに第四の消費社会の中で重要になるのが、ソーシャル、パブリックとかの人とのつながりであるということです。言うまでもないと思いますが、従来パブリックとプライベートというと、日本の場合は特にパブリックは役所のようなイメージがあり、大きくて正しい。そして、プライベートは何をするか分からないものだ。そういう考え方があったわけです。消費に当てはめても大きな店をつくり、消費者をどんどん呼び集めればいいのだ。そういう時代がつい最近まであったわけです。



これが今若い人は、パブリックは役所でなく、大きいものではなく、私とあなたが付き合い、そこに何か場が生まれる、それがパブリックではないのかと気がつき始めているような気がします。先ほど竹沢さんが「粒」とおっしゃったけれども、最初の粒は個人なわけです。その個人個人がプランタンでコーヒーを飲む、カフェでお酒を飲む。そこから何か楽しい時間が生まれ、新しいビジネスのアイデアが生まれる。そういうことこそがパブリックではないかという問題提起です。



それに対し今まで議論があった、お三方が一生懸命考えたパブリックというのは、それはそれでいいのですが、私から見ると行儀がよすぎる、そしてかつ消費者である気がします。ちゃんと消費をしてくれて、行儀がいいパブリックが集まる公園がつくられていく。銀座ではそうでしょうが、そこも少し疑って、もっとだらだらして、あいつ何やっているのだろうね、という人がいたほうが、都市っぽいのではないか。

それからもう一つ、竹沢さんの話にあったように、銀座には美術館がないのですね。この前このメンバーで打ち合わせをした後、私は六本木に行き、DESIGN SIGHT で民藝展を見ました。やはり六本木は森ミュージアムも頑張っていらっしゃるし、東急は Bunkamura も頑張っているし、今休んでいるけれども清澄白河は現代美術館があったり、江戸博も最近面白い展示をするので両国に行き、ついでに下町で酒を飲んでくるふうになっています。これに比べると、僕は銀座であまり過ごさないですね。小さなギャラリーだったら西荻窪にもたくさんあるので。さて銀座さん、大丈夫ですかね、という気がします。

先ほどの高円寺の汚い飲み屋ですね。銀座にあったら排斥されそうな飲み屋ですが、気軽に誰でも集まれるたいへんいい場所で、私も週に１回はこの辺で飲んでいます。

ここが行政からにらまれ、行政が嫌がらせをしたのですね。飲んでいるところに柵を立て、出られないようにしました。今のどよめきは何ですか。当然だということでしょう。これで終わらないのが高円寺です。何をしたか。

柵に板を載せ、そのまま飲み始めました（笑）。これこそがパブリック、これこそが市民の力、これこそがぶらぶらする人間の自由な発想です。（笑）

杉並、西荻あたりはこういう発想豊かな行動力のある個人が多く、古い家を買い取ってカフェ、ギャラリー、色々なカルチャースクールをやる若い夫婦がいたり、そこに八百屋さんが来てみたり、あるいは自分の家を改造して、老若男女が集まって自分で料理をつくり、みんなで食べようという場所をつくる人がいたりですね。

これは若い建築家が、横浜につくったリノベーションしたコミュニティスペースです。やはり毎週のように住民たちがスナックやバーを開いたり、コンサートを開いたりしています。私もここでDJをやったら史上最大の集客をして、床が抜けるかと思われたのですが。

多摩ニュータウンに建築スナック

右下が多摩ニュータウンの駅前ですが、本当につまらない駅前です。つまらねえなと思った若い建築家が、建築事務所をスナックにして人集めをしたら大賑わいでした。

あるいは玉川学園という上品な、それこそ銀座で買い物をしそうな人たちがたくさん住んでいる住宅地でも、屋台を出してスナックを始める３人子どものいるお母さんが出現しました。それは面白いというので、私はもっと火をたきつけ、年末におでん屋を開いたところ、何と住民が１００人集まりました。こいつは面白いというので、つい最近も本格的な銀座風スナックを開店しました。陣内先生をお誘いしたのですが、寒いさなか、舟に乗って川下りをするという酔狂な趣味をお持ちで、残念ながらいらっしゃれなかったのですが、もし来ていただければ、この３人の美女がお相手をしたのですね（笑）。

３時間いて３５００円。３時間遊んで、ということではないですが、飲み食いして３５００円でした。銀座の１００分の１で、銀座に近いかどうかは銀座で遊んだことがないので分かりませんが、私としては十分満足のいく時間を

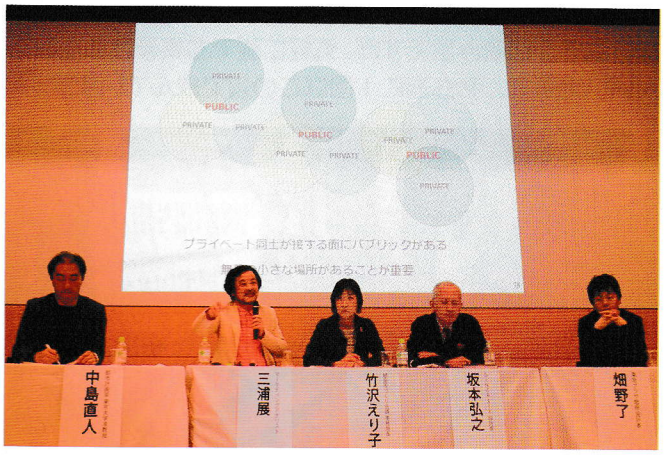
過ごすことができました。

パブリックというと、今最も注目されるのが喫茶ランドリーです。森下にできましたが、グッドデザイン賞を取りました。コインランドリーの周りに自由なスペースをつくり、「何でもしていいよ」と言うと、仕事をする人、踊る人、歌う人、ミシンをかける人が現れました。ある日行くとディスコになっていた。これは昨年、グッドデザイン賞の特別賞を受賞しています。

あるいは谷中では、磯崎新事務所にいた宮崎君という非常に優秀な建築家が、色々なリノベーションで街の活性化を図っています。中国でも建築家の李國欣という人たちが、あるビルを改修して住み、働けて、みんなが集まれるビルをつくっています。

このような事例はこの本に書いているので、後でじっくりお読みいただければと思います。

しゃべりすぎました。すみません。時間がないので尻切れトンボですみませんが、まとめずにこれで終わりたいと思います。



（陣内）どうもありがとうございました。三浦さんの言うことは当たるのですよね。今まで現状の分析が緻密で、データの解析も凄いです。人のライフスタイル、人間の意識の変化、消費行動、それと都市の関係。その少し先を予測するのですが、シェアですね。シェアハウス、シェアオフィスは彼が言い出しっぺの一人ですが、今本当に当たり前になりました。

これ、当たりますよ。銀座も真剣に考えておかないと。というか、ヒントがたくさんあると思います。つまり、はじめに見せてくれた今和次郎の、みんなが集まっていたカフェ、バーですね。ああいうところが人と人とのつながりで、それが文化を生み、情報を生み、クリエイティブだったわけです。そういう要素が消えてしまい、エネルギーがなくなり、文化発信機能もミュージアムがない。本当はギャラリーとか、企業が持っている面白い企画性の高いところがたくさんあったのですが、今京橋にはありますけれども、銀座になくなってしまいました。

というわけで、やはりいい方向に行っていないのではないか。それを受け、中島さんと竹沢さんにお願いします。今日の全体を振り返りながら、今の衝撃的な話もありました。あと、人間のアクティビティが世界的にも重要になっています。しかし銀座は、いくらホコ天の真ん中で気持ちよく写真を撮っている人がいても、人がワイワイ楽しくやっているという海外の都市に比べれば、やはり何かが欠けていると思うわけです。

先ほど歩いていたら三愛のビルの下に、公園との間に最初から喫茶店があったのですか。カフェがありますね。

（竹沢）あれはドトールさんです。かなり前からです。

（陣内）ああいうものも努力の一つかと思います。とにかく屋台でも何でも出せるような状況とか、車を何とかしなければいけないというのもあるだろうし、また人がもっと元気にならないと、と思います。そういう点も踏まえて中島さん、お願いします。

（中島）今日は皆さんの話を聞いてとても勉強になりました。共通したパブリックスペースとか、ただ本当のパブリックではないという話とか、「そうだな」と思いながら聞

いていました。

しかし、銀座の最大のパブリックスペースは、もちろん屋上もあるし、建物の中もありますが、街路が圧倒的にパブリックスペースとしての可能性を持っているのではないかと思います。銀座通りだけを見ていると、これだけの街路という資産がある中で、もっと街路の使い方に多様性があってもいいのではないかと思います。

今銀座の内部の使い方としては、あまり工夫はないというか、外部のしつらえは非常に面白いものがあったり、きれいですが、「ここは車を止めなさい」という場所があるとか。そういうことができてくると、そこに面して先ほどのような新しいパブリックを楽しむ人たちが集まってくる場所ができてきたりする気がします。街路のあり方が一つ、大きなポイントです。

銀座の屋上や建物の中にパブリックスペースをやってくださるのはありがたいのですが、実際にはその高低さ故、アクセスが結構大変です。グラウンドレベルでやれることとして、街路を見直すことを銀座でこそやるべきだと思いました。

（陣内） ありがとうございました。本当にそうですね。銀茶会でそれぞれの派がお茶を路上でやったりするけれど、それがもう少し日常にできてくるといいと思います。竹沢さんはいかがですか。

（竹沢） 参考になるお話をたくさん聞かせていただき、ありがたく思います。銀座からの文化発信が足りないという話は、今若い世代、ある程度年齢のいった世代が銀座に集まると、それが必ず話題になります。実は、銀座通り連合会は今年１００周年なものですから、この前から何度か座談会をしています。その中でも、やはり文化発信が足りない、もっと路地的なものを大事にしなければという話が、銀座の人たちから本音として出てきます。

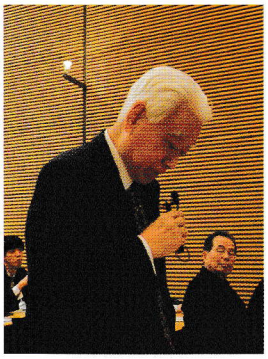
そういう気持ちを持っていることは、すごく大事だと思う一方、路地については新しくわざわざ通り抜けをつくるという工夫をしながら、しかし本当はつくるものではなくできるものなので、つくったからといって無味乾燥なものになりがちです。少なくともそういう思いを持ちつつ、やっていることはあります。

街路を使うために交通デザイン、グランドデザインを、２０１５年に私たちはつくっています。規制緩和については諦めてはいませんし、道路を使ったイベントをやったり、車の数を減らしていく、駐車場の問題とか、本当に一つひとつに取り組んでいるところだと思います。色々考えていて、原点は路地と銀ブラだと思います。先ほどお聞きしたようにカフェがこれだけあり、サロンがあり、みんなが集まる場所があった。それが銀座の原点だということを切実に思います。

その中でなかなか厳しいのが、銀座ではコーヒー１杯で１階の店が成り立たないということです。銀座に古いおそば屋さんがあり、そこに行くと必ず誰かに会ってしまう。時間をずらしていくと、また誰かに会ってしまう。そういう人気のおそば屋さんがあったのですが、そこもやはり１階でおそばが成り立ちません。ましてコーヒーとケーキだと、本当に大変だと思います。そういう問題を、どう乗り越えていけばいいのかが正直分かりません。そこだと思います。

だから逆に大きな開発をなさるところでは、カフェをつくってくださいとお願いしていますし、屋上の空間を使ってくださいということもお願いをしています。そういう思いの中に、街の人たちはいると感じます。

（陣内） どうもありがとうございました。色々深めなければいけない問題がたくさんあります。締めくくる前に会場の前の方にいらしている蓑原敬先生に。先生は２００３年からずっと専門家の立場で理論的、実践的、精神的な柱として、銀座のリーダーの方々と真剣に議論し、ここまで積み上げてこられました。全部、竹沢さんとタッグを組んでということです。今日は色々なポジティブな話も、課題も出てきましたが、ここでぜひ蓑原先生のお考えをお話しいただけるとうれしく思います。



（蓑原） ありがとうございました、蓑原です。銀座に関わらせていただき十数年、本当に幸せな時間を過ごせたと思います。先ほど中島さんの最後のスライドで出てきたように、日本の街の中で自分の街づくりや街を、自己了解の仕方だという形で、アイデンティファイしているような街はほとんどなくなってしまった。ヨーロッパでは、そういうものを頑強に守っているところもあります。もちろん、ヨーロッパも色々な意味で侵食されていますから、ある意味では文明の岐路として考え直さなければいけないところがあります。それにもかかわらず銀座はそういうことを守ってきたし、実はこれからもそれを守るべきではないかと思います。これは次世代の中島さん以下の方々にぜひお願いしたいことです。

ただ、今日あからさまに語れなかったことに敷衍すると、一つは銀座がこういう形でうまく２０世紀にわたって活動できた非常に大きな枠組みがあったということです。それは、中央区が都市計画という枠組みをつくるそのプロセスの中で銀座の人の意見を徹底的に聞くこと。銀座の人もまた銀座フィルターとか銀座の思いを、ちゃんと理論武装をした上で徹底的にその公共セクターである区と議論すること。そして、区はそこで納得したら都や国と闘ってくれる状態をつくり出していることです。

そのことは非常に大きいことですし、実は大変なことです。特に我々のようにアドバイザーで入ってくる人たちは、そこのところを一生懸命やらないとだめだということです。

中島さんにはこれから、ぜひそういう役割を果たしてもらわないといけないのですが、そこのところには、これからも非常に大きな問題があると思います。

ということは何かというと、実は今、国がやろうとしていること、都が考えていることは、三浦さんがおっしゃったような意味での消費社会的な意味で、本当に熟成した社会とは全くかけ離れた、相変わらず投下資本として有利だというような開発に向かって一生懸命やっている。その中で、この３つのビルを設計された方などは銀座と交渉しながら、実に豊かな中身をつくってはくれています。そうではありますが、恐らく長期的な展望からいくと、今三浦さんがおっしゃったような話に対し、どういう対抗力ができてくるのかが非常に大きな問題になってくると思います。

そのとき、はっきりしていることは二つあります。一つは明らかに街路をどういう形かで開放しなければいけないことです。日本でも１９７３年に旭川で買物公園をつくったときには、ミネアポリスのニコレットモールとかミュンヘンのノイハウザー通りと同じ時期にそういうことに踏み出したことがあります。しかし、いまだにそれを徹底的に都市計画の領域の中でシャットアウトして、街路を街路としてパブリックなスペースとして使われていないのです。これに対する闘いを竹沢さんはじめ、皆さんは一生懸命やっているけれども、これから非常に大きな問題になるだろうと思います。それは交通問題全般の問題として出てくるだろうということが一つです。

もう一つ、文化発信力がないことです。歌舞伎座の再開発のときに、私は演舞場との絡みで木挽町あたりを全体的に総合エリアとして、もう一度徹底的にやるべきではないかということを盛んに申し上げました。松竹の方で中に一部、賛同された方もおられました。しかし、実際には動いていません。私はあのエリアというのは、かつて木挽町という歴史を背負いながら、そういう可能性があるので、これからみんなが考えなければならない非常に大事な場所かと思います。

もう一つ、第五の消費社会に銀座がどう立ち向かうか。先ほどの三浦先生の話は、全く難しい問題です。私は、色々な形で階級社会が生き残ることは避けられないし、色々な形で資本の動きがさらに動くことは避けられない中で、銀座のフィルターや銀座の思いが持っているあるクオリティは絶対に売れるのではないかと思います。だから銀座では、先生がおっしゃるように単なるモノではなく、情報とサービスというものがそこに加わっている形でもって新しい展開を考えていかなければならない。

やはり、銀座はどう考えても公益にはならないわけで、そういう形での銀座の生き残り策をこれから考えていかなければならない。そういう問題が、恐らくわれわれ専門家としてお手伝いしている人間にとっても大事な問題なのです。これからもぜひそういう形での持続的な運動を続けていただくことを強くお願いして、お話としたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

（陣内） ありがとうございます。沢山の拍手が起きまとめていただき、ありがとうございました（笑）。

銀座の街の方々が銀座ビジョンのところで、最初からビジネス優先のようなことは絶対にあり得ない。社会、文化資本のような、そういう蓄積が結果的に経済発展につながるのが銀座だ。蓑原先生は１９９９年の段階でそうおっしゃっています。第五の消費の時代に来たときに、この考え方は重要です。求められるのは今のようにモノをストレートに買うだけではなく、もっと別の価値を生みながら、そこで体験できたり、共有できたり、楽しんだり、という場です。

それとオープンスペース、街路の重要性が強調されました。２年ぐらい前に槇文彦先生が『新建築』に出した、アナザーユートピアという論考がたいへん話題になっています。オープンスペースが重要であり、そこは公共性もあり、人と人の出会いでもある。そういうことが建築の世界で非常におろそかにされてきた。人と建物しか考えなかった。そのことをもう１回、みんなで反省しようということです。それを受け、色々な立場の人が、論考を書いた本がもうすぐ出ます。２月２５日ぐらいです。私も歴史的な視点から書きました。槇先生は自分より若い世代が書いた論考に全部目を通され、またご自身の意見をまとめられました。ぜひ読んでください。

銀座にとって、オープンスペースは非常に重要なテーマの一つだと思います。それは芦原先生がおっしゃっていたこととともつながります。というわけで、皆さんの協会の３０周年記念の景観シンポジウムで、銀座という素晴らしい舞台を借りてとてもいい形でテーマが議論されました。これは日本全体の問題ですし、協会の中で色々な立場でものをつくることに関わっている方々の仕事にも反映できる内容がたくさんあったのではないかと思います。パネリストの皆さん、ありがとうございました。（拍手）

発行　　2019年3月31日

発行者　一般社団法人 日本建築美術工芸協会

〒108-0014
東京都港区芝5-26-20　建築会館6階
TEL：03-3457-7998
FAX：03-3457-1598
E-mail：info@aacajp.com

この記録は、当日収録された音声テープ並びに使用された画像並びに配布された資料から編集されたものです。無断転載は禁じます。